
迷宮物語

小笠原明葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮物語

【Nコード】

N1640Q

【作者名】

小笠原明葵

【あらすじ】

突如出現した謎に満ち溢れる『迷宮』に身体一つで挑戦する冒険者達。

魔物を倒し、魔族と対峙する彼らの中、『血風の魔女』と呼ばれる少女、エルリアが本当の自分の姿を取り戻す為に戦い続ける。

その先に待ち受けるのは、漆黒の闇か、遍く照らす光なのか……

プロローグ

― 『迷宮』 62層 広い玄室 ―

轟音と共に魔法の炎が、雷が、吹雪が部屋の中で荒れ狂う。その度にその部屋を根城にしていた怪物達が咆哮のような悲鳴を上げて駆逐されていく。

それら全ての魔法が部屋の入り口付近に立つたった一人の豪華なドレスを身に纏った少女から発せられていた。腰まで届きそうな金髪がたなびき、碧色の瞳は鋭く細められ、襲い掛かってくる魔物を睨みつける。そして形の良い桜色の唇からは呪文を詠唱する『歌』が響いていた。

「我が呼びかけに応えよ！ 槍持つ戦乙女ゲイルスケグルよ。我が眼前に立ちふさがる敵を――薙ぎ倒せっ！！」

呪文の結唱と同時に少女の周囲に黄金色に輝く槍が複数姿を現す。それらの一本一本には敵を撃破する魔力が込められ、少女の裂帛の声と共に全てが一匹の魔物めがけて宙を疾る。

少女と対峙するのは一体の巨大な羽を広げ、邪悪な笑みを浮かべた禍々しい姿を持つ下級悪魔族レッサーデーモンと、その周囲を固める10匹以上の犬の姿をした双頭を持つ魔物ヘルハウンドであった。普通の人間であれば、それが軍属の精鋭であったとしても、間違えても一人で相手に出来るようなものではない。古強者の冒険者達によるパーティや、統制の取れた軍の一隊であれば戦えるのではないか、というようなレベルだ。

そんな敵を目の前にしてたった一人の、見るからに華奢な少女が一步も引かずに、むしろ優勢とも言えるような戦いを展開している。魔物の群れは次々と少女目掛けて押し寄せ、その鋭い爪でおよそこのような戦闘には不向きであろう絹製のドレスを引き裂こうと腕を振り下ろす。少女はその攻撃を手にしたショートソードで次々を

打ち払い、受け流すが、多勢に無勢。魔物の爪が少女の細く、柔らかな白い腕を切り裂くべく前肢を振り下ろす。だが、その攻撃は不可視の障壁により阻まれる。

少女の身体は魔法によって幾重にも防御壁が張り巡らされており、尚且つ心肺機能をはじめとする身体強化の魔法も施されている。その華奢でか弱い、温室で栽培されている可憐な花のような外見に似つかわしくない強力な攻撃力と防御力を少女は有していた。

熾烈な攻防の間にも複数の呪文を高速連続多重詠唱。身を護る光の盾と共に小さな炎の玉を無数に具現化させて襲い掛かる魔物どもを打ち据え、炎の雨を掻い潜ってきた攻撃を光の盾で受け止める。

レッサーデーモンからは空間の歪む不気味な音と共に闇の魔法が次々と放たれる。暗黒の炎や漆黒の雷が光をも吸収しながら少女目掛けて襲いかかってくるが、それらは少女のドレスに、あるいは真っ白な肌に触れた瞬間にその威力と効果を打ち消され、無に帰る。よく見るとドレスの至る場所に宝石が飾られ、それらが仄かに明滅しているのがわかる。全てが膨大な魔力を込められた『魔石』であり、一つ一つが魔力のエネルギープールでもあり、魔石そのものに対魔法、対火、対冷、対雷、対毒、対衝撃などの様々な効果が込められている。ドレスそのものも魔法によって大幅に強化されており、見た目とは対極の防御能力を有していた。『秘宝』クラスと言われる超がいくつもつくような高級装備である。

そのドレスは今や飛び散る魔物の血や肉片を浴び、美しいレースの装飾が施されたの生地に至る所が血で染め上げられていた。

「開け、煉獄地獄の蓋よ。全てを焼き尽くせ！」

魔物の群れの足元に闇の空間が開き、そこから巨大な炎の柱が立ち上がり、部屋を照らし上げながら数匹をまとめて消し炭へと変えてしまう。飛び散る火の粉が少女にも降りかかるが、魔石に込められた魔力が効果を発揮し、火の粉は少女に触れる前にその姿を消し去られてしまう。

「邪なる存在を許さぬ壮麗なる女神達よ、我が前に立ちほだかる魔

族にその鉄槌をつ！」

玄室に侵入って30分が経過した頃には部屋の中に立つのは華奢な少女と魔族の2体のみになっていた。10体以上もいた魔物は全て一人少女の繰り出す強力な魔法と小柄で力もなさそうな腕が振るうショートソードの斬撃によって床と少女をその返り血と消し炭で染め上げる材料に成り果てていた。

結唱した呪文により、少女の眼前に蒼い光の渦が出現し、そこから膨大な光の柱がレッサーデーモン目掛けて放たれる。

光はレッサーデーモンが展開する魔法障壁によりその威力を半減されるが、少女は立て続けに同じ呪文を詠唱。3本の光の柱が魔法障壁を打ち抜きレッサーデーモンの上半身を焼き尽くした。

どさり、と悪魔の下半身が床に倒れるが、それもすぐに塵となつて消えていく。

「ふう……」

額に浮かんだ珠のような汗をタオルで拭って息を吐く。同時に赤く染まったドレス全体がほんのりと発光。その光が収まった時には先程までの血や埃などは跡形もなく消えうせ、新品のような美しさを取り戻していた。

「さ、て、と」

少しの休憩で体力を回復させた少女は顔をあげて静かになった玄室をキョロキョロと見回す。その動きにあわせて腰にまで届く金髪の裾も宙に舞う。

さらにそこから数分が経過した時、部屋の中央に木製の宝箱が姿を現した。

少女が先程倒した魔族と魔物はこの部屋の番人であり、宝物を護る番犬でもあり、このフロアを統括するボスでもあった。

懷から一本の鍵を取り出して宝箱に近寄り、極短い詠唱。宝箱に仕掛けられているトラップの有無を走査する。

「んつと……罫はなし、か。じゃあ早速」

鍵穴に鍵を差込み、右に回すと、カチャリと音がして開錠されて

自動的に蓋が開き、内包する物を少女の眼前に曝け出した。

その背景

ラウラ暦1338年、二百年という気の遠くなるような長きに渡って繰り返されてきた大戦がようやく終結した。今や戦争のきつかけになった出来事は歴史の教科書に載るようになり、その当事国に至っては戦争が勃発した5年後に国土の6割が焦土と化して滅亡していた。

領土紛争と民族紛争の戦いを繰り返してきた人類はようやく手を結ぶ事になった。

だが、その要因は平和的な対話でもなく、一つの国が他国を全て圧倒したわけでもなく、ましてや一人の英雄が全てを解決したわけでもなく、突如として姿を現した洞穴だった。

その洞穴は最初からそこにあっただのかもしれないし、なかったのかもしれない。誰も気付かなくて、気付いた時にはそこから大量の魔物が湧き出ていたのだ。

しかも場所が悪かった。洞穴が出現した場所は戦争を繰り返してきた六カ国の中でも真っ先に滅びた国、既に人すら住まなくなった場所であり、戦争の発端となった事件が起きたレムルアイランドの首都跡地だったのだ。

魔物は手当たりしだいに拡散し、近隣各国の村や町を襲い、街道を歩く人々にも襲い掛かった。

洞穴が現れるまでもにも魔物は確かに存在していたが、数もそんなに多くなく、発見したら気付かれないように逃げ、兵隊にその事を告げれば討伐隊がそれを駆逐するというのが今までのパターンであった。

でも、今回はそうはいかなかった。

数が多すぎるのだ。

各国は緊急的に国家元首同士の会談を設け、戦争を後回しにして人類の脅威たる怪物の駆逐と、洞穴の調査を最優先とする旨の発表

を行った。

まずは旧レムルアイランド首都を各国精鋭の騎士団が封鎖。魔物がそれ以上外に出ないように何十人という魔法使いが巨大な魔方阵を組み上げ、その外側に頑強な塀と堀が設営され、そのまた外側に兵士の宿舎などを含む砦が急ピッチで建設された。

同時に世の中に蔓延るようになった魔物の掃討作戦が実施され、主要な街道の要所には軍が配備され魔物出現の報が届くと迅速にそれらに対処していった。

十五年かかって地上に出てきた魔物はかなりの量が掃討されたが、それでも未だに村や、街道を歩く人々が襲われるという事件はあとを絶たない。

そして、旧レムルアイランド首都は幾度にも渡る大規模な洞穴の調査、掃討作戦が行われたにも関わらず正体不明。洞穴の中はダンジョンのようになっていてその深さは現在公表されているだけでも四十層にも及ぶとされており、しかもそこには魔物が貯め込んだとされる金銀財宝や地上では採取できない鉱物、数々の秘宝と言われるようなレアなアイテムが眠っているということが判明し、その争奪戦が各国軍隊で行われたものの、依然として謎が多い場所となっている。

ここに至って各国はこの洞穴の攻略を軍のみとせず、一般の冒険者達にも開放することとなる。軍の消耗とコストがべらぼうにかかってしまい、その為に軍の維持すらままならなくなる国すらも出てしまったといわれているからだ。そこで各国が考えた事は、一般の腕に覚えのある冒険者達にやらせた方が国家が負担する損害が少ない、という事らしい。

現在、ラウラ暦1402年。旧レムルアイランド首都はレムルアイランドという名前はそのままに、冒険者や軍隊が世界中から集まり、その彼らを目当ての宿や食堂、武器屋、病院、娯楽館なども集まって、一つの巨大な街を形成していた。

洞穴から魔物が出てくるという事はここ二十年程で激減し、冒険

者達は各々でパーティーを組んだり、腕自慢の者は一人で洞穴に入り、そこに眠ると言われる財宝と名誉を目当てにその暗い穴の底目指して突き進んでいった。

1 (前書き)

01／21サブタイトルのみ変更いたしました

― 『迷宮』の都 レムルアイランド市街地 ―

「こんばんはーっ！」

一軒のレストランというより、大衆食堂のドアを開いて中に入る。繁盛している店らしく、ぱっと見渡しても空席のほうが少ない。入ってきた少女に店内にいた客どころかウェイトレスまでもが視線を投げかけてくる。客の大半は冒険者であろう、がっしりとした身体つきと鋭い目付きが少女を見据え、その直後に驚いたように目を見開く。ウェイトレスは馴染みの上得意がやってきた事を厨房に伝える為に少女に愛嬌たっぷりのウインクを投げかけてからキッチンへと姿を消した。

「……エルリアだ」

「……『血風の魔女』ってあいつなのか？ まだ子供じゃねえか」

「……見た目に騙されるな」

ひそひそと少女を見ながら客達が互いに耳打ちを始める。エルリアと呼ばれた少女は聞こえない素振りをしつつ空いていたテーブル席に腰を下ろし、手製のメニューを眺める。

「あの、エルリアさん」

隣のテーブルに座る冒険者の男が少女に声を掛けた。声音からしてかなり緊張しているのがわかる。エルリアが顔を上げると、

「も、もしよかったら今度、い、い、一緒に『迷宮』にははは入っていただけないでしょうか？」

かなり噛んでいたが、エルリアをパーティに誘っているのだけは理解できた。

「ごめんなさい。私、一人で潜るほうが好きなので……」

謝りながら丁寧で断ると、その男は肩を落として席を立つ。その後数人からパーティに誘われるが、全て丁寧に断る。

エルリアにとって下手にパーティで『迷宮』に潜るより一人で潜るほうが気楽でもあったし、危険度で言っても安全なのだ。一般的な冒険者達からすれば、前衛が敵の攻撃を食い止め、後衛が魔法や遠距離攻撃で敵を仕留めるといのがセオリーなのだが、剣術、体術、魔法全てにおいて平均レベルを大幅に超越しているエルリアにとっては敵の攻撃を裁きつつ、精神集中を途切れさせる事なく詠唱が可能であり、中級魔法までならその威力は減ってしまうが、圧縮詠唱を駆使する事で無詠唱で攻撃魔法を放つ事すら出来る。言い換えると、レベルに差がありすぎてエルリアにとっては足手纏いになってしまうのであった。

「ほれほれ、お嬢が困つとるじゃろ。ウチの店は酒場じゃないんだから、勧誘はそっちでやっておくれ」

店の奥から老婆がゆっくりとした足取りで出てきてエルリアを庇うように立つ。腰はすでに曲がっているが、声の張りといい、眼光の鋭さといい、未だ壮健なのが伺える。

「お帰り、お嬢や。今回は長かったんだねえ。」

「うん、もうお腹ぺこぺこ。荷物だけ家に置いてすぐに来たの。干し肉とか乾パンとかばかりでもう飽き飽き。何か美味しいの食べさせてくれる？」

「あいよ。ウチの店のメニューは何でも美味しいのは知ってるじゃろ」

「もちろんっ。とりあえず日替わりをお願いね」

オーダーをしてから老婆に金を支払う。この街の飲食店は食い逃げ防止の為に基本が前金制になっている。ウェイトレスがすぐに冷えた水の入ったコップをテーブルに置いてくれたので、水を一気に半分飲んでやっと人心地つく。

周囲に座る客達は相変わらず興味の籠った視線でエルリアをちらちらと見ているが、パーティの勧誘をしてくる者はいなくなっていた。

待つまでもなくスープが運ばれ、エルリアはスプーンを手にとつ

てコンソメスープを一口。暖かな琥珀色の液体が凝縮された肉と野菜の旨味を身体中に伝える。【迷宮】の中では携帯用の固形食や干し肉程度しか食べる事ができないので、マトモな食事でありつける幸せが襲ってくる。

続いて出てきたのはビーフカツレツと白身魚のムニエルにサラダだ。カツレツには店特製のデミグラスソースがたっぷりとかけられており、ムニエルにはタルタルソースが添えられ、サラダはオリジナルのドレッシングで和えられている。鼻腔をくすぐる良い香りに我慢できずにフォークとナイフを手にとると、今まで我慢していた食欲を開放して一気に食べ始める。

香ばしいスパイスやハーブの香りが口の中に広がり、続いてジュシーな牛肉の味が追いついてくる。合間にパンを一口サイズにちぎって口に放り込み、ムニエルも楽しむ。

「あー、美味しかった！」

わざわざ言うまでもない事なのだが、言わないと気が済まない程の美味しさであった。この店の料理はエルリアが食べ歩いた中でも五指に入るレベルである。しかもボリウムもたっぷりでリーズナブルという、冒険者にとってありがたい店でもあった。

エルリアは2人前分の料理をぺろりと平らげ、ようやく満足したようだ。好奇の視線を投げかけていた客が軽く引いている。華奢な見た目からすれば1人前すら食べる事が出来るかかどうかという雰囲気なのだが、それとは裏腹にエルリアはかなりの大喰らいである。「それで、今回は何層まで潜ったんだい？」

食後の紅茶が入ったカップをテーブルに置いた老婆がエルリアの正面に「どっこいしょ」と腰を下ろす。彼女の趣味である、訪れる冒険者達の話聞く時間のようだ。自然と周囲の喧騒が少し落ち着き、客達も少女の冒険譚に聞き耳を立てている。

「んつと……62層ね。前回潜った時に54層で鍵を手に入れたんだけど、それが指し示した場所が62層だったから」

店内がどよめく。公式発表では『迷宮』の調査は40層までが完

了している。が、当然の事ながら未調査という前提をつければ未だにこの巨大なダンジョンの最下層は不明であり、冒険者達が果敢にもチャレンジを続けているのだ。

挑戦者は多いものの、41層より下層は出現する魔物のランクがそれまでのフロアと比べて強力になる事もあり、熟練したパーティですら運が悪ければ魔物の餌となってしまいうような危険度になっているのは有名な話である。そんな中、62層までたった一人で潜ったこの少女の記録はほぼ間違いなくどの冒険者パーティよりも深く『迷宮』に潜っている。『血風の魔女』という異名はエルリアの強さを評したものであり、同時に畏怖の念も込められているのだ。

「ほう。また深くまで潜ったね。あたしが知る限りじゃ最深記録じゃないかね」

目を丸く見開いた老婆に周囲もそれとなく相槌を打つ。この街を管理する連合国の精鋭達でもそこまでの到達は困難どころか、不可能であろうと予測される。

「お主は相変わらず強いいう。その華奢な身体はどこにそこまでのパワーが眠つとるんじゃないかなあ」

「あははは」

次第に周囲の客も話に交じるようになり、エルリアの話を皆で聞いたり、冒険者が自分の体験談を話したり、時にはエルリアに質問をしたりと、気づけば2時間くらい予想外に盛り上がっていた。気づけば老婆はキッチンに戻ったのか姿はなく、そろそろ解散かと思われたその時、食堂の扉が荒々しく開かれた。

「エルリア様はこちらにいらっしゃいますか!？」

入り口に視線が集中する。そこにはギルドの制服を着た女性が肩で息をしながら立っていた。

「は、はい」

「エルリア様、火急のお話があります。至急ギルドへ来ていただけますでしょうか?」

「は、はい?」

急かされるようにギルド職員に手を取られ、半ば引きずられるように店を出た。店内を振り返ると、やはり老婆の姿は既になかった。

「『迷宮』からお戻りになってすぐに呼び出してしまい、申し訳ございません」

ギルドに到着したエルリアは息つく暇もなく施設内の会議室に通される。中にはギルド幹部が3人と少し前まで食堂で一緒に談笑をしていた老婆が既に着席していた。

「ギルドマスター、一体何があったんですか？」

問うた先は老婆であった。ギルドマスターと呼ばれた老婆は食堂での表情とは打って変わり、真剣な眼差しをエルリアに向けている。「もしかして、『迷宮』に潜らなきゃいけないんですか？」

その問いにギルドマスターは重くうなずき、先に謝罪を口に出した。

「お嬢が戻ってきたばかりというのは重々承知しておる。じゃが、事態は急を要する」

「……とりあえずは、お話を伺います」

ギルドからの話というのは、仕事の依頼であった。

依頼を受けて『迷宮』に潜るという事は決して少ない事ではない。むしろそちらが冒険者達にとっては主流である。調査目的や怪物の討伐、財宝探索など、国や豪商、あるいは他の冒険者達がクライアントになって様々な依頼をギルドに出し、ギルドに冒険者として登録している者はその依頼を受けてそれらをこなすことで収入を得ている。エルリアのように圧倒的な魔法や身体能力がある者ならいざ知らず、ただの力自慢等が自分の力のみで生きていくのは『迷宮』においては自殺行為に等しい。

エルリアもギルドに頼まれて国家からの依頼をこなした事もあるし、ギルドそのものが依頼主だった事も多々あった。ギルドが発行している冒険者達の功績値をまとめたランキング表の上位にエルリ

アの名も記載されている。

「……えっと、もう一度伺っても良いですか？」

依頼を聞いたエルリアが思わず聞き返す。

「うむ、即座に理解してくれとは言わん。これはギルドにとっても予想外じゃ。ミネルバ公国からの依頼でな。二日前に『迷宮』内に取り残された第一王子を救って欲しい、との事じゃ。条件は報酬に關してはその机に書類を置いておる。目を通した上でこの依頼、受けてもらいたい」

「一国の王子が『迷宮』内に取り残されるなんて一体どういう状況なんですか？」

腰にまで届く金髪が顔に垂れてきたのを慣れた仕草で掻き揚げてから素直な疑問点をぶつける。

「要はじゃな、やんちゃな王子様とそのお守りの近衛騎士隊が自らの力量もわからん王子の我俣に振り回されて23層まで潜ったまでは良かったが、間抜けにも転移トラップに引っかかってしまって隊が散り散りになってしまったそうなんじゃ。運良く生還した騎士より国元に報告が送られ、ミネルバ公王は極秘裏に我らギルドへ依頼をしてきた。兵を派遣したところでここに到着するまでは早くても1週間はかかる。すでに2日が経過しておる状態でさらに1週間も待つ事は見殺しと同等じゃ。この街に駐屯しておるミネルバ兵は新人が多いから探索には不向きじゃ。正式な要請をミネルバ公国の使いから受けたのはつい1時間半前でな。わしも店に居たので不在だったが残っていた幹部が即座に会議を開催。成功率が最も高いパーティを協議したところ、時間がないという点が最も重要なんじゃよ。その点を考えるとお嬢が妥当との判断に至った。という訳じゃ。この選定に關しては誰も異論を唱える者はいない。改めてお主に頼みたい」

「……あの、マスター」

「なんじゃ？」

「何気に酷い事おっしゃってますよね？ 問題になったりしません

か？」

「ふおっふおっふお。ここでの会話は秘匿されておる。外部に漏れる事なぞありませんよ。それにな、ミネルバ公国の第一王子といえはどうしようもないボンクラで有名じゃ。どうせ護衛が止めるのも聞かずに罫を外していない宝箱でも開けたんじゃない？」

「でも、王子が行方不明になってから2日は経ってますよね？ 生存率は極めて低いんじゃないかと思うんですけど」

書類に目を通してながら答える。条件の中には生還が最も望ましいと書かれており、万一の場合は死体の回収という項目もあるが、五体満足な死体など『迷宮』内では珍しい。大抵の場合は怪物どもの餌だ。身体の一部が残ってる事すらほとんどない。骨まで綺麗に食べられてしまうのが通常だ。

報酬は破格としか言いようのない値段が提示されていて、平均的な依頼の報酬から考えると王子の身柄ともなるとそれくらいなのだろうかと推測できる。それとは別に必要経費なども国家が受け持つ事になっていた。更にはギルドからも特別報奨金が出るという旨まで記されている。書類の最後にはミネルバ公王直筆のサインが記され、公王の印も押されている。クエストランクとしてはAからDまでである中で上位のBランクだが、重要度ランクはAになっていた。

人物の探索というのはかなり骨が折れる事なのは何度も『迷宮』に潜っているエルリアにとっては良くわかつている事だ。

ただでさえ広い『迷宮』でたった一人の人間を探し出すなんていう事はそう簡単に出来る事ではない。更に言うなら生きているかどうかすら怪しいものである。23層といえば強くはないが、そこそこのレベルのモンスターが徘徊しているし、いくつかの部屋には30層クラスのモンスターが出現したという話も記録されている。もちろん、エルリアにとっては決して難敵ではないのだが……

「生存が最も望ましい、ですか」

職員が持ってきたコーヒーに砂糖を2杯入れ、ミルクもたっぷりを入れてから口に運ぶ。幹部達は緊張した面持ちのままエルリアに

視線を集中していた。ギルドマスターである老婆もカップを手にはしているが、口には運んでいなかった。

生存確率はどれだけ多く見積もっても10%もない。行方不明になってから既に2日が経過しているし、食料などは十分にあったそうなのだが、モンスターに襲われて……というのが一番高い可能性でもあった。

正直なところ、乗り気には到底なれないのだが……

「では、『妖精騎士』が同行している、と言えはわかるかの？」

ガタッと音を立ててエルリアが椅子から立ち上がり、座ったままの老婆を見下ろす。

「受けて、くれるな？」

カツカツカツと足音を響かせて石畳の上を歩く。ギルドを出て装備を整える為に家に向かって早足で歩いていると、背後から自分を呼ぶ声があった。振り向いてみると、一人の長身の女性が背後から追いかけるようにエルリアに挨拶をしていた。短く切り揃えられた赤髪に、赤い切れ長の瞳。美人と称しても何の違和感のない顔立ちで、着ている衣服は引き締まったボディラインがはつきりと浮き出るようなタイトなボディースーツで、ホルスターが巻かれた腰の左右には大型の拳銃が下げられている。

「ハイ。戻って来て早々災難ね。行方不明の王子様を探しに行くんですよ？」

「ええ。……ってなんでセシルさんがご存知なんですか!？」

書類には部外秘の印が押されていたし、ギルドマスターを含む幹部達もこの件については内密に、とエルリアに念を押していたのだが。

「そんなの、お昼くらいにはもうみんな知ってたわよ」

人の口に戸は立てられないという典型例であろう。歩調は緩めずに歩くエルリアの横にセシルが並ぶ。

「シャーリィが同行してたんですって？」

「そうらしいです。全くもう、シャーリイが一緒でなんでこんな事なんかに……」

「あの子、貴女程ではないけどかなりの実力者なのにね。何かトラブルがあったと思うのが普通よね」

『妖精騎士』こと教会騎士シャーリイⅡマグナス。その名はエルリアの『血風の魔女』と並ぶ知名度をこの街で誇る。決して大きいとは言えない身長はむしろ小柄であり、見るからに軽そうな体躯なのだが、その小さな身体からは想像もつかないような突破力と耐久力、しかも上級神聖魔法まで扱えるという一般人離れした人物なのである。教会内では次期教会騎士団長として内定していると言われていた。そして、彼女のもう一つの特徴といえば、

「可愛い『妹』が危険よね」

「セシルさん、それはやめてくださいよ」

エルリアの顔に少しだけ笑みが浮かぶ。

「だってあの子、貴女にご執心でしょ？」

そう。何故かはわからないが、『妖精騎士』ことシャーリイはエルリアに対して恋心と呼ぶにはいささか過激な恋慕を持っているのだ。

街中で偶然顔を合わせば「お姉さまっ！」と叫んで抱きついてくるし、エルリアの自宅の玄関前で待ち伏せする事数え切れず。時には『迷宮』内にも追いかけて来るといふ熱の入れようだった。迷惑ではあるものの、エルリアにとって彼女と横を歩くセシルは命の恩人でもあり、何も知らなかったエルリアにこの街で生きていく為のルールを始めとした様々な事柄を教えてもらった親友でもある。

「23層程度だったら貴女にとってはそう困難でもないわよね。シャーリイが一緒なんだから、貴女の魔力探知で彼女の居場所の特定くらいは簡単でしょ」

主に人間を探す場合に用いられる手法として、魔力探知という魔法がある。これには術者が探索対象人の魔力の波長を知っていると
いう前提があるが、それさえわかればその波長を辿って居場所を探

し当てる事ができるというものだ。通常の魔力探知の魔法ではせいぜい百数十メートル四方が関の山であるが、エルリアにかかれはその範囲はその十倍にも及ぶ。いくら『迷宮』が広いとはいっても半日かからずに居場所の特定は可能はずだ。

ここまで会話したところでエルリアの住むマンションの玄関に到着する。

「じゃあ、行ってきますね。戻ったらまた3人でご飯食べに行きませんか？」

努めて明るく振舞う。二人ともシャーリイの事は心配だが、悪い予想をしないようにしている。彼女なら、生きていると信じているからだ。

「楽しみに待ってるわ。私は今朝戻ってきたところだし、しばらく『迷宮』に入る予定はないから、戻ってきたら連絡しようだい」

切れ長の目が楽しそうに細められる。セシルにとっての「食事」の大半はアルコールである。底なし大酒飲みのセシルとアルコールに免疫の全くないシャーリイ、仮に酔ってしまったとしても体内の循環を一時的に強化すれば一瞬にして素面に戻る（一般からすれば高等魔法の部類に入る）エルリアの三人が催す酒宴の席は非常に楽しいものでもあった。主にシャーリイが酔ったセシルに絡まれて被害を被る事になるのだが。

2 (前書き)

1／2 1サブタイトルのみ変更いたしました

1時間後、エルリアは『迷宮』入り口に戦闘用装備である、魔石で飾られたドレスに身を包んで立っていた。怪物が外に侵攻するのを防ぐ目的で配置されている兵士達にシャーリイに関しての続報がないのを確認してから『迷宮』に侵入る。

外よりひんやりとした空気がエルリアを迎え入れる。『迷宮』1層はごくごく初心者 of 冒険者でもない限りは命を落とす事はほとんどない。怪物の数も非常に少なく、フロア面積もさほど広くない。出会い頭に魔物と遭遇する危険性を考えると、全力で走るわけにはいかないが、慣れた道のりを早足で20層まで一気に下る事のできる魔導エレベーター前に到着する。このエレベーターはその昔、『迷宮』を調査した軍隊によって設置されており、今では誰でも使用できるようになっていた。ただ、一気に20層まで下る為、このエレベーターを使う冒険者はそれなりに熟練している者に自然と限られているのだが。

軽い浮遊感覚に身を任せると、そこはもう20層になっていた。1層よりも温度は下がり、体感で15度あるかないかといったところだろう。しかも周囲には怪物の放つ禍々しい邪気が漂い、腰に下げたショートソードをいつでも抜けるように準備をしつつ歩を進め、さらに下層へと続く階段へと赴く。運良く怪物と出会う事もなく目的の23層へと辿り着く。途中、他の冒険者パーティーと何度か遭遇したので『妖精騎士』の姿を見なかったかを尋ねるが、返ってくる答えはいずれも芳しくはなかった。

「ん……っと」

魔力感知を発動させてよく知るシャーリイの魔力を探しながら歩を進める。数回魔物の群れと遭遇しかけたが、別のルートを摂る事で戦闘を回避する。戦闘に掛かる時間を探索に回すべきだと考えた結果である。

二時間ほどそうして歩いた頃に感知範囲の端に目的の魔力反応があった。

「見つけた」

入り組んだ通路と玄室を記憶にある地図と照合しながら最短ルートで次々と踏破し、出没する怪物を次々と倒しながら目的の場所まで駆ける。危険を顧みずに駆けだしたのは、エルリアの裡に焦りが浮かびはじめていたからだだった。魔力反応が薄いのだ。つまり、シャーリイの状態が芳しくないということでもある。できることなら『迷宮』の壁を打ち抜いて最短コースを取りたい程であったが、荒い石造りのような見た目とは違い、この『迷宮』を構成する材質は魔法や物理攻撃では傷ひとつすらつかない。

怪我をしたのか、長時間張り続けている結界の為に魔力が著しく損耗しているのかは不明だが、あまり時間を掛けるわけにもいかないうえだった。

シャーリイが居るであろう地点まであと少しという扉を開けた瞬間、怪物のうなり声がエルリアの耳朶を打つ。しかもかなりの量だ。壁そのものがほのかに発光していて明るいとは言わないまでも、それなりの視界を確保できている『迷宮』内において、その明かりが極端に削ぎ取られたような暗い玄室だった。エルリアは常時自らの身体に施している身体機能を上昇させている魔法を調整。瞳の感度を上昇させる。

二十匹以上の異形の怪物がその部屋をねぐらにしていた。

「ワーラットね」

ネズミの頭を持った亜人種が闖入者であるエルリアを一斉に睨み付けていた。

「素直に通してくれると嬉しいんだけどなー」

剣の柄に手を置きながら言葉が通じるわけではないのを承知した上で思わす口に出してしまう。さっきより魔力反応が少しずつ薄くなってきたのだ。下手に時間をかければシャーリイが死んでしまう可能性もある。

そんなエルリアの願いも空しくワラットの大群は目の前に現れた柔らかな肉めがけて一斉に襲い掛かった。

「業炎っ!!」

瞬間的に体内で練り上げられた魔力が巨大な炎となってエルリアの掌から放たれ、ワラット群れの中央で炸裂する。同時に剣を抜いて炎の塊を避けて襲い掛かってきた一匹を斬り伏せ、同時に圧縮詠唱。

「迅雷!」

黒焦げになるのを辛うじて避けたワラット目掛けて鋭い雷が襲い掛かり、ほんの十数分で二十四匹以上居たワラットは瞬く間に駆逐されてしまう。

「シャーリイ、がんばって」

死体を踏み越えて駆け足で目的地へと向かう扉を開いた。

「お、王子……」

おぼろげな意識の中、結界だけは崩すまいと集中しながらシャーリイは警護対象の人物を呼ぶ。

「ここだ! がんばってくれシャーリイ。私は生きて帰らねばならん!」

自らの慢心による暴走で引き起こしたこの事態を認知する事もない温室育ちの青年は、シャーリイの手を取って無責任な励ましの言葉を投げかける。

「も、申し訳ありません。私がつとしっかりしておけば……」

しかし、この青年はシャーリイにとっては最重要警護対象でもあるのだ。先だって教会で使徒の儀を受け、自らを一人前の男子と証明する為に『迷宮』に入った彼を護る事こそが教会からの命令である。教会騎士団に所属し、彼女は熱心な信者であることには変わらない。その命は唯一神に捧げられる。

だが今、その祈るべき神に見放されたのではないかという状況にある。

身に纏う教会から下賜された強化魔法が幾重にも施されている白銀の鎧は肩部分が碎け散り、盾も割れてしまつて使い物にならなくなつてしまつている。武器も愛用のロングソードは刀身にひびが入り、もう一度振れば折れてしまいそうになつていた。しかも、その剣を振るうべき右腕には大きな裂傷を負い、血が止まらない。体力と魔力が限界を超えつつあり、数時間前に身体強化系の魔法すら解いてしまったのでなおさら流血は止まる気配を見せない。

「申し訳ありません……ん」

失血によるブラックアウト寸前に呟いた言葉は王子に向けられたのではなく、あくまで信仰の対象へと向けられていた。

「シャーリィ！！」

聞き覚えのある声、いや、今一番聞きたかった声が耳朵を打ち、暗闇に堕ちかけた意識が一瞬で引き戻される。幻聴ではないかと疑つたが、再び響くその声にシャーリィの心が喜びで溢れる。

助けに来てくれた。救援が到着したのだ。しかも、シャーリィが最も愛する人物が。

「エルリアお姉さまっ！　こっちです……っ」

意識せずに結界を解いてしまう。気が緩んでしまったのだ。周囲には怪物が居るというのに。

エルリアの姿が見える前にシャーリィが流す血の匂いにおびき寄せられていた一匹の怪物が姿を現す。結界が解けた事により、匂いだけではなく、傷を負った人間の姿が見えた事で巨大な戦斧を手にした怪物が奇声を上げて今日の食料を見つけた事を喜び、襲い掛かつてくる。

「あ……」

万全な状態であれば……いや、万全でなくてもここまで弱つてなければどうと言う程でもない怪物だ。力だけは強いが頭が極端に弱い怪物など、鉄壁を誇るシャーリィの敵ではなかった。

だが、魔力が尽き、右腕に深い傷を負って血が流れ続けているこの状態では到底勝つどころか、逃げる事さえ叶わない。

「神よ……」

祈るしかなかった。王子は腰を抜かせて言葉にならない言葉をうわごとのように叫んでいる。

戦斧が振り上げられる。せめて王子だけでもと、動かない身体に鞭打って王子の前に出る。

「疾れ！ 炎の矢っ！」

怪物の背後から放たれた無数の炎の矢が次々と怪物に命中していく。不意をつかれた攻撃に怪物はシャーリー達に背を向け、攻撃してきた張本人を見据えた。

およそ『迷宮』内には似合わない豪華なドレスを纏った少女

手に持つショートソードは幾多もの血を吸ったはずなのに今しがた磨き上げられたように光っていて

血糊がべったりとついていてもおかしくない豪華なドレスは新品みたいで

長い金髪も汗や血などで汚れきっているはずなのに、さらさらでシルクみたいで

笑顔が素敵な大好きな女性が

そこに居た。

次々と生み出される炎の矢は的確に怪物に命中していく。その一つ一つの威力は然程大きくはないものの、数十、数百という単位となれば脅威となる。

体力と筋力のみの特化した怪物はその猛攻の中でも手に持った戦斧をエルリア目掛けて振り下ろすが、彼女を護る魔法障壁がその軌道を逸らし、床に斧刃をめり込ませただけだった。その隙を縫ってエルリアは体重を感じさせない跳躍で怪物の眼前に跳び、ショートソードを怪物の喉元に突き刺し、そのまま落下の勢いに任せて胴体を縦に切り裂く。

大量の返り血を浴びながら再び魔法詠唱。歌うような声が『迷宮』内に響き渡る。

「消え去れ！」

呪文の結唱と同時に絶命寸前である怪物の足元に魔方阵が出現。光を放ったかと思うと、怪物の巨体がその場から消え去っていた。転移呪文を敵に向けて放ち、『迷宮』内の別の場所に飛ばしたのであろうと推測はつくが、そう簡単にできるような技ではない。絶命寸前で弱っていたとはいえ、あの巨体を一瞬にして消し去るような強力な転移呪文など、エルリア以外に使いこなせる技ではないだろう。

「シャーリィ！ 大丈夫!？」

一瞬で返り血が消え去ったドレスに今度はシャーリィの血が付着するが、構わずにエルリアはシャーリィを抱きかかえる。

「エルリアお姉さま……助けに来て下さったのですか？」

「当たり前でしょ！ シャーリィが居るって聞いて急いで来たの。魔力を使い果たしてるじゃない！ こんな状態だったら体力も限界なんですよ？」

「あはは、だいじょうぶですよ……お姉さまとまたお会いできたんですから、元気いっぱいですわ」

微かに笑顔を浮かべる。どう見ても限界を超えているのに、この少女はエルリアに心配を掛けまいとしているのがわかる。抱きしめた腕に力が籠る。

「おい、助けに来たんだろ！？ 早く地上に送ってくれ！ もうこんな所こりごりだ！」

王子がエルリアの肩を乱暴に掴む。振り向くと、彼に傷らしい傷もなく、五体満足だというのが一目でわかる。シャーリィが文字通り身を挺して護っていたのだろう。

「王子、彼女に労いのお言葉はないのですか？」

半ば睨み付けるように振り向く。その迫力に一瞬気圧される王子だが、自らの、王子としてのプライドに賭けて平民相手に退くわけ

にはいかなかった。

「貴様、誰に口を聞いておるのだ。私はミネルバ公国の第1王子ぞ！ 従僕が主たる私を護るのは当然のこ……」

その瞬間、激昂したエルリアのショートソードが王子の喉元に肉薄していた。危ういところで踏み止まったのはエルリアの自制心が起こした奇跡としか言い様がない。

「き、貴様……こんな事をしてただで済むと思うなよ……」

この状況になっても大口を叩ける辺り、今回の原因の証明でもあった。エルリアは嘆息して剣を下げる。

「はいはい、お助けいたします。超特急でお送りしますので、少しだけ『我慢』してくださいね」

「は、早くせんか！ 私は早く風呂に入りた……」

王子の姿が一瞬にして掻き消えた。さっきの怪物と同じように魔法で強制的に転移させたのだ。怪物は行き先を考えずに適当に『飛ばした』が、王子はきちんと『地上』に転移させたので、間もなく誰かが見つけるはずだ。ただし、飛ばした場所はギルドの一室でもなく、ホテルの豪華なスイートルームでもないが。

「シャーリィ、大丈夫？」

再び小さな身体を抱きかかえて顔をのぞく。意識が混濁してるように、唇は動いているが、言葉になっていない。魔力と体力の著しい損耗と血液の流出が激しすぎて意識が飛ぶ寸前になっていた。このままでは命に関わる。一刻も早く治療しなければならぬ。地上に転移するにも、重傷の彼女にとってはその負荷で命が危ない。

「地上まで間に合わないかもしれない……しようがないっ！」

左腕の一振りで結界を形成。大きさは小さいながらも、その強度は上級魔物の大群がやってこない限りは破られる事も気づかれる事もない。

「シャーリィ、シャーリィ！ 少しだけ我慢して。すぐに魔力を分けて傷も治すから」

「える、りあ、おねえ、さま……ごめんなさい、ごめんなさい」

うわ言のように呟く少女の唇を自らの『それ』で塞ぐ。魔石等を使つての間接付与ではシャーリイの方が魔石を起動する程度の微少な魔力すら注げないのがわかつていたので直接魔力を分け与えるしかなかった。

柔らかい、桜色をした花の蕾のような唇に自らの唇を押さえつけるように触れ合わせ、エルリアの裡にある魔力を少しづつ注いでいく。急いで一気に注いでしまうとシャーリイが受け止め切れずに最悪の場合は身体が弾けてしまう。焦る気持ちに合わせるように肥大しがちな魔力を抑えながら分け与える。

数分間口付けが続いた後にエルリアがそつと唇を離れた頃には、蒼白だったシャーリイの顔色は少し赤みを帯び、呼吸も落ち着きを取り戻しつつあった。続いて治癒魔法で右腕の傷を治療。他の傷も含めて全てを傷痕すら残らないレベルで治療を施す。

「よし、これで地上までは保つはず」

血液に関してはどうしようもないのでシャーリイの身体に任せるしかないが、魔力が戻ったお陰でシャーリイが元々自らに付与している身体強化系の魔法が再起動したので数日休養を取れば何の問題もなく回復するはずである。

周囲に怪物が居ない事を確認してから結界を解き、高位転移魔法を唱える。

シャーリイは夢見心地にその詠唱を聞き、「いつ聞いても歌うような詠唱ですわね、お姉さま」と言いかけてその心地よいまどろみに身を委ねた。

「こちらがミネルバ公国からの報酬となります。そしてこちらが我々ギルドからの特別報酬となっております。ご確認をお願いします」

救出劇から3日後、エルリアはギルドを訪れていた。あれから地上に戻ったエルリアは『迷宮』入り口に待機していたギルドお抱えの治癒師達にシャーリイを預け、同時に王子発見の報も耳にした。突如街の中央噴水に現れた王子は全身水浸しになって悲鳴を上げたそう。少しだけ心に溜まっていた澱のようなイライラが晴れる。そこに指定して飛ばしたのは紛れもない自分なのだが、その辺りは行き先の設定が『少々』ズレたと適当な返答をしておいた。何よりこのような高位転移魔法を使えるのはエルリア以外にはほんの数人しかおらず、呪文の複雑さから考えると、失敗という前例も数多くある為にその言を信じる以外に追求する術はない。むしろ、『無事』に地上へと王子の身体を戻した事に賞賛される程でもある。

シャーリイは帰還翌日には教会付属の病院の一室で目を覚まし、診察を受けた結果、極度の疲労と診断されたが、右腕の傷は痕すら残らずに完治していたし、その他の部分でも異常も見つからなかった。なので数日内で退院できるとの事だった。

ギルド窓口の職員から受け取った封筒にはマネーカードとミネルバ公王からの感謝状が封入されており、一通り確認をすると肩から提げている鞆に仕舞いこんで職員に挨拶を残してギルドを立ち去る。「んっ……と、今日はどうかかな」

ギルドを出て今日の予定を考えてみる。王子探索の詳細な報告も先ほど終了し、当分『迷宮』に入る予定もないので、完全なオフ日だ。

いつもなら次回の探索に向けての準備や下調べをしたりするが、今日受け取った報酬額から考えると前回のようないかな特別な依頼でもない限り、最低でも数ヶ月は金稼ぎの為に『迷宮』に潜る必要もない。

今までの蓄えを考えると数ヶ月どころか1年以上遊んで暮らせる程だ。

「でしたら私とデートなんていかがですか？ お姉さま」

「……何？ 幻覚？」

目の前に突如として現れたのは現在絶賛入院中のはずのシャーリイである。エルリアより少し小さな身長で豊かな銀髪をポニーテールに結わえて笑顔で立っている。

「うわー、酷いですよ、それ。ちゃんとした実体ですよっ！」

両手をぱたぱたと振りながらエルリアに抱きついてくる。それを難なくスルーしながら、

「病院はどうしたの？ まだ入院してなきゃいけないでしょ？」

「退院しましたよっ！ お姉さまの愛情たっぷりのお陰ですぐに回復したのです！」

肩口を軽く押してみると、見事によろめいた。普段の彼女ならばこの程度でよろめくなんてありえない。伊達に『妖精騎士』の異名は持っていない。あらゆる場面においても転倒などという隙を見せる事はないはずなのだが、体力はまだ回復していないのであろう。

「全然駄目じゃん！ 早く病院に戻る！」

「えーっ！ お姉さまにお会いしたい一心で脱走してきたのに何て酷い事を！」

「っていうか脱走してきちゃったの！？ 何で！？ いいから戻りなさい！」

脱走のくだりは冗談なのはわかっていたが、どちらにせよ往来のど真ん中で言い合いを始めてしまったので注目度が半端じゃないことに気づいたのはそれから数分が経過し、周囲に野次馬が集まっただけの事だった。

「おいあれ、『血風の魔女』と……」

「『妖精騎士』だよな。あの二人がデキてるって本当だったのか？」

「あんな美少女二人がいちゃいちゃしてるシーンなんて……」

「俺も加わりたい」

即座にシャーリーの肩に手を置く。「お姉さま、やっと私の気持ち」つづらと言っても全く差し支えの無い髪の毛と同じ金色の瞳が潤み、そっと閉じられるのを「勘弁して」という気持ちで見ながら呪文を紡ぐ。短いが、歌うようなその響きに周囲が吞まれてしまった瞬間には二人の姿はそこにはなかった。

「あー、もう。シャーリーはもうちょっと時と場所を考えてよ」

「ごめんなさい、お姉さま……だって、お姉さまのお姿を見たら居ても立ってもいられなくて」

エルリアの自室。転移呪文を使って移動した先がこの場所だ。極力目立たない生活を、というのを信条としているエルリアにとって、街中で魔法を使うということは極力避けたい事柄なのだが、あの場合はやむを得ないと言いか言いようがなかった。あのままでは余計に目立ってしまうことがわかりきっている。

リビングに置かれたソファにシャーリーを座らせ、自分はキッチンで紅茶を淹れながら手短にお説教。

年齢としてはシャーリーの方が1つ上なのだが、彼女は年下のエルリアを「お姉さま」と呼ぶので、いつの間にかこのような構図が出来上がってしまった。

「そのお茶を飲んだら病院に戻ってね。先生とか看護師さんが心配してるよ」

「本当にもう大丈夫ですよ。それにしても、お姉さまが助けに来て下さったなんて夢のようですわ。しかも私に魔力を与える為にキスマで……」

ティーカップを両手に持ってうつとりとした表情で先日のに思いを馳せる。対するエルリアは少々の後悔を伴っていた。緊急事態だったとはいえ、よくよく考えればあの方法——粘膜同士の接触が魔力を分け与えるには最も適したやり方ではあるものの、それ以外にも効率は落ちるが、魔力を注ぐやり方はいくらでもあったはずなのに。

「それはもういいとして、何か話があるんじゃないの？」

ピンク色の妄想に付き合い続けるのも疲れるので本題を促してみ
る。何となくだが、彼女が何かの依頼を持ってきたのではないかと
推測していたのだ。過剰なまでの愛情表現はいつも通りなのだが、
どこか緊張をしているように見える。病院を脱走してきたという話
にしても、入院した事のあるエルリアからすればそのような事が不
可能だと知っていた。

「さすがはお姉さま！ 私がお願いをする為にお姉さまの元に馳せ
参じたのをもうおわかりなのですね！」

大げさなリアクションが返ってきた。ついでにテーブルを飛び越
して抱きついてきた。果てしなく困る。

「だからいちいち抱きついてこない！」

「照れちゃってかわいいですわね、お姉さま」

語尾にハートマークがつきそうな雰囲気だったが、シャーリイは
あっさりと抱擁を解いて元の場所に座る。エルリアもようやくその
対面のソファに腰を落ち着ける。

「教会からの依頼です」

先程とは打って変わった、真摯な眼差しでエルリアを見つめる。

「50層にあると言われている『聖杯』を探し出し、教会へ譲って
いただきたいのです。期限は2週間以内」

「50層ってことは非公式な依頼って事だね？」

現在一般に公表されている『迷宮』最深部は40層とされている。
エルリアは少し前にそれより遥か下層の68層まで潜ったのだが、
40層以降は未踏破部分がありにも多い為に公表が控えられている。
言い換えると、危険が大きすぎて並のパーティーでは帰還もお
ぼつかないのだ。

公表がされていないということは、特別な事情がない限りはギル
ドでの正式な依頼を行う事が不可能であり、それを押し通して依頼
をするとなると、当然の事ながら非公式な依頼となる。

この場合、ギルドの功績値に加算される事はない代わりに、得て

して莫大な報酬が支払われる事が多い。

言うまでもなく非公式な依頼の中には違法な依頼も数多く、『迷宮』の闇に紛れてある人物を暗殺してほしい、という依頼まであるがエルリアは違法な依頼は全て断っていた。

「当然ですが違法性はありません」

先回りしてシャーリイが口を開く。教会の依頼というからには違法行為をそそのかすようなものでは有り得ないのは明白だが、教会を騙った依頼というのも実在する。だが、今回に関しては依頼を申し込んできたのが現役教会騎士団員であり、なおかつエルリアの親友という事もあるので、仮に受けるとしても裏を取る必要性は全くと言ってもなさそうだった。

「それで、『聖杯』がそこにあるっていうのはどうしてわかったの？」

「至極全うなご質問です。さすがはお姉さま」

真剣な会話のはずなのだが……

「教会所属のパーティが44層まで到達した際に入手した鍵があります」

「あ、そういう事」

鍵を入手すると、その鍵を使うべき場所が脳裏に示される。場合にもよるが、入手できる秘宝やアイテムが何であるかさえわかってしまう事も稀ではあるが、あると言われている。今回の鍵は入手アイテムが『聖杯』だと告げていたのだろう。

ただ、この鍵は入手してから20日が経過するとその効力を失ってしまい、何の役にも立たない鉄くずと化してしまう。逆算すると、鍵をそのパーティが入手して既に6日が経過していることになる。

「場所が場所ですので我々教会内の人間では到達不可能という判断が下り……」

「私に依頼が回ってきた、ということ？」

こくん、とうなずくシャーリイ。物が『聖杯』ということもあり、真剣である。

もともと『聖杯』は神が使った酒杯であると言われており、聖王国首都にある教会本部の最深部に安置されていたのだが、先の戦争の最中に盗難されてしまったらしい。教会側もありとあらゆる手を尽くして探し回ったのだが、とうとう行方が知れずに今までの時間が経過してしまっている。

教会側としては何としても取り戻さなければならない、文字通りの『秘宝』という事になる。

「50層かあ……」

簡単にオーケーを出せる場所ではない。ズバ抜けた身体能力と無限と言われる魔力、ありとあらゆる魔法知識をひよんな事から手に入れたエルリアではあるが、決して無敵という訳ではない。腹も減れば傷も負うのだ。実際に62層まで潜った時は魔法障壁を貫いてくる攻撃による怪我に加えて疲労と空腹にも泣かされた。治癒魔法は当然高レベルのものは使えるし、魔法によって新陳代謝等も強化されており、浅い傷であればそれこそ一瞬で治ってしまうのだが、治癒魔法を落ち着いて使う暇がない程魔族や魔物がひっきりなしなのだ。

「当然ですが、私もご同行しますよ」

「え？」

思わず聞き返してしまった。てっきりエルリアが一人で潜るものだと思っていたのだが。

「だってシャーリィはまだ怪我が完治してないじゃない。そんな状態で50層までなんて到底……」

「4日で完璧なコンディションにしますっ！　お願いします！　私も連れて行って下さい！」

頭まで下げられてしまって困惑してしまう。正直なところ、エルリアとしては他人と潜るより一人で行く方が何かと気楽なのだ。仲間がいるというのは心強いし、いざと言うときには助かる。しかも魔法を唱えるにも威力が減ってしまう圧縮詠唱を使わなくて済むのだが、絶えず仲間の状態を気遣わなくてはいいけないし、場合によっ

ては仲間が斃れてしまう事もある。要は足手纏いなのである。シャーリー程のレベルであればエルリアクラスとまではいかないまでも、背中を預けるのに十分な実力を有してはいるのだが……

「シャーリー、申し訳ないけど……」

言いかけたところでシャーリーがソファから腰を床に下ろして土下座の格好まで始める。

「お願いします！ お姉さまに助けられたこの命、お姉さまの為に使いたいのです」

さすがは義を重んじる教会騎士団員と言うべきなのか、単にシャーリーの性格なのか、律儀すぎるまでに律儀だった。

「気にしないでいいのに」

エルリアからすればシャーリーが取り残されていると知ったら依頼がなくても親友と呼べる彼女を助ける為に『迷宮』に足を踏み入れたと言っても過言ではない。

「私の気が済まないのです。お姉さまには毎回助けていただいていますし、今回もお姉さまに無茶を言っています。五十層がどれだけ危険な場所かも熟知した上で、お姉さましか頼るべき人がいないんです。他のパーティや冒険者では不安が大きすぎます」

頭を床に擦り付けんばかりの勢いだ。慌ててシャーリーを抱き起こそうとするが、彼女は頑として顔を上げない。

教会からの指令が無茶なのは誰が見ても明らかだ。エルリアが6層まで到達できたのは実力もあるが、運もあったのだ。到達するまでに遭遇する敵が予想よりほんの僅かではあるが少なかったことと、48層で見つけた55層まで一気に下る事のできる、誰が設置したのかは不明であったが、魔導エレベーターを発見したからであり——当然そのエレベーターを守っていたフロアボスと言える魔物が難敵だったのは言うまでもないが。次も絶対到達できるとは言い切れない。それ程までに40層以降は危険を伴うのだ。モンスターも段違いに強くなる上に突然変異型の更に強力なモンスターとの遭遇も有り得る。一歩間違えれば死が待っているのだ。

しばらくの間沈黙が部屋を支配する。開け放たれた窓からは街の雑踏がかすかに聞こえて来るものの、二人とも口を開かない。シャーリイは頭を下げたまま、エルリアはその傍らに片膝をついたまままだ。

「……わかったわ」

ため息交じりに了承する。

「ごめんなさい、お姉さま」

「シャーリイが謝らなくていいよ」

優しく銀髪に手を載せ、手触りの良い髪の毛を撫でる。シャーリイからすれば断られても文句は言えない。しかも危険な場所に自分を連れて行くという事は、最悪の場合自分が足手纏いになってしまいう可能性もあるのだ。エルリアの実力はシャーリイのそれを上回っているのは自明であったし、一人で潜る事を好んでいるのも理解はしていた。

「それでも、お姉さまの力になりたいです。足手纏いかもしれませんけど……」

自分の無力さに泣けてくる。栄光ある教会騎士団拝命し、向かう所敵無しとまで言われたシャーリイだが、エルリアを前にするとその力の差というのがわかってしまう。

秘法とも言える魔法の数々を己の裡に宿したエルリアの身体能力、魔力、そして魔法に関する知識はギルド所属、非所属を問わずに匹敵する者はいないとまで言われているし、彼女が所有している強力な魔術の施された秘宝クラスの装備品はそれ1つだけで莫大な財産になる程だ。

「あ、でもシャーリイ」

「はい？」

やっと顔を上げたシャーリイはエルリアに渡されたハンカチで目尻の涙を拭いながら聞き返す。

「装備、ないんじゃないの？」

「あ……」

鎧も、剣も先の戦いで修理不可能な程に使い物にならなくなってしまっていたのだった。新しい鎧や剣を探すにも時間が足りないし、教会から下賜される神聖魔法を付与された装備品を待っていたのは時間がかかりすぎてしまう。

早くも絶望感に打ちひしがれてしまう。やっと恩人の手伝いが出るかと思っただのに、これでは同行すらままならない。

辛うじてエルリアにソファに座らされたが、顔を上げる事が出来ない。あまりの悔しさに唇が切れるのも構わずに噛み締める。

と、エルリアがリビングに置かれているキャビネットから2つの宝石を取り出し、シャーリイに差し出した。魔力を注げば中に封じられたアイテムを引き出す事のできるアイテムストッカージェムだ。「あげる」

透き通るような笑顔につられて宝石を受け取る。琥珀色と淡い緑色に輝く宝石を言われるままに受け取る。

「えっと……？」

「開いてごらん」

言われるままに2つの宝石に魔力を注いで封を解くと……

「これは……」

白銀色に輝く鎧と盾。そして今しがた熟練の剣匠に磨き上げられたような輝きを放つ一振りのロングソードと、その対になっているであろうショートソードが姿を現した。

「前に55層あたりで拾ったんだけど、付与されている魔法がちょっと解析するのに面倒だったからギルドに預けてたの。それが少し前に返ってきたんだけど、私には意味がないから、もしよかったら」

ギルドの鑑定書も手渡され、為すがままに目を通す。

鎧には軽量化、耐魔法、耐衝撃、耐斬撃などのありとあらゆる攻撃を緩和する魔法が付与されており、盾にも同様の魔法が付与され、剣には威力上昇や敵が持つ魔法障壁をも貫けるような強力と言っても差し支えないレベルの強化魔法が与えられていた。エルリアが持っているような秘宝クラスとまではいかないが、それに近い超が

付くようなレアアイテムだ。しかも既にシャーリイ向けに手直しまで施されている。元々シャーリイに渡すつもりだったのであろう。

「でも、こんな高級な物を頂くわけには」

「いいのいいの。持っても使わないし、売るにしても買い手がなかなかつかないから、ね？」

要は高級すぎて買い手がほとんど居ないということであつた。鑑定書に付け加えられている参考価格は大国の首都の一等地に居を構える事ができそうな額だ。

「でしたらなおさらっ」

「シャーリイ」

言いかけた言葉をエルリアが強引に遮る。

「シャーリイは足手纏いなんかじゃないわ。居てくれたら安心して魔法の詠唱もできるし、休憩の時だって交代でしっかりと休めるからね」

「っ」

「あと、これは全快祝い。だから4日後にはきちんと身体を治して来る事」

痛い位に嬉しかった。その優しさと懐の深さに。

「ありがと……う、ございます」

最後は言葉にならなかった。小さい頃から背の小さを揶揄され、足手纏いと言われて来た。だからがむしゃらに頑張つて、教会騎士団に入団した。そこでも鍛錬という鍛錬を修め、ついには次期騎士団長の打診を受けるまでに上り詰めたが、自分が足手纏いなのではないかという杞憂が絶えず彼女の脳裏に付きまとっていた。エルリアはそれをたった一言で打ち消してしまったのだ。

ふわり、と抱きとめられる。エルリアの柔らかな肌がシャーリイの頭を包み込む。

「お姉さま……」

「さあ、病院に戻ってしっかり休んで。4日後、『迷宮』入り口で会おうね」

「はい！ 必ずお姉さまのお役に立ちます。いえ、立ってみせます！」

―4日後、『迷宮』入り口―

「って、何で！？ どうしてのですの！？ 何故貴女がここに！？」
悲鳴に近い叫び声が警備兵や他の冒険者を振り向かせる。声の発生源はシャーリイだ。言われた通りに4日で身体を万全に回復させ、エルリアから貰った鎧を身に纏い、腰の左側にロングソードを。右側にショートソードを装備して盾を背中に負った完璧な状態で意気込んでやってきた彼女を待っていたのはエルリア一人だけではなかった。

「あら、もう身体は大丈夫みたいね」

セシルがタバコを啜えたまま手で手をひらひらと振ってシャーリイに声をかけた。新潮したらしい新品の黒を基調としたボディースーツに胸当てを装備し、動きやすさを重視した装備。腰にはベルトに通されたホルスターに収まっている大型拳銃が二丁。赤い瞳を細めてエルリアと談笑しながらシャーリイの到着を待っていた。

「お姉さまっ、なんでセシルさんが一緒なのですか！？ 聞いてませんわ！」

怒涛の勢いで詰め寄る。てっきりエルリアとペアで潜るものだと思っていたのだろう。

「あのあと、ギルドに買い出しに行ったらセシルさんとはったり逢っちゃってさ」

「話聞いてみたら面白そうだし、私も暇だったからね」

「2人より3人のほうが生存率も上がると思ったから」

セシルもシャーリイに並ぶと称される程のベテランだ。『疾る双

銃』の異名を持ち、今回の五十層はシャーリイと同じく未到達だが、四十五層まではパーティを組んで潜った経験を持つ猛者の一人である。

「そんなぁ……」

しよげるシャーリイにシンプルながらも豪奢としか言えないようなドレス——とはいえ、秘宝クラスの強力な魔法を付与された物だが——を纏ったエルリアがシャーリイを宥めながら、

「まあまあ。ほら、良く言うでしょ。旅は道連れ」

口上を途中でセシルが引き継ぐ。

「共倒れ？」

「倒れませんわよっ!!」

―『迷宮』四十二層魔導エレベーターに続く道―

シャーリイ、セシル、エルリアの三人は大きなトラブルもなく、僅か二日程でここまで到達していた。

「それにしても、相変わらずエルリアの強さは規格外よね」

エルリアが張った結界の中でタバコに火を点けたセシルが口を開く。それに答えたのは本人ではなく、白銀の鎧に身を包んだシャーリイだ。

「あたりまえですわ。お姉さまの美しさも強さも全部が全部規格外なのです！」

「それはちよつとどうなんだろう……」

携帯食の干し肉を口に入れ、水を一口飲んだエルリアが返す。

「だってお姉さまは魔法を使っても超一流、体術も文句なしですよっ」

「本当にあんたはエルリア大好きね」

まるで緊張感のないように見える三人だが、絶えず周囲に気を配っている。エルリアが張った結界なのでそう簡単に怪物に発見、破壊されるような代物ではないが、癖づいているのだ。こうやって絶えず身の安全を確保することこそが『迷宮』内で生き残る秘訣でもあり、同時にその緊張から発生するストレスを如何にして発散するかという事も重要である。

「ん……誰か来る」

一番最初に気づいたのは当然ながらエルリアである。残る二人の顔に緊張が走り、シャーリイは剣の柄に手を載せ、セシルも拳銃のグリップを握る。

しばらく経った頃に数人の人間が3人の視界に入った。

「酷い傷！」

いち早く結界から飛び出したのはシャーリィだ。教会の教えに従順で、心優しい彼女は傷病者を見捨てる事が出来ない。

「どうしたんですか!？」

駆け寄るシャーリィの顔を見て仲間に肩を貸しながら歩いていた男が安心したような表情を浮かべた直後、崩れ落ちるように倒れる。シャーリィが間一髪、両手で重傷らしき二人を抱きかかえる。エルリアとセシルも結界を解いて駆け寄る。パーティは五人で、その内2人が酷い傷を負い、残る3人も疲労困憊の状態になっていた。

『『妖精騎士』に『血風の魔女』、『疾る双銃』まで……』

エルリア達の顔を見て安心したようにその場にへたり込む。シャーリィに抱えられた2人の傷が深い為、エルリアが再度結界を展開。石畳の床に毛布を広げて2人を介抱しながら事情を尋ねる。

「私とシャーリィで治癒魔法を施すから、セシルさんはそっちの三人に水と食べれるようだったら食料をお願いします」

「わかった」

より重傷の男の治療をエルリアが担当し、もう一人にはシャーリィが治癒魔法を掛ける。

「助かりました」

傷の浅い三人の内の一人がセシルから受け取った水を飲んでから礼を言う。話を聞くと、三十八層で手に入れた鍵が示した場所が四十二層だったので少々が無茶を承知でここまで降りて来たものの、出現する敵の強さに耐え切れずに敗走していたとの事だった。

「無茶はよくないですよ」

魔法で傷口を塞ぎながらシャーリィが唇を尖らせる。治療を施している男の容態は安定し始めており、呼吸もゆっくりになりつつあった。

「申し訳ない。自分達の力を過信しすぎました」

リーダー格であろう魔術師の男性が頭を下げる。治療が終わったシャーリィは残る三人の傷も治し、エルリアの様子を伺う。

「お姉さま、いかがですか？」

「ちょっと難しいかもしれない。体力の消耗が激しすぎて傷口を塞いでも……」

治癒魔法とて万能ではない。上位魔法に位置する蘇生呪とて、失われた血や体力を即座に回復させる事は難しいし、魔力を大幅に消耗した者を回復させるのも困難を極める。先のシャーリィが助かったのは、ひとえにエルリアが救助に来たからに他ならない。

「体力だけは魔力と違って分け与える事もできないし……」

傷は綺麗に治したものの、男の呼吸は未だに荒く、意識も朦朧としている。気付けの酒を飲ませようにも、それすら受け付けない程に消耗してしまっており、急いで病院に運ぶ必要があった。

「お姉さま、転移魔法で入り口まで運んでしまうというのはいかがでしょう？」

「それも考えたけど、このフロアからだと何度か転移魔法を繰り返さなきゃいけないからこの人の体力が厳しいわ。それに、この人だけを送ったとしても、残った人たちだけで戻れるとは到底思えない」

「俺たちは大丈夫です。そいつを入り口に送って下さい」
先程の魔術師がエルリアに頭を下げる。だが、エルリアは躊躇を続ける。

「貴方達、4人で本当に地上に戻れる？　しかも1人はこの人程じゃないけど戦闘はできないわよ」

鋭い問いに4人が押し黙る。どう考えても4人で戻れるような場所ではない。そもそもが無茶をしてこのフロアまで降りてきているのだから、一人でも欠ければ生存率は一気に下がってしまう。

「でもお姉さま、このままではこの方の命にかかります」

「それはわかってる。でも、この人一人だけが助かって、残りの4人が戻らなかった時、この人はどう思う？」

沈黙が周囲を包む。シャーリィも反論できずに俯いてしまった。

「しょうがない、か」

小さくため息を吐いたエルリアはアイテムストッカー・ジェムを一つ取り出し、展開して中から大振りの薬瓶を取り出す。まずは自

らが薬瓶の液体を口に含み、そのまま男に直接飲ませる。

「お姉さまっ！」

ゆっくりと、ほんの少しずつ液体を男の口に浸透させ、数度の呼吸時間を空けながら液体を全部飲ませる。

「エリクサーよ。本当は温存するつもりだったけど、今が使い時ね」
口を離して男の様子を伺う。死者をも呼び戻すと呼ばれている霊薬というだけあって、その効果は抜群だった。見る見る内に男の顔色に赤みがさしていく。

「うん、安定したね。もう大丈夫」

男の呼吸が平穏に戻ったのを確認して空になった瓶をジェムに戻す。

「このまま二時間くらい安静にしておけばもう大丈夫。私達も一緒に居るから貴方達は休んで」

「エリクサーなんて高価な物まで……本当にありがとうございます！」

深々と頭を下げるリーダーにエルリアは「別にいいわよ」とだけ言って壁にもたれかかって、そのまま腰を下ろす。

「お姉さま、大丈夫ですか？」

「何が？」

質問の意図がわからずに聞き返すと、いきなり口を塞がれた。そしてたつぷりと十秒経ってからシャーリイが離れる。

「大怪我人とはいえ、男と接吻をしたのですよ！ 消毒しなくては！」

「ぷっ……」

セシルが真っ先に噴出し、続いてエルリアが。そしてパーティのメンバーに笑顔が広がる。

「みなさんはまだ下層に？」

パーティの中で唯一の女性がおずおずと口を開いたので、シャーリイをやっと引き剥がしたエルリアが苦笑いのままうなずいて返す。

「ええ。目的地は五十層です」

「五十層!？」

常人では理解の範疇を超えた場所であるというのがこの反応で改めて理解できる。エルリアはそれより更に下層に潜ってはいるが、敢えて口は開かない。

「さすがはトップクラスのみなさんですね」

しばらく質問攻めにされたが、二十分程度でパーティの全員が寝息を立てはじめた。

「無茶、ですわね」

「無茶ね」

「よく生き残ったよね」

運が良かった、という事なのだろう。この『迷宮』で生き残るための要素である、『運』をこの六人は兼ね備えていたということであった。

六人が眠りについてから1時間程が経過した頃、エルリア達も交代で休憩を取る事にして先にエルリアが仮眠を取っていた時に、

「すみません、お姉さま。魔素が異常に強くなってきました」

優しい声音のシャーリイの声で覚醒し、同時に禍々しい気配を感じ取る。仮眠のつもりが寝入ってしまったというようだ。

「全員を起こして。セシルさん、起きてますか？」

「当然」

セシルは拳銃用のアイテムストックカージエムに収められた弾丸を確認し、再びグリップにその宝石を戻していた。シャーリイはパーティのメンバーの内、もっとも傷の酷かった一人を除いた五人を起こす。

「多分結界そのものに気づくと思う。かなりのレベルの敵がこっちに来てるわ」

「血の匂いを辿られたのでしょうか」

その可能性が最も強い。どちらにせよ一戦を交えなければならないうだった。

「絶対に動かないでね。結界はこのままにしておくけど、下手に動

いたら気づかれる可能性もあるから」

ドレスから魔石を1つ取り外して結界の核に据えてから注意を言い残して結界を出る。敵の気配はもう間近に迫っていた。

『迷宮』を構成する石壁の角から現れたのは……

「デーモン……」

悪魔の名を冠する、正真正銘の魔族であった。知能の高い中級魔族だ。二メートルを優に超える大きさが示すように力も強く、魔法抵抗値も高い。雄たけびを挙げるその姿は禍々しきで満ち溢れていた。

「お姉さま、私が行きます。詠唱を」

「援護するわ」

シャーリィが翔け、セシルの銃声が『迷宮』内に木霊したのが戦闘開始の合図になった。

駆け寄ってくるシャーリィめがけて丸太程もある腕が唸りを上げて振り下ろされるが、シャーリィは足を止めてその攻撃を盾で華麗に受け流す。妖精騎士の名前は伊達ではなく、あらゆる攻撃を彼女は受け流し、時には受け止めきってしまう。

銃弾が振り下ろされたデーモンの腕に突き刺さり、破裂。炸薬弾に続いて左手の銃から聖銀弾が放たれ、デーモンの胸部に連続で命中する。デーモンの周囲に複数の火球が膨れ上がり、すべてがセシルめがけて襲い掛かるが、彼女は軽いフットワークでそれらを見事なまでに避けつつ、さらにトリガーを引き絞る。

そして、二人の背後で『唄』としか言いようのない詠唱が始まる。エルリアの魔法詠唱が始まったのだ。普段と違い、近接戦闘をしながら詠唱するのではなく、前衛が居るために高速詠唱や圧縮詠唱なしでしっかりと魔力を練り上げる事ができる。

「いつもながらに綺麗ですわ」

ロングソードを振り上げながらシャーリィの表情には笑みすら浮かんでいる。

「歌手になったら一儲けできそうね」

連射の手を緩める事なくそう評価するセシル。

二人の周囲に結界が展開される。エルリアが放つ魔法に二人が巻き込まれない為に。

「光よ、槍となりて闇を薙ぎ払え！」

呪文が結唱した瞬間、エルリアの周囲に数十という単位の光の槍が出現し、一斉にデーモン目掛けて疾駆する。同時にエルリアも地を蹴って腰に下げたショートソードを抜き、構える。

「剣よ、その力を顕せ！」

エルリアの紡ぐ言霊を受けてショートソードが己に秘められていた力を顕す。刀身に光が集まり、ロングソード大の光の剣が形成される。

次々と着弾する光の槍に抗いきれずに動きが止まったデーモン目掛けて跳躍し、剣を振り下ろす。シャーリイもデーモンの喉元目掛けて剣を突き出し、セシルの放った銃弾は赤黒く光る眼を射抜いた。断末魔の咆哮が石壁を震わせ、唐突に消える。すどん、とデーモンの頭部に剣を突き刺していたエルリアが華麗に着地し、ドレスについた埃を払う。返り血もみるみる内に消え去り、新品同様の美しさを取り戻していた。

「もう大丈夫よ」

結界を解いて六人に声を掛けるが、反応がない。訝しんだシャーリイが近づくと、やっと我に戻ったように五人が大きく息を吐いた。「すみませんでした。圧倒的すぎて息をするのも忘れていました」「流石です！あのデーモンをいとも簡単に倒してしまっなんて！」戦闘から30分も経たない頃に残る一人も目を覚まし、仲間から事情を聞くと同じように頭を下げて感謝の意を伝える。

「エリクサーの代金はなんとかしてでもお支払いします！」

「別にいいよ。元々緊急用に用意してただけだし、家に戻ればストックがまだ二個くらいあるから」

ギルドに併設されている商店でエリクサーを買おうとすると、一般人が半年は飲まず食わずの生活を送らなければいけないような値

段なのだが。

「それより、戻るなら今のうちよ。さっきのデーモンがフロアボスだったみたいだから、倒した事で他の怪物の動きが鈍ってる今のうちに上層に戻るといいわ」

「わかりました。本当にありがとうございました。ご武運を」

次々と頭を下げて三人に別れを告げる。全員が去ったのを確認してからエルリアが特大のため息を吐く。

「エリクサーはちょっともったいなかった？」

「ううん。それは別にどうでも良いんだけど、ちょっと疲れたかな」その言葉にシャーリィが即座に反応して結界を展開する。エルリアのそれに比べると強度では落ちるが、十分に怪物から姿を隠す事はできるし、一般の冒険者が作る結界と比較すると圧倒的に強い。

「お姉さまは少し仮眠なさってくださいな。私とセシルさんで見張りをしておきます」

素早く荷物から毛布を二枚取り出して、一枚を石畳の上に敷き、もう一枚をエルリアに手渡す。

「でも、さっきも休憩した所だし……」

「あれは先程の冒険者達が休憩する為でしたでしょ？ お姉さまはその後も魔法を連続で使い続けましたのですから、しっかりと休憩するべきです！」

強引に休憩を勧められ、セシルに助けを求めようと視線を向けるが、セシルも同意見らしく、首をゆっくりと横に振った。

「この先はエルリア頼りになる場面も多くなるでしょうからね。今のうちにしっかり休んでおいて。見張りと雑魚程度の片付けなら私達で十分よ」

そこまで言われてしまったのならエルリアに反論する余地はなかった。笑顔のシャーリィから毛布を受け取って横になる。数分も経たない内に眠気がやってきて、自分が思っていたよりも疲れているのを自覚するかしないかのところで意識が途切れた。

「さて、お姉さまが休んでる間に私達も一息つきましようか」

「そうね。あ、紅茶飲む？」

周囲への警戒だけは怠らずに荷物から水筒を取り出したセシルの問いにシャーリイが「いただきます」と答えながら保存食のクッキ―を提供する。

「この紅茶、美味しいですわね」

「でしょ？ 知り合いに教えてもらったんだけど、気に入っちゃって今は通いつめてるのよ」

「戻ったら私にも教えてくださいますか？」

「もちろん。エルリアに美味しいのを淹れてあげると良いわ」

「はいっ！」

二人の視線が眠るエルリアに注がれる。シャーリイは慈愛に満ちた瞳で、セシルは妹を見るような瞳で。

「この子がここに来てもう1年だっけ？」

「そうですわね」

一年前、エルリアを一番最初に発見したのは誰でもない、シャーリイとセシルの二人だった。

― 1年前『迷宮』二十九層 ―

「うーん、ここじゃなさそうね」

「三十層まで行かなければ無理なのでしょうか？」

広めの玄室の隅で結界を張った二人が地図を片手に周囲を見渡す。シャーリィは何度も地図と自らの記憶を重ね合わせて現在位置を確認する。

「やっぱりここだと思います。地図にも適合しますし」

「条件は？」

玄室には十体以上の怪物の死体が転がっており、今しがたこの二人がこの玄室に巢食う怪物を駆逐したばかりだというのがわかる。その証拠にシャーリィが纏う鎧には返り血がべったりとついているし、セシルにも血糊がついている。

「この玄室の魔物を駆逐すれば『出て』くる筈ですけど……」

二人が二十五層で手に入れた鍵が伝える条件はこの玄室で魔物を掃討すれば宝物が出現するという事のみだった。難解な謎解きのような要素はなく、人手も必要ではなかったので二人で来たのだが。

「ハズレ、でしょうか？」

「何とも言えないわね。条件に適合してから宝物が出てくるまでの時間って一定じゃないしね。私の知り合いだけど二時間待ってやっとなってきたって言ってたわよ」

「じゃあ待つしかないですね」

鎧に付いた血糊を少し気にしながら壁にもたれかかる。敵を掃討したとはいえ、いつ姿を顕すかわからないので決して気は抜かない。セシルもタバコに火を付けながらも周囲の様子を絶えず伺っている。

30分が経過した頃、突然玄室の中央に長箱のような物が出現した。

「やっと出てきましたわ!」

周囲に魔物の気配がないのを何度も確認してから結界を解いて宝箱らしき物に駆け寄る。

追いついたセシルがそのまま箱に近づき、罠などがないかを確認。箱の長さは二メートル近くあり、奥行きや高さも今まで見た事のないような大きさだった。

「それにしても大きいわね……っと、毒霧のトラップね」

鍵穴の奥に毒の入った瓶が仕掛けられており、確認せずに鍵を差し込むと仕掛けが作動して毒が噴射されるという罠が施されていた。単純な罠なので手持ちのツールで罠が作動しないように仕組みを解除し、シャーリィにうなずいて返す。

「では、開けます」

ゆっくりと鍵を差し込む。何度経験してもこの瞬間に勝る楽しみは感じた事がない。一種のギャンブル性にも似た感覚が二人を包み込む。

カチリ、と音がして錠が外れる。二人で協力して長い蓋を外すと

……

そこには一人の少女としか見えないモノが横たえられていた。

「……何ですか、これ」

「人っぽいわね」

宝物が人間だった、なんて事は前代未聞である。大きさからして鎧一式や刀剣類なのではないかと思っていたが、斜め上方向に期待が裏切られる。

注意深く箱の中に横たえられている少女を観察していく。胸が上下しているところを見ると生きていうようで、傷一つ負った様子もない。単に寝ている、あるいは気絶しているといった所のようなだが。「それにしてもかわいいですわね、この方」

全体的に細身で、身長は百五十センチ半ばといったところだろうか。ゆるやかにウェーブした長い金髪の一本一本が金糸のように広がっている。ずっと通った鼻筋といい、桜色をしたやわらかそうな

唇といい、未だ閉じられているが、形の良い瞳といい、絶世の美少女と言っても差し支えなさそうであった。服装は『迷宮』内ではとても想像がつかないような豪華なドレスで、至る所に小さな宝石が縫い付けられている。

「ん……」

蓋が開かれた事で光を感じたのか、少女のまぶたが動く。

「起きるみたいです」

ゆっくりと開かれるまぶた。その瞳は蒼く、少し釣り目気味ではあるが、大きな瞳がシャーリィを見た。

「ご気分はいかがですか？」

恐る恐る問いかける。少女に気づかれないように後ろ手にはショートソードが握られている。魔物の可能性も否定はできない。セシルも腰の銃握にさりげなく手をやっている。

「あれ……ここは？」

まだ朦朧としている少女は半身を起こして周囲をキョロキョロと見渡す。

「『迷宮』の二十九層ですわよ。貴女はどうしてこんな所に？」

その問いに少女は何を言われているのかわからないという、きょとんとした顔をして答えた。

「えっと、お名前は？」

とりあえず危険はなさそうだと判断したセシルが銃から手を外して少女に問い掛ける。

「……エルリアです。エルリアⅡレイアモンド」

「西の方でしょうか？」

苗字から考えると西の方にある国家にありそうな響きだったので重ねて尋ねながら水筒から水を一杯汲んで少女に手渡す。

「あ、ありがとうございます」

何の疑いもなくエルリアと名乗った少女はコップを受け取り、水を一口、二口と飲んでふう、と息を吐く。

「って、ここどこですか!？」

やっと脳が正常に稼動しはじめたようで、いきなりパニックに陥った。

「何でこんなところに！？　って何でこんな服着てるの！？」

「あー……」

どうやら記憶が抜け落ちてるらしい、というのは二人とも理解できた。こうなってしまったからにはしょうがないので落ち着くのを待つしかない。シャーリイが結界を展開し、怪物に気取られないように空気の振動を部分的に抑えるように施す。

エルリアはひとしきり騒いだ後、今度は放心状態になっていた。

「置いていきましょうか……？」

さすがに面倒になってきたのでシャーリイがこそつとセシルに問い掛けるが、本気ではない。熱心な教会信者のシャーリイの事だから面倒は見るつもりなのだろう。

「取り乱してごめんなさい。それで、もう一度お尋ねしたいんですけど、ここは何処なんでしょうか？」

やっと落ち着いたのか、箱から出たエルリアが二人の正面に腰を下ろして尋ねてきた。

「ここは『迷宮』の二十九層よ。『迷宮』はわかる？　あ、言い遅れたけど私はセシル。この子は……」

「シャーリイⅡマグナスと申します。始めまして、エルリアさん」

「はじめまして……『迷宮』は聞いた事があります。魔物がウロウロしてる場所、ですよね？」

言ってから自分の置かれている状況に気づいたのか、周囲をしきりにキョロキョロしたり、落ち着かなさ気にもじもじと始める。

「大丈夫ですわよ。私達が居ますから」

エルリアの手をそつと取って安心させるように笑顔を浮かべるシャーリイ。エルリアもつられて口元をほころばせた。まるで花の蕾が開くような笑顔だ。思わず二人とも見蕩れてしまう。

「そ、それはそうと。どうして貴女はこんな所に居るかわかりますか？」

さつきから数回繰り返している問いにエルリアは少し考え込むようにしてから、

「すみません、わかりません。確か自宅でおじいちゃんの書庫で本を読んでたはずなんですけど……」

記憶がかなり曖昧になっているようだ。数回の質問の結果わかった事は、自宅の書庫で本を読んでいたら突然入り口が消え失せ、頭の中に怨嗟の言葉が響いてきたと言う事らしい。そこで意識がなくなって気づいたら目の前にシャーリイの顔があった、ということだ。「ちんぷんかんぷんですわね」

「うーん……ねえ、エルリアさん。その本っていうのはどんな本だったの？」

「えっと、祖父が言うには『禁書』にあたるって言ってました。祖父は地元で魔法の先生をしているんですが、何かの報酬で貰ったけど、調べてみたら危険な本だったらしくて、封印していた筈です」

「お爺様に無断でその本を読んだという事ですか？」

少し咎める口調になったシャーリイにエルリアは「いえ」と答えてから、祖父が亡くなった後に書庫の整理をしていたら偶然出てきて、手に取ったらいきなりページが捲れ始めたということだった。

「『禁書』ねえ……話には聞いた事があるけど、良い話はないわね。大抵人を呪い殺したり、禁呪が載ってたり、といったところかしら」何もわかってないのも同然な状態に二人とも腕を組んで頭を悩ませる。まさかお宝が人間だとは本当にあり得ない出来事だ。

「何か、来ますよ」

エルリアが何気なく放った言葉に二人が即座に反応する。剣に、銃に手を遣って臨戦態勢を整える。

「……って、一般人の貴女が魔力探知なんてできるワケもないですね」

二人が周囲を魔法で探知した結果、何も感じられなかったので警戒を解く。素人にありがちな行き過ぎた心配が招いた幻のような感覚なのだろうと。

「そう……なのかな？」

今ひとつ納得できていないようなエルリアだったが、プロに言われてしまつては返す言葉もなく、それでも周囲を気にしていた。

「とりあえずは、地上に戻りましょう。このまま此処に居ても何も解決しませんわ」

「そうね。ギルドにも報告しなきゃいけなさそうだし……」

「来ます！」

エルリアの叫び声と共に三人のすぐ脇に魔物が文字通り『湧いて』出てきた。

「転移っ!？」

感知のしよのない出現に驚きつつも頭では冷静を保って剣を抜き、盾を構える。セシルも銃をホルスターから抜いてトリガーに指をかける。

「結界があるからまだ気づかれてな……」

魔物目がじろり、と三人を見据える。

「気づかれていますわね。エルリアさんは隅に逃げてください！」

泡を食つておたおたと逃げ出すエルリアを目の端に捕らえながら結界を解いて怪物を見上げる。

突如、咆哮と攻撃が同時に襲ってきた。振り下ろされた腕を盾で受け流しながら剣を振るう。背後では銃声が重なって響き、セシルが銃を撃ったのがわかる。

「こいつ……っ！」

「強いですわね」

シャーリイの結界を見破るような魔物なのだ。二十九層に居るようなレベルの怪物ではない。突然変異か、もっと下層に居るはずの魔物がなぜかここまでやってきたのかは不明だが、気は抜けない敵というのは攻撃を受け流したはずなのに腕がしびれるような感覚を以って痛感した。

体長は三メートルに及ぼうかという巨体に、巨大な蝙蝠の翼を生やした怪物は再び咆哮を放って周囲の壁を振動させる。

「こいつ、魔族ですわ!」

「げ、浄銀弾なんて今回持ってきてないわよ!」

敵の正体は低級魔族といわれる存在で、低級とはいえその力や魔力は並みの怪物よりも数段上にあたる。二十八層に出現するようなレベルの敵ではない。

「っ!!」

攻撃の隙を突かれて怪物の豪腕をモロに受けて吹き飛ぶシャーリイ。骨が何本か折れたのが激痛を伴って理解できる。

「シャーリイ!」

怪物の注意を引こうとセシルが銃を乱射するが、通常弾ではほとんど効果は見られず、怪物は倒れこんでいるシャーリイに歩み寄って踏み潰さんと足を上げる。

「炎の矢よ、敵を貫けっ!!」

突然響いた声に怪物が顔を上げると、無数の炎の塊が自分めがけて飛来していた。

「エルリアさんっ!」

驚いたのは人間2人も一緒だ。見るとエルリアの周囲には炎の矢が湧き出続け、次々と怪物めがけて放射されている。その量は今まで見た事もないような数だ。さらに二人の耳朵を打ったのは、

「……歌、なの?」

「いえ、詠唱ですわ、これ」

炎の矢はまだ続いているのに唄うような詠唱がエルリアの口から漏れる。良く見ると、エルリアが着ているドレスに縫い付けられている宝石が淡く光り輝いている。

「魔石を利用した多重詠唱?」

未だ机上の空論としてのレベルではあるが、魔法の多重起動は可能だと言われている。ただし、それには高々度な魔法制御と膨大な魔力が必要で、余程レベルの高い術者でも可能かどうか、とされている。仮に出来たとしても、初級呪文程度しか使えない筈なのだが。「闇を切り裂く聖なる光よ、暗き者を浄化する光を与えたまえ……」

「そんなっ！ あの呪文は……」

「退け悪魔よ！ 退魔神聖陣！！」

呪文か結唱した瞬間、悪魔の足元に巨大な六芒星が出現する。聖なる蒼い光の柱が天井目掛けて立ち上り、悪魔を、淀みきった玄室の空気すらも浄化していく。

悲鳴すら挙げる事もできずに悪魔の姿が消滅し、その跡には何も残らなかった。

「シャーリイさんっ！ 大丈夫ですか！？」

エルリアが駆け寄り、シャーリイの鎧越しに折れた肋骨周辺に手をかざし、短い呪文を唱えると、掌に優しい光が点り、痛みが引いていく。

「治癒魔法、ですわね。ありがとうございます」

骨が元通りになり、痣すらも残らずに完治したのを確認してからシャーリイはエルリアを見据える。

「貴女、一般人だなんて嘘をどうして吐いたのですか？」

「え……？」

「とぼけないでくださいっ！ あの膨大な炎の矢、今の高レベル治癒魔法、それにっ……」

エルリアの肩に掴み掛かるようにしてシャーリイが問い詰める。

その瞳は驚きと、怒りと、羨望が入り混じったような、混沌とした光を有している。

「答えてください！ さっきのあの魔法、多重詠唱したあれは、聖職者の中でも大司祭レベルでないと使えない絶対浄化魔法ですわよね！？ しかも魔法の多重詠唱が出来る方なんて聞いたことがありませんわ。貴方は教会の方なのですか？ 西国の大司教様なのですか！？」

「く、苦しい……」

「ちょっとシャーリイ、落ち着きなさい」

気づかない内にエルリアに掴み掛かっていたようで、セシルに羽交い絞めにされる形で引き離される。だが、それをもいとも簡単に

振り払って再びエルリアに詰め寄ろうと顔を上げると、

「あら？」

「え？」

そこに少女の姿はなかった。まるでさっきまでの出来事が夢か幻であったのように、そこには誰もおらず、ただただ石畳のみが広がっていた。

「シャーリィ、これ」

さっきの揉み合いの時に取れてしまったのであろう、一つの宝石が床に落ちていた。

「きつと、彼女のですわね。……私が預かっててもよろしいですか？」

一応は探索目的を果たしたので地上に戻って解散となる。依頼で潜ったわけではないので、ギルドに報告の必要性もなかったのもそのまま別れるはずだったのだが、お互いにエルリアの事が気になってしまい、そのままギルドまで歩いてきてしまった。

「さっきの方、何だったのでしょうか」

「全くわからないわね。魔法に関しては私は素人もいいところだし、その辺りはシャーリィの方が詳しいでしょ？ 感想は？」

「言いたくはありませんけど、洒落になってませんでしたわ。あれ程の魔力を持ってる人間なんて今まで見た事ありません」

炎の矢の魔法は初期魔法ではあるが、あれだけの量を制御、維持し続けるのは到底考えられない。しかもエルリアはその魔法を行使しながらも、

「退魔神聖陣だったかしら、話を聞いているとかなり高等呪文みたいだけど」

ギルド内にあるカフェに場所を移してシャーリィは紅茶を。セシルはコーヒーを注文して話を続ける。お互い『迷宮』から出て来たばかりで汗や血、埃や泥で汚れているのだが、風呂に入るよりも何よりもエルリアの事が気になっていた。

「高等呪文というより、どちらかというと禁呪に近いですわね。今

の教会である呪文を使えるのはほんの一握りの大司教か、枢機卿クラスの方だけだと思いますわ」

「そんなに高等なのね。それを多重起動させるって、どれだけの子はすごいのかしら」

「とにかく、私は彼女を探してみようと思います。このままだと寝覚めが悪いですし、もっと詳しく聞きたい事もあります」

「そうね。私も気になるから手伝うわ。どうせしばらく『迷宮』に入る用もないし」

とはいえ、探すとしてもどこを探せば良いのか皆目検討がつかない。シャーリーの予想ではエルリアが消えたのは彼女が転移魔法を使ったからだと思われるのだが、その転移先がわからなかった。『迷宮』内の別の場所に跳んだのか、街にまで跳んでいるのかが不明だったし、高等呪文を駆使した事を考えると、二人が迷宮から出てくるまでに半日が経過してる現在、既にこの街には居ない可能性もあった。

まずはお互いに風呂に入ってから再合流するという話で落ち着き、一旦別れてから三時間後にギルド前で落ち合う事を決めてカフェを出た。

「ふうっ」

シャワーを浴びて全身の血と汚れを綺麗に洗い流し、髪の毛も念入りに手入れをしてからバスタオルを身体に巻いて浴室を出る。

「一体あの方は何者なんでしょう……」

一人ごちるシャーリー。何もかもがわからない事だらけだった。わかっている事といえば、西の国から来たという事と、名前のみ。しかも来た経路が呪いがかかっていたであろう『禁書』に触れた事から転移してしまったということである。

「なーんにもわかりませんわ、ね」

バスタオル姿のままソファに腰掛ける。シャーリーの自室は教会の宿舎の一室で、元教会騎士団長という立場なので個室になって

おり、その間取りや内装は質素を旨とする教会内でも豪華と言っても差し支えのないものだった。

「それにしても、かわいい方でしたわね」

大輪の花の蕾がほころんだような笑顔を思い出し、自然と釣られて笑顔が浮かんでしまう。

コンコン

扉をノックされた音に我に返り、バスタオル一枚だけというあられもない姿だと気付いて、返事としばらく待つようにだけ言ってから急いで下着と衣服を着て扉を開く。

「シャーリイ様、司教様がお呼びです」

修道女の言葉にうなずいて礼を言ってから司祭が待つ礼拝堂に足を進める。

レムルアイランドにはいくつかの教会が在るが、シャーリイが住んでいるのはその中でも最大の教会支部で、この地方の本部も併設している。『迷宮』が発見され、各国の精鋭が集結したのと同じ頃に教会もシャーリイを含む精鋭部隊の第一騎士団を派遣していたのだ。それを足がかりに教会はいち早く礼拝堂を設け、司教や司祭なども現地に送り込んで探索と同時に布教にも勤しんでいた。

「シャーリイⅡマグナス参りました」

礼拝堂に入ると、司教のみが祭壇に立っており、参拝者の姿は見えなかった。夕方というより、夜の時間帯に入っているのだから、教会も門戸を既に閉じているからであろう。

「『迷宮』から戻ってきてすぐに呼び出してしまつてすまないね」

支部長も兼ねる司教は柔らかな瞳でシャーリイを見つめる。

まずは神に祈りを捧げ、無事に戻った事への感謝の言葉を紡ぐ。

「さてシャーリイ君。君に会ってもらいたい人物が居る」

「どなたでしょうか？」

本部や騎士団からの来客であれば直接彼女の部屋を訪れるはずであつたし、そこから考えると外部の人間だと考えられるのだが。

「少しややこしくてね。相手の方は君となら話が出来ると言ってい

るのだよ」

やあ困ったような表情の司教。人柄の良い彼は高い地位に居るにも関わらず、信徒とも気軽に接するし、頼まれると断れない性格もしていた。

考えても栓のない事だったので、司教の背中を追う。礼拝堂を抜け、彼が向かった先は教会施設に付属する病院の一室だった。

「入るよ」

穏やかなノックの後、司教が一言告げてから病室の扉を開いてシャーリイを促す。

「あ、シャーリイさん」

「え、エルリアさん!？」

真っ白な入院服を着たエルリアがシャーリイの姿を捉えて安心してように顔をほころばせた。

「貴女、どうしてここに……?」

その説明は司教が語ってくれた。

迷宮でシャーリイ達と出会った後、気づくとエルリアは街区の裏路地に立っていたそうだ。しばらくの間混乱していたが、落ち着いてから大通りに出、彷徨っていた時に出掛けていた司教と偶然出くわし、彼が保護したらしい。

「あまりにも様子がおかしかったから声を掛けてみたんだ。そうしたらここが何処かわからない、どうやって来たのかもわからないという事だったから、私が保護をしてここに連れて来たという話だ」

時間から考えると、司教とエルリアが出会ったのは、シャーリイ達が彼女を見失ってから大して経過していないようだった。

つまり、エルリアはシャーリイ達の前から転移呪文を無意識下で使って地上に出た事になる。だがしかし、地上まで一気に跳べるような転移呪文などシャーリイは聞いた事もなかった。数フロアを移動するというのは数件聞いた事はあるが、どれも高位の魔法使いしか使えない呪文であるし、転移先を指定する為には膨大な計算と魔力が必要だ。それに伴って詠唱も長くなる筈なのだが、目の前の少

女はほぼ無意識に、しかも一瞬でそれをやってしまったということになる。

「彼女の話の聞いていると、悪意を持ってる様子もないし、君の名前が出たのでね。君に来てもらったという事だ」

「そうですか……私もちょうど彼女を探していた所ですわ」

「おや、そうなのか。それではここは君に任せても良いかな？ 私には明日の礼拝の準備があるので失礼させてもらうよ。エルリア君、気を使わずに自分の家だと思ってくつろいでくれたまえ」

最後に短くエルリアに祝福を授ける言葉を残して司教は去って行った。シャーリイは彼を扉の外まで見送ってから近くを歩いていた修道士にギルドへひとつ走りしてセシルへの言付けをしてもらうように頼んでからエルリアが待っている部屋に再び入る。

「あの、ご迷惑をお掛けしちゃってごめんなさい」

開口一番、エルリアが頭を下げる。シャーリイは「気にしないでください」と応えてからエルリアが半身を起こしているベッドの脇に椅子を置いて腰掛ける。

「貴女についてはわからない事が多すぎて探していましたのよ」

「はい……」

心細いのであろう、不安気な表情でうつむくエルリア。シャーリイはそっとエルリアの手に自分の手を添えて優しく握る。

「心配しなくて良いですわ。別に取って食べようっていう訳じゃないですわ。それに、貴女のこれからの事も考えなくてはいけませんでしょ？」

「ありがとうございます」

幾分緊張が和らいだのか、少しだけ笑顔を取り戻したようだ。考えてみれば、目を覚ますといきなり全く知らない『迷宮』の宝箱の中に居て、さらに見ず知らずの街中に放り出されたのだ。頼るべき親類も居ない中、不安だらけなのだろう。

セシルが到着するまでまだしばらく時間がある事がわかっていたので、先にエルリアから事情を詳しく聞く事にする。

「……男の方、なんですか？」

いくつか質問をぶつけた後、エルリアが唐突に「私、男なんです」と言った事が始まりだった。『迷宮』内で見た時も、今もどう見ても顔つきは女性のそれであるし、身体つきも間違いなく女性としか思えない。胸のふくらみも性別を主張している。

「記憶が混乱してるのでしょうか……」

「いえ、もうはっきりしています。私——僕は元々男でした。間違いないありません」

「ではどうして女性のような言葉遣いを？」

「頭の中では普通に喋っていても、口から出る時は何故かこういう言葉遣いになっちゃうんです……」

彼女——彼が言うところの『禁書』による呪いの所為なのだろうか、全くわからない。エルリアが此処に連れて来られた時に女性信徒がエルリアの沐浴を手助けしたらしいが、彼女を呼んで話を聞いても女性の身体だったという返答しか戻ってこなかった。

「お待たせ」

信徒を帰した頃によくセシルが到着したので、事のあらましを一通り話す。やはり元男性という部分には驚きを隠せなかったようだ。

「取り敢えず、エルリアさんが男性であろうと女性であろうと、身寄りのない状態で放り出す訳にはいきませんわね」

ベッド脇の椅子にシャーリィが座り、その隣にセシルが座って話を再開する。最初に片付けなければいけない問題は彼女の住処である。

「教会にこのまま居ていただくのもひとつの手ですが、エルリアさんは信徒ではないんですね？」

「はい……私が住んでた町は小さい町だったので教会がありませんでしたし、両親も祖父母も無神論者でしたから」

建前上ではあるが、教会に住む者は押し並べて洗礼を受けた信徒、あるいは洗礼を待つ者でなければいけない。例外は多様に存在はす

るが、どれも後に洗礼を受ける前提がある。

打つ手がない状態で沈黙のみが部屋を支配する。

「……!？」

エルリアの視線が急に窓の外に向けられる。その目つきは先程までとは違い、鋭い。

「どうしましたの？」

「魔物の気配です！」

「何ですって!？」

同時に『迷宮』方向から3本の信号弾が打ち上げられた。『迷宮』入り口を警備している警備員が打ち上げる物だ。それが意味する事はただ一つ。魔物が地上に出てきたのだ。

「出ますわ! エルリアさんはここでお待ちください」

「私も行くわ」

シャーリィが鎧と武器を取るために自室に向かい、セシルもその後を追って部屋を飛び出す。

「状況は!？」

鎧に身を包み、司祭から祝福を受けたシャーリィとセシルが『迷宮』入り口近くにある前線司令部に到着した時、司令部周囲には怪我人と死者の山が出来上がっていた。

「怪物の数が多すぎます! なんとか入り口で押しとどめています
が、時間の問題かと」

ここ1年程このような大規模襲来はなかった。だからといって気を抜いていた訳ではないのだが……

「万が一の為に一般人は教会に避難するように指示をお願いします
わ。戦える者は総員直。ギルドから冒険者への指示は出ていますよ
ね?」

ギルドに所属している冒険者達には、ギルドが身元保証をする代わりに有事の際には街を守る義務を負う。当然その場合にはギルドとこの街を維持する各国からの報奨金も支給される。

「非戦闘員で協力を申し出ている者には死体を教会へ運ぶように指示願います。放置しては死霊に取り付かれる可能性があるのです。教会にて祝福する必要性があります。」

死者を放置していると、『迷宮』から吹き出る死霊が死体にとりつき、死喰者となって立ち上がる事という前例もあった。

前線の指揮権を受け、兵士と冒険者数名を伴って前線に到着してみると、先程より凄惨な光景が待ち受けていた。焼け焦げた地面は大量の血を吸ってぬかるんでいる。見える範囲全てに死体が重なっていた。

「援護するわ」

「お願いしますっ！」

背後から拳銃を連射する音を聞きながらシャーリイが駆ける。精鋭の兵士や歴戦の冒険者達がなぎ倒された隙間から漏れ出始めた怪物目掛けてシールドチャージを加え押し戻す。

「『妖精騎士』シャーリイ!! マグナス、参ります！」

前線に居る者達の中から歓声が沸き起こる。レムルアイランドに集まる強豪国の中でも、指折りと称される教会騎士団の到着に、押され気味だった兵士たちも戦意を取り戻し、情勢を盛り返し始めた。「敵の中に中級魔族が居る模様です。それを倒せば！」

「わかりました! とりあえずは湧き出てくるこいつらを片付けますわよ!」

剣と盾を構えて目の前の怪物の群れを見据え、先陣を切る。

「まだ敵の中核には到達しないのですか!？」

1時間後、10体目の魔物を切り伏せてシャーリイが叫ぶ。魔物の群れは確実に減ってはいるが、周囲に立つ兵士の数も減ってきている。魔物1体を倒すのに2人の兵士が倒れているようだった。

「未だ見えませんっ!」

「くっ……」

シャーリイ自身も度重なる戦闘からくる疲労で防御が疎かになり、

傷も受けている。長期戦では圧倒的に不利なのだ。今までであれば30体程度を片付ければ敵が退いていたのだが、今日に限ってはそうもいかないようだ。

「シャーリイさま、前！」

「!？」

辛うじて盾を構えたものの、怪物が放った力任せの一撃は周囲の兵士数名をも巻き込んでシャーリイを吹き飛ばす。

「くはっ……」

呼吸が一瞬止まり、全身が悲鳴を上げる。背中で仲間の兵士が潰れる感触。失いそうになる意識を必死で捕まえながら周囲を見回すと、立っている人間の方が少ない。対して魔物は暗闇の奥からまだ沸いてきている。

「……総員撤退！」

苦渋の決断を下す。伝令兵を介してその言葉は即座に司令部に届けられ、防衛線を後退させながら戦い、最悪の場合は街を放棄し、敗走の手続きがこの街を統治する連合国家総責任者から下されるであろう。再び魔物が野に放たれようとしていた。

「神よ……」

口を衝いて出たシャーリイの祈りに、空が反応した。

抵抗が続けていた数少ない人間を払いのけた魔物目掛けて雷が突き刺さり、その身体を一瞬で消し炭に変える。

次々と落雷が続き、その度に魔物が黒焦げになっていく。

「何が……？」

痛みを堪えながら辛うじて身体を起こしたシャーリイが見上げると、宙に浮かぶ人影が見えた。魔力を込めて視力を増大させるが、消耗が激しすぎてはつきりは見えない。それでも辛うじて確認できたのは、至る部分が淡く発光するドレスを着た少女の真摯な眼差し。そして、歌うような声。

「エルリアさん……？」

『迷宮』前にソプラノボイスが響く。それが宙を舞うエルリアの

呪文詠唱だという事に気づける者はいなかった。

「……我が呼びかけに応えよ！ 槍持つ戦乙女ゲイルスケグルよ
我が眼前に立ちふさがる敵を——薙ぎ倒せっ！！」

結唱と同時にエルリアの両手に光り輝く槍が現れる。それを怪物
目掛けて投擲——怪物達の頭部に、腹部に、胸部に次々と穴が空き、
そこから血液を振りまきながら倒れていく。

「疾れっ、迅雷！」

差し出したエルリアの左手から数条の雷が迸り、怪物を包み込む。
数瞬も経たずに怪物がビクリと震え、そのまま巨体が地面に倒れこ
み、動かなくなる。

「すごい……」

逃げる脚を止めたシャーリィが呟く。エルリアが使っている魔法
はどれも上級魔法や今となっては文献でしか見る事のできないよう
な魔法ばかりだった。しかもそれらを立て続けに、多重詠唱や高速
詠唱をも駆使しながら使いこなしている。そんなレベルの術者など、
シャーリィが出会った人々の中には一人としていない。むしろ、こ
の世の中に居るとは思えないような圧倒的な強さであった。

「聖なるかな 聖なるかな 慈悲深き神よ、戦に傷つき者達に癒し
の光をっ！ 倒れし者達に安寧なる眠りをっ！！」

光が降り注ぎ、シャーリィ達を包み込む。

「大規模戦闘用の回復呪まで！？」

身体を走る痛みが引いていき、活力が漲る。同時に死体に祝福が
施され、死霊に取り付かれるのを防ぐ。司教クラスの神官がやっと
使えるようなハイクラスの治療魔法である。魔力の消耗が激しすぎ
る為、一度使えばその日は動けなくなる程の呪文のはずである
のだが、彼女は更に呪文の詠唱を始めた。

「深淵なる大地よ 怒りもて！」

エルリアが着ているドレスの各所に散りばめられている魔石の光
が一層強くなる。最早発光しているといっても過言ではなかった。
そこに蓄えられている魔力が大量に引き出されているのだ。

「そ、総員退避！ この場から逃げてっ！！」

その膨大な魔力に危険を察したシャーリイの悲鳴に近い叫び声に、動けるようになった兵士や冒険者達が目散に退避を始める。怪物はエルリア目掛けて手に持つ武器を投げたり岩を投げていて地を走る人間には目もくれない。中には魔法でエルリアを攻撃している魔族も見られたが、全てが彼女に届く前に消えうせている。

「逃げ遅れが居るわ！」

「私が戻ります！ セシルさん達はそのまま司令部めがけて走り抜けてっ！」

セシルに指示を残して反転。エルリアの回復呪文の範囲外に居た為にまだ動けない人間を数人引きずるように後退する。上空のエルリアが放つ光はもう太陽のような輝きを帯びていた。それに呼応するように地響きが沸き起こる。次第に大きくなる地響きは揺れを伴い、立っていることすらまもなくなくなってしまふ。『迷宮』入り口に地割れが走る。

「だめっ！ 間に合わないっ！」

瞬間、シャーリイ達の周囲に結界が張り巡らされる。見ると、逃げ遅れた者、死者、全てが結界に覆われていた。

「何ていう魔力ですの……？」

魔石から魔力を引き出しているとはいえ、尋常ではない魔力だ。広範囲殲滅呪文を立て続けに使用し、さらに大規模戦闘用の回復呪文まで使い、今、地震を引き起こして地割れを誘発しようとしていた。このような魔法、シャーリイは見た事も聞いた事もないし、想像の範疇を大幅に超えている。

「アースクエイクっ！」

一際大きな揺れが怪物を襲い、立て続けに地面が割れて奈落の底に怪物達が吞まれていく。結界に守られて地面から浮いているシャーリイ達に直接の被害はないが、周囲の建物が倒壊していくのがわかる。避難勧告が重ねて出されているので、一般人への被害はないと思われるが、その威力に背筋に寒気さえ走る。

地震が収まり、地割れが何事もなかったようにその口を閉じた頃にエルリアが地面に降りてきた。脚が地面に着いた途端、エルリアが崩れるように座り込んでしまう。

「エルリアさんっ！」

解かれた結界から走り出して駆け寄ると、エルリアは渾身の力を込めて立ち上がろうとしていた。

「無理ですわ！ 魔力も体力も消耗しすぎです！ 魔石にこめられている魔力だってもう残っていないですわよ！」

実際、エルリアが着ている魔石は貯められた魔力を使い果たし、ただの宝石になっていた。

「使い方に慣れてなくて……まだいます！」

声に釣られて『迷宮』入り口を見ると、一匹の怪物がのっそりと外に出てこようとしていた。一目見ただけでわかる。中級魔族だ。纏っている魔力が今まで戦った雑魚とは桁違いだった。

「グレーター・デーモン……」

絶望の声をシャーリイが漏らす。『迷宮』内でも見た事もないような高々レベルの怪物だ。

「いきますっ！ いけますっ！」

腰に下げた鞘からショートソードを抜いて駆け出す。同時に呪文詠唱。

「神秘を我が手に！」

剣に光が宿る。魔物に対抗する方法の一つである、魔力を込めた武器による直接攻撃だ。エルリアはそのまま跳躍し、魔物に斬りかかる。

「神よ 我に力をっ！」

神聖呪文をロングソードに施し、シャーリイも駆け出す。エルリア一人を戦わせる訳にはいかない。自分も、戦える！

「貴女は回復に専念してくださいっ！ 私が時間を稼ぎます」

魔物に再び斬りかかろうとするエルリアを押しとめてシャーリイが前に出る。

「で、でもっ！」

「私だって力になりたいのです！」

デーモンの攻撃を盾でいなし、その腕を切りつける。エルリアも右手側からショートソードを突き出し、なおも攻撃を加えようとするが、デーモンが体勢を整えるために一旦退く。

「エルリアさん、これを！」

懐から宝石を一つ取り出してエルリアに投げ渡す。『迷宮』で出会った時に拾ったエルリアの魔石だ。

「ありがとうございます！」

魔力を引き出し、自らの裡で練り上げる。高まり、暴れ始める魔力の方向性を定め、詠唱を開始する。

「神聖なる、大いなる存在よ！ 邪悪なる者に神罰を！」

歌うような詠唱を背後で聞きながらシャーリイが魔物に突貫して剣を振るい、盾で受け止める。同時に身体の奥底から湧き上がるような力を感じる。エルリアが呪文を詠唱しながら同時にシャーリイに祝福の呪文を与えたのだ。

「こんな事まで……！」

「神の子に仇為す穢れき魔物を撃ち果たせっ……！」

結唱した呪文は力を伴って具現化し、エルリアの真正面に光の渦が沸き起こる。

「こっちですわ！」

魔物の注意を自分に引きつけるために盾を捨ててロングソードで再び斬りかかる。

「聖閃光っ……！」

巨大な光の柱が魔物目掛けて放たれる。刹那、シャーリイが剣を魔物の脚に突き刺し、地面に繋ぎとめて身をかかわす。

ジュオっという音を立てて魔物の上半身を光が通過し、その半身以上を包み込み、走り抜ける。光が駆け抜けた後には、魔物の足だけが残り、それもすぐに塵となって消え去った。

「やった……！」

『迷宮』入り口に再び静かな風が吹き、怪物の襲来が終わった事を告げているようだった。

「撃退完了、ですわ」

今一度『迷宮』入り口を確認し、怪物の姿がなくなったのを何度も見直してから、終了宣言の意味を持つ信号弾を打ち上げる。

程なくして兵士や冒険者達が戻ってくる足音と歓声が聞こえてきた。疲れ果てた身体をひきずってエルリアの元に駆け寄る。豪華なドレスを着た少女は呆けるように空を見上げていて、そのまま仰向けに大地に倒れた。

「エルリアさんっ！」

辛うじてエルリアを受け止め、抱きかかえる。華奢としか言いようのない身体は大量の魔力を放出した為に体力も尽きていたようで、死んだようにシャーリィに身を委ねている。

「お疲れ様でした」

絹のような金髪を優しく撫で付けながらシャーリィも意識を失った。

――『迷宮』四十二層魔導エレベーターに続く道――

「そういえば、貴女がエルリアの事を「お姉さま」って呼び始めたのっていつからだっけ？」

タバコの灰を携帯灰皿に落としながらセシルが尋ねる。シャーリィは少し思い出すように目を閉じてから、

「確かお姉さまがこの街の英雄になって、『血風の魔女』の二つ名が流れるようになった頃だと思えますわ」

半年前の出来事だが、ありありと思い出せる。

「あれは……」

「あの、そろそろ起きたいんだけど……」

振り向くと、エルリアが頬を紅く染めながら半身を起こしていた。いつの間にか目を覚まし、聞いていたようだ。恥ずかしそうにして

いる。

「お姉さまっ！ もう大丈夫なのですか？」

一瞬で数歩の距離を詰めて上半身を起こしたエルリアの元に移動し、その身体を抱きしめる。

「本当に大丈夫なのですか！？ 何でしたら今日のところは一旦退いても……」

「落ち着きなさいよ。はい、エルリア。紅茶」

「ありがとうございます。本当にもう大丈夫ですよ。体力も魔力も回復しました」

未だ纏わりつこうとするシャーリィをなんとか宥めて紅茶を飲み、お茶請けと出されたクッキーを齧る。

「何だか懐かしい話してたね」

「うるさかったですか？ ごめんなさい」

「ううん、全然。起きかけの時に少し聞いただけだし」

「あれからもう1年以上経つのね。その割に貴女の事はまだ何一つわかんないけど……」

1年という時間が経過したが、エルリアの身の上に起こった事は何一つわかっていなかった。何故膨大な魔力を裡に秘めるようになったのか、何故いくつもの秘術、禁呪と呼ばれるような超高等呪文を操れるのかなど、全てが謎に包まれている。

だが、いくつかわかった事はあった。

エルリアが答えた彼女の故郷には確かにエルリアⅡレイモンドという少年が居たと言うこと。そしてその少年がある日を境に突然姿を消した事、少年の自宅の離れが丸ごと『消えて』しまった事など、彼女の言を裏付ける証拠は数多く判明していた。

「でも、この姿で家に戻っても到底信じてもらえませんかね。元の姿に戻るまではここでがんばるしかないですよ」

「じゃあ、とりあえずは目の前の依頼をこなさなきゃね」

「ですわね」

「うん。この先にあるエレベーターで一気に五十層まで行っちゃお

―『迷宮』五十層魔導エレベーター前―

「これで片付いたかな？」

「もう大丈夫よ」

「周囲に怪物の気配はありませんわ」

五十層に降りた瞬間、怪物と魔物の群れと遭遇したが、激戦の末退けた三人は目的の部屋を目指して歩みを続ける。各々が魔力探知と気配を探りながら慎重に一步一步進んでいく。

「次の角を右なんだけど」

「……居るわね」

「そうですわね」

アイコンタクトの後、セシルが単身飛び出して銃弾を怪物に浴びせる。こちらに気づいてなかった怪物は叫び声を上げて倒れるが、残ったものが雄叫びを上げて襲い掛かる。それをシャーリイが即座にセシルの前に出て盾で攻撃をいなしてロングソードを振るう。エルリアも即座に呪文を唱え、炎の矢を敵目掛けて撃ち放つ。

戦闘はわずか二十分で終了し、再び探索を開始する。

そんな事を数回繰り返した後、ようやく目的の部屋の前に辿り着いた。

「さすがに疲れたわね」

「五十層というだけあって、敵の強さも今までの比になりませんわ」
エルリアが左手の動き一つで強力な結界を張り巡らし、最後の休息を入れる。

「お姉さま、水ですわ」

「ありがとう。干し肉食べる？」

「あ、ちょうだい」

食事を一通り摂ったあと、交代で休息を取って体力と魔力の回復

に努める。

「ね、エルリア。ちょっと聞きたいんだけど、いい？」

「何ですか、セシルさん」

シャーリイが眠っている時、濡れタオルで身体を拭きながらセシルがエルリアに言葉を投げかけた。

「どこまで強力な呪文が使えるのかしら？」

素朴な疑問ではある。セシルがエルリアと出会ってから1年が経過し、その豊富な呪文を目の当たりにしているが、毎回初めて聞くような呪文が飛び出している。しかもそれらはかなり強力な呪文でもあった。

「あの襲撃の時に使った地震の呪文が今まで見た中では飛びぬけて最大だけど、あれ以上ってあるのかしら？」

「えっと……」

水の入ったカップを手の中で弄りながら口ごもるエルリア。

「言いたくないなら良いわよ。変な事を聞いちゃってごめんなさいね。ただの野次馬根性だから気にしないで」

「いえ、そうじゃないんですけど……あるにはあります。ただ、使いたくないというか、『迷宮』内では使えないですよ。効果範囲が広すぎますし、ダメージも洒落になってませんから」

「そ、そうなの？」

地震の呪文以上の範囲とダメージとなると、もう想像すらつかない。あれだけでも街の半分が大なり小なり被害を受けた程だったのだが。

「でも、エルリアだったら安心ね」

「と言うと？」

「だって、貴女だったら無茶な使い方はしないでしょ？ いつも見ているけど、適材適所じゃないけど、ちゃんと状況に応じた魔法の使い方をしてるし、魔法の仕組みっていの？ それも熟知してるみたいだから、私としては安心なのよね。ほら、よく居るでしょ、新しく覚えた魔法を使いたくて暴発させちゃう人って」

「あはは……街でも時々暴発騒ぎがありますね。そういうのは多分
しないと思いますけど」

「けど、何？」

煙草に火を点けながら続きを促す。エルリアはその表情に陰を落
として、

「仮に、ですよ。万が一、私の中に『呪い』が残っていて、それが
暴走したらどうなると思いますか？ 私が聞いたあの本の声は、明
らかに人間に対して憎悪を持っていました。全てを破壊しろ、全て
を殺しつくせ、殺してやる、そんな声ばかりでした」

「それは……」

エルリアは華奢な自分の身体を両腕で抱くようにして、

「私はそれが怖いんです。あの声はまだ私の耳にこびりついていて、
叫び続けているんです。普段は気にするような物じゃないんですけ
ど、時折その声が大きくなってるような気がして……」

震える身体を抑えるようにぎゅっと両腕に力を込める。その上か
らセシルがそっと少女の身体を抱きしめる。

「大丈夫よ。私が居るし、シャーリイも居るわ。それに他のみんな
も。普段は貴女に守られてる私達だけど、いつでも貴女を守る盾に
なる覚悟はしてるわ。貴女はそれだけの事をしているのよ。それだ
けは忘れないで」

「はい……はいっ」

いつの間にか涙を流していたエルリアがセシルの胸の中でこくこ
くとうなずく。

「あーっ！ 何をしているんですの！？」

目を覚ましたシャーリイが力づくで二人を引き離す。

「お姉さまっ、セシルさんに何かされたのですか！？ こんなにお
泣きになって……」

心配そうな表情を一変させてセシルを睨むシャーリイ。手は剣の
柄を握っている。

「ちよっとシャーリイ、落ち着きなさい。別にエルリアを泣かせて

いた訳じゃないわよ」

「いいえっ！ 現にお姉さまが泣いてるじゃないですか。お姉さま
いじめる人は許しませんっ！」

「ちょ、ちよっとシャーリイ、落ち着いてっ！ 別にセシルさんに
泣かされた訳じゃないから！」

シャーリイを羽交い絞めする格好でエルリアが止めに入る。シャ
ーリイはようやく落ち着いたようで、二人の話を聞いてくれた。

「そんなつまらないお話をしてたんですか」

「つまらないってシャーリイ……」

珍しく口を尖らせたエルリアに、シャーリイは素早く抱きつき、
その頬に頬擦りしながら、

「大丈夫ですわ、お姉さま。そんな声なんて私が追い払って差し上
げますっ！ だから心配なんて無用なのです！」

「シャーリイ……ありがとう」

「ですからお姉さま、地上に戻ったら私がお姉さまのお部屋に泊ま
りこんで……」

「それはしなくていいです」

休憩が終わった後、全員で軽く食事を摂ってから準備を整え、周
囲に怪物の姿や気配がないのを確認してから結界を解く。

「では、行きます」

扉を開いて玄室内にシャーリイ、セシル、エルリアの順番で入る。
室内は少し広めになっており、中に怪物が居る様子はない。何も
ない部屋であった。

「拍子抜けですわね」

剣を鞘に戻したシャーリイがそれでも注意は怠らずに息を吐く。

「でも、『聖杯』が入った箱もないよね」

「条件は特になかったですわよ」

鍵が示すのは宝箱の場所だけではなく、それを出現させる条件も
提示される。今回、教会からシャーリイに託された鍵が示したのは、

宝箱の位置のみであり、出現条件はなかった。

「となると、出てくるのを待つしかない？」

宝箱によっては、出現条件はないものの、その宝箱が出現する時間が決められている物もある。一日に数分、数時間しか出てこないものもあれば、その期間が数日、数ヶ月に及ぶものもある。

「このまま1ヶ月待機とかだったら厳しいよね」

「飢え死にしていますわ」

三人とも丸一日程度なら起きたまま過ごす事が可能だし、戦闘もこなすことが出来る。ただ、その期間が延びれば延びる程生存確率は下がってしまう。

懐中時計を出して時間を確認する。玄室に入ってから二時間が経過していた。宝箱は未だに出現していない。

「うーん、長期戦になりそうかな？」

「そうなりそうですわね」

どのようにすれば出現するかわからない現在、結界を張って身を隠すわけにもいかず、三人は玄室の隅に固まって待っていた。

「ちょっと歩いて来るね」

長い間立ったままだと筋肉が固まってしまいそうなので、エルリアが歩いて部屋の中央に向かう。当然注意は最大限に払う。

「ん……？ これは？」

そう呟いたエルリアの姿が突然消え失せる。姿が見えなくなる程広い部屋ではないし、現に真正面の壁はシャーリイにもセシルにも見えている。

「お姉さま!？」

慌てて走り出そうとするシャーリイをセシルが押しとどめる。

「何が起こったのかわからないわ。落ち着いて対処しなきゃ」

「そ、そうですわね」

慎重にエルリアが消えた場所に近づく。

「何もありますんわね」

「そうね……確かここで消えたのよね」

記憶を頼りにエルリアが消えた場所にセシルが立った瞬間、

「セシルさん!？」

セシルの姿までもが消えてしまった。残されたシャーリィもその場に立つ。すると、足元に極小の魔方陣が浮かび、瞬時に周囲の景色が変わる。エルリアですら見抜く事のできないような巧妙な転移トラップが仕掛けられていたのだ。

目の前で繰り広げられていたのは、戦闘だった。

「お姉さまっ!」

「気をつけて! 六十層レベル!」

その一言で緊張感が最大限に引き上げられ、魔力を練り上げて身体能力を限界まで引き上げる。身体に負荷は大きくかかるが、今はそのような事を言っている場合ではなかった。

周囲を見ると、数体の魔物がエルリア目掛けて攻撃を、魔法を繰り出していた。彼女はそれらを防御壁で防ぎきり、攻撃に転じるが、熾烈な攻撃の為に防御が中心になっているようだった。

剣と盾を構えなおしてエルリアの前に躍り出る。セシルも連続で拳銃のトリガーを引き絞って教会の祝福を受けた浄銀弾を放つ。

「お姉さまは詠唱を! 私が護りますわ!」

新たな獲物の出現に魔物達の注意がシャーリィに移る。呪文を唱えて防御フィールドを展開させるが、エルリア程防げる訳ではない。だが、シャーリィには騎士として鍛え上げた肉体と聖魔法、それにエルリアから貰った鎧があった。

「お姉さまに手は出させませんっ!」

一体の魔物に斬りかかり、自分への注目度を引き上げる。途端に魔物が放つ炎の矢や氷の刃が降り注ぎ、同時に近接攻撃も襲い掛かる。

「くっ……」

「開け、地獄の底よ! 全てを焼き尽くせ!」

エルリアの呪文が結唱し、強大な炎が魔物の一体を一瞬にして焼

き尽くす。

一瞬の安堵もつかの間、シャーリイ目掛けて強烈な一撃が放たれる。

「シャーリイ！」

セシルの銃弾が魔物の腕に集中して炸裂し、その腕を四散させる。回復させる暇も与えずに畳み掛けるように射撃を繰り返す。グリップに嵌め困れている小型のアイテムストックカージエムには数百発の弾丸が内臓されており、それこそ無尽蔵のマガジンのようになって銃弾を供給し続ける。

一体の魔物が蜂の巣にされて塵と化し、その背後に立つ魔物の足元から青い炎が立ち上る。エルリアの呪文が結唱して更に一体の魔物を駆逐していた。続いてエルリアが短く呪文を詠唱。シャーリイの身体を活性化させて傷口を塞ぐ。

「神の光よ、剣に宿りたまえっ！」

神聖呪文を剣に与え、魔物への攻撃力を高め、一撃の下に魔物を一体葬り去る。

「さすがは『妖精騎士』だね」

「お姉さまに褒めていただけるなんて、嬉しいですよ」

緊張の中でも軽口を叩きながら互いにフォローをし、三人で傷を負いながら敵を一体、また一体と倒していった、1時間程度で部屋に居た十体の魔物を全て駆逐する。

「シャーリイ、出たわよ！」

敵を駆逐した瞬間、宝箱がその姿を部屋の中央に現した。前線で戦う者の宿命として、たくさんの傷を負っていたシャーリイがエルリアに治癒を受けてからゆっくりと箱の前に移動する。

一通り畏がないかを確認してからそっと鍵を差込み、回す。カチリ、と音がして蓋が自動的に開いた。

神聖な光が箱からあふれ出す。それを浴びているだけで傷が癒え、魔力までもが漲るようだった。

「これが、『聖杯』……」

宝箱に安置されていたのは、高さ1メートルはあろうかという大きさの銀色に輝く杯だ。

シャーリイが神に祈りを捧げる言葉を紡いでから、そっと杯を持ち上げ、予め教会から渡されていたストッカージェムに『聖杯』を封入して大司祭以上の者しか持つ事ができない解呪鍵を設定する。

「任務完了ね」

「いえ、まだです」

「え？」

宝石を懷に入れ、絶対に失くさないように何重にも確認してからシャーリイが顔を上げる。

「これを無事に地上に持ち帰らなければいけません」

「帰るまでが遠足ってワケね」

二日を掛けて地上に戻った三人はその足で教会に向かい、大司祭に『聖杯』が封入されている宝石を手渡した。

大司祭が決められた手続きを踏んで封印を解除し、中身を確認して大きくうなづく。

「間違はなく『聖杯』です。信徒シャーリイ、よくやってくれました。エルリア様もセシル様も、本当にありがとうございます。この大恩、教会は決して忘れる事はありません。教皇陛下に代わって心より御礼申し上げます」

深々と頭を下げ、最大限の感謝を示してから笑顔を浮かべる。

「粗末ではありますが、食事の用意をさせます。今日は記念すべき日です。大いに祝いましょう！」

『聖杯』奪還の報は瞬く間に街に広がり、教会本部にも急報の早馬が放たれた。

祝いの席は教会らしく質素ではあったが、心づくしのもてなしが施され、信徒を始めとして、街住む者に向けても振る舞い酒と料理が配られた。質素儉約を旨とする教会では異例の出来事だ。

その二日後、旅の疲れを自宅でゆっくりと癒していたエルリアの

下に教会から一通の手紙が届いた。蜜蝋を切って中を確認すると、一週間後、『聖杯』受領の為に教皇自らがこの街、レムルアイランドを訪問するらしく、その宴の招待状が入っていたのだ。その右下には教皇自らのサインと印が押されており、信徒からすれば家宝級になるようなものなのだが、

「うーん、こういうきちんとした席って苦手なんだよね……」

ソファに寝転がって招待状をテーブルに置く。信徒でもないエルリアにとっては興味の範疇外だ。多分この招待状はシャーリイやセシルの所にも届いているであろうし、シャーリイにいたっては今頃歓喜のダンスでも踊っているのかもしれない。

結局、この後シャーリイに泣いて頼まれて宴に出席する事になるのだが、今のエルリアはそんな事は露とも知らずに平和な一日を堪能していた。

―教会 礼拝堂―

「あのさ、シャーリイ」

「何ですか、お姉さま」

「帰ってもいい？」

「ぜったいたいダメですわ！」

儀礼服に身を包んだシャーリイのまなじりが吊り上ってエルリアをいさめる。

教皇が来訪するまであと二十分という時だった。予定では今頃レムルアイランドの大通りを馬車の上から市民に向けて祝福を授けながらこちらに向かっているはずだ。

教会内には信徒と司教、大司教クラスがひしめき、緊張感で溢れかえっている。そんな中でリラックスしているのはエルリアと、その横に座るセシルくらいのものではないだろうか。セシルに至っては煙草が吸いたいと言っていたが、シャーリイから威嚇としか思えないような唸り声を聞かされて押し黙っている。

三人が座るのは祭壇から三列目に設えられた来賓席で、前には大司祭や枢機卿がずらっと並んでいる。数名の者は背後のエルリア達の話し声を聞いて渋い表情を浮かべたり、クスクスと笑っていたが、「教皇様のご到着です」

その声に全員が一斉に立ち上がる。遅れてエルリアとセシルも立ち上がった。扉を見ると、一人の男性がゆっくりと礼拝堂内に入ってくるのが見えた。歳の頃としては六十歳を超えたくらいであろうか、全体的に細い体格をしているが、ひ弱さは感じられずにむしろ生き生きとした印象すら与えられる。純白のローブを羽織り、供の者を二人背後に従えて静々と祭壇に向けて歩いていった。

祭壇には『聖杯』が燦然と銀色の光を放っており、教皇はそれに

むけて一礼。全員が教皇にならって頭を下げ、祈りの言葉が紡ぎ出される。

蚊帳の外のエルリアとセシルはお互いに顔を見合わせて苦笑い。門外漢としての礼節は十分にわきまえているつもりだし、事前にシャーリイから受けた説明通りに振舞っているが、やはり居心地は悪い。このような式典に出席するより、『迷宮』で冒険をしている方が性に合うというのが改めて認識される。

「勇猛果敢な三人の勇者の活躍によって奪われた『聖杯』が再び我々の手に戻ってきました。これはひとえに皆の日々の祈りが神に通じたものだ……」

教皇の言葉に真摯に耳を傾けるシャーリイを何とはなしに見てから聖杯に視線を向ける。ステンドグラス越しに降り注ぐ太陽の光を受けて神聖な光が礼拝堂を包んでいた。

ふと、エルリアの左手指先に何かが触れる感触。見てみると、セシルの指がエルリアの指に触れていた。

『暇……よね』

接触した者同士のみが微弱な魔力を使って意思を疎通させる魔法だ。使う魔力が極微弱な事もあって、そう簡単に見つかるものではない。

『シャーリイのあの真剣な顔、戦闘中以外で初めて見ましたよ』

『ふふふ、そうね。あの子も熱心な信徒ですからね』

その間も教皇の言葉が続いているのだが、良い暇つぶしができた二人にとっては単なるおしゃべりの時間となってしまった。

式典が進み、『聖杯』奪還者である、エルリア、シャーリイ、セシルの三人が教皇から直に褒章を受け取る段となり、三人が教皇が待つ壇上に上る。

「貴女達の此度の活躍、心から感謝いたします」

聞く者を安心させるような、低い、落ち着いた声音で三人に声を掛ける。シャーリイは感動のあまり涙ぐんでさえいる。

「信徒シャーリイ、涙をお拭きなさい。貴女の功績は教会騎士団入

団より前からずっと見ていますよ」

「ありがとうございます。これから教会の為、教皇陛下の為にこの命、捧げてまいります」

決意の籠ったシャーリーの言葉に教皇はゆっくりとうなずきながらも、「身体を大事に」と応えて供の者が差し出した勲章を儀礼服の胸元に留めた後、祝福を授けた。

「エルリアーレイモンド、セシルガーランドのお二人には普段から信徒シャーリーがお世話になっております。未熟者ではありますが、お二人のご鞭撻を宜しくお願いいたします。そして、この度の『聖杯』奪還はお二人のご尽力がなければ成し得ることはできませんでした。教会を代表して、心より御礼を申し上げます」

お付の者が音もなくやってきて手に持ったビロードで装飾された豪華なトレイに載った勲章を差し出す。教皇は細い手でそれをゆつくりと受け取って、エルリアの胸元に、続いてセシルの胸元に勲章を留め、シャーリーの時と同じく祝福を授けた。

そして、打って変わって小さな声で、

「つまらぬ話を聞かせてしまって申し訳ありませんでしたな」

と、いたずらっ子のような声音で二人に囁いた。

「っ！ こ、こちらこそ申し訳ございませんでした……」

何の事はない、バレていたようだった。教皇は楽しそうに笑顔を浮かべると、怒り顔のシャーリーも呼び寄せて、

「この後、二十時に私の私室へ。お三人の冒険譚をお聞かせください」

とだけ言い残して三人を解放した。

「狭い場所ですが、お寛ぎください」

指定された時間、三人が向かった先は宿舎最上階にある教皇の為に用意された一室だった。

シャーリーがノックをすると、供をしていた男性が出てきて、三人を室内に促した。

「教皇陛下はすぐに参られますので、そちらにお座りください」

紅茶が供されて三人の内、緊張で固まってしまっているシャーリイを除いた二人が口をつける。

「あ、美味しいですね」

「ありがとうございます。東で取れた上質の茶葉が献上されておりましたので、お持ちしたのですよ」

穏やかな笑顔で青年が答え、茶菓子として焼き菓子もテーブルに載せる。

「シャーリイ様、あまり緊張しすぎませんように……」

「は、はいっ！　だだ大丈夫ですわ」

どう見ても大丈夫に見えない。青年も苦笑する。

「教皇陛下とは既知だとお伺いしております。どうぞ氣を楽になさってください」

そこまで言った所で扉が開き、教皇が戻ってきた。シャーリイが真っ先に立ち上がって恭しく頭を下げる。エルリアとセシルもそれに倣う。

「いやいや、そんなに畏まらんで良い。お忙しいところを呼びつけたのは私だからの」

親しみを覚える笑みを浮かべた教皇が三人の向かい側のソファにゆっくりと腰を下ろす。それを合図に三人も腰を下ろした。

「リボックや、私にも紅茶をくれるかな？　ミルクと砂糖を入れてな」

さっきまでエルリア達と会話をしていた青年が「はい」と答えてお茶の準備を始める。

「シャーリイや、そんなに畏まらんでくれんなかな？」

「は、はいっ！　しかし、教皇陛下に失礼のないよう……」

明らかにカチコチになりながら答えるシャーリイに教皇も苦笑を一つ漏らしてから、腰を上げてシャーリイの頭に手を伸ばして金髪を優しく撫でる。

「ほれ、私は何もしておらんよ。お前の祖父じゃ」

「へ？」

「え？」

驚いたのはエルリアとセシルだ。教皇の言葉をそのまま理解するとしたら、

「シャーリイって教皇陛下のお孫さんなの！？」

「なんじゃ、言っておらんかったのか」

「お爺様の七光りで『妖精騎士』の二つ名と次期教会騎士団長の座を射止めたと思われなくなかったのです。それに、陛下は陛下。私からすればお目通りが許されるだけでも光栄なお方ですわ」

「ふおっふおっふおっ。お主は昔から頑張り屋だからの。活躍は騎士団以前から耳に届いておる。一応言っておくが、お前を騎士団長に推薦したのも私ではないからの。それだけお主の頑張りが認められたということじゃ。祖父として嬉しい限りじゃ。それに、今回は『聖杯』まで持ち帰ってくれた。お前は自慢の孫じゃよ」

変わらずにシャーリイの小さな頭を撫でながら教皇が微笑む。その顔は先程までの厳格なそれではなく、優しく、孫をかわいがる祖父の顔であった。

「それ、そろそろ緊張もほぐれたじゃろ。爺にお前達の冒険譚を聞かせておくれ」

紅茶を運んできたりボックスにも席を薦め、五人でささやかなお茶会が始まる。

「ほうほう、エルリア殿はそんなに強いのかね」

「それはもうっ！ 私、おねえ……じゃなくて、エルリア様よりお強い方は見た事がございません」

語り部は主にシャーリイで、『愛しのお姉さま』の自慢話になりつつあった。時折エルリアやセシルが話を削らないと、どこの英雄なのかわからなくなりそうになる。途中で教皇が「堅苦しい呼び方はやめよう」と言ってから元々孫として敬称を付けずに呼んでいたシャーリイを除いた二人の敬称が変わった。二人としても「殿」付けは堅苦しかったので嬉しい限りだ。

「エルリアさんや」

「はい」

「そのお力、どんな師匠についたのかね？」

「えっ……と」

返答に窮してシャーリィを見る。視線を合わせた彼女が力強くこくりとうなずく。

「荒唐無稽なお話、と思って下さっても構いません。でも、今からお話する事は事実です。それと、できれば……」

ちらり、と教皇トリボックを見ると、

「大丈夫じゃよ。私も彼も誰にも話さん。もしよかったら教えておくれ。困ってるのなら手助けもできるかもしれんでな」

「ありがとうございます」

頭を下げてから紅茶を一口飲んで喉を湿してから突然『迷宮』に放り出されたいきさつを語った。

「……ふ、む。面妖な話じゃな」

「でも、嘘じゃないんです。信じてもらえないとは思いますが」

肩を落とすエルリアを慮ってシャーリィが何か言おうと口を開きかけたのを教皇が手で止めて、その手をエルリアの肩にそっと載せる。

「信じておらぬ訳ではないぞ。あまりにも想像の範疇外な話ばかりだったのだな」

「はい。実際に体験している私も未だに想像ができません」

「人の皮膚のような手触りの本、のう……リボック、聞き覚えはあるかの？」

「『禁呪』の中にそのような本の製作方法があったように思いますが、太古の昔に失われた呪文かと」

「となると、『迷宮』はその時代からあった、という事になるの」

「……お答えしかねます。もしかしたら、この場所ではなく、別の処だった可能性もございますし、あるいは」

「別の世界、かの？」

「はい」

二人の会話に付いていけない三人がぼかんとしていると、

「いや、すまなんだ。面白い話をしてくれた札にこちらからも面白い話をしようかの」

教皇がそう言ってクッキーを手に取り、一口齧ったところでリボックが口を開いた。

「『迷宮』について教会側でもあらゆる方向から研究が進められております。多種多様な報告の中で教皇陛下が関心を示されたものがいくつかございますが、その中でも関心を寄せれたのが――」

「あの中が別の世界になっているのではないか、という事じゃ」

クッキーを食べ終わって、手についた屑をぽんぽん、と皿の上ではたいてから教皇が口を開いた。

「でも陛下」

「シャーリイ、ここでは昔のように呼んで欲しいものじゃない」

「……っ、お、お爺様」

少し恥ずかしそうに呼びかけるシャーリイとは対極に、祖父は嬉しそうに目を細めて「何じゃい？」と促す。

「別の世界っていうのは、根拠はあるのですか？」

「うむ。エルリアさんは何層まで潜った事があるかね？」

いつの間にかキセルを手にし、火を点けながら尋ねる。それを見てちゃっかりとセシルも煙草に火を点けていた。

「六十八層までです。それより先はまだ……」

「なんと……」

驚きの表情を浮かべた教皇はリボックにメモを取るように指示を出す。すぐに紙とインク壺が用意され、リボックがうなずいた。

「話の途中になってすまないが、その時の話を詳しく教えてくださいませんか」

「えっ……と？」

「怪物の強さや魔族の出現率、『迷宮』の作りとかを教えてください

のじゃ。我々教会の精鋭でも五十層が精一杯でな。そこまで潜った人間を見たのは今日が初めてなのじゃ」

若干興奮気味の教皇。どうやら政治屋というよりは學術肌のようなのだ。

「私が知る限りでもエルリア様が最も深く、最も詳しく『迷宮』をご存知だと思いますわよ、お爺様」

「おお、それは嬉しい限りじゃ。ううむ、だったら学者を呼んだ方が良いでしょうな……リボックよ、本国から至急呼び寄せる事はできるかの？」

「早馬を出せば四日程で到着できるかと思いますが」

「うむ、うむ。エルリアさんや」

「は、はい」

事が加速的に大きくなって来ているようで、背筋に冷や汗が落ちる。まさか人体実験されたりなんかしないかと思っていると、

「ふおおおお、別にお主の身体には触らぬよ。その話と今話している『迷宮』深層とは別じゃ。もちろん、お主が触れた『禁書』についての調査もさせよう。じゃから、こっちにもちと協力してもらえんかの？」

「ごめんなさい、お姉さま」

「ん？ 何が？」

教皇の部屋を辞した帰り道、三人で歩いているとシャーリイがエルリアに頭を下げた。

「お爺様の事ですわ。無理なお願いをしてしまって……」

「気にしないでいいよ。私も頼みごとはしたんだし」

エルリアは教皇の頼みごと——四日後に到着予定の学者達に自分の経験を話す事、を約束していた。ほとんど頼み込まれたに近い状態ではあったが。

「昔からですよ。一度決めると曲げないんですわ。頑固者なんです」

「ふふっ」

「何ですの、セシルさん」

「ごめんごめん。別に悪気があったわけじゃないのよ。あの『妖精騎士』もお爺ちゃんの前ではただのかわいい孫なのね、と思って」
シャーリイの頬が紅く染まる。「知りませんわ」と答えてそっぽを向いてしまった。

「でもシャーリイ。私は貴女にも感謝してるよ」

「どうして、ですの？」

エルリアの言葉にシャーリイが小首を傾げる。

「シャーリイが教皇陛下のお孫さんだったからこそ、私にとっても活路が見出せるかもしれないでしょ？」

協力する代わりに教皇側もエルリアの身の上に起こった不可思議な出来事について調べてくれるというのだから、悪い話ではない。

「教皇陛下もしばらくここに滞在するのかしら？」

「そうですね。お姉さまやセシルさんのお話をもっと聞きたいとおっしゃってましたし」

「じゃあ、シャーリイはお爺ちゃん孝行しなきゃね」

「う……はい、努力します」

シャーリイが教会の門扉まで見送ってくれたので、そこで別れて街の中心地に戻る道をエルリアとセシルの二人が歩く。

「良いお爺ちゃんよね」

「そうですね。私のお爺ちゃんはすごく厳しい人だったから少し羨ましいかな」

「そうなんだ？ だからエルリアは物腰がぴしっとしてるのね」

「結構ぐうたらですよ？」

「そうかしら？」

教皇が指定した四日後、家で寛いでいたエルリアの元に教会からの使いがやってきた。学者のグループが到着したので来てほしいとの事であったので、言われるままに教会に向かう。

教会に向かう道すがら、繁華街では夕市が立っているようで、買い物をしている人々が多い。エルリアも土産代わりに果物をいくつか購入して代金を支払う。

「おや、エルリアちゃん。今日はお休みかい？」

顔見知りの青果店のおばちゃんが気さくに声をかける。エルリアは今しがた受け取ったリンゴを一口齧りながらうなずいて、

「しばらくは『迷宮』に入る用もないですから、のんびりですね」

笑顔と一緒にそう答えてから再び教会へと足を向けようとしたが、
「きゅっ」

何かとぶつかってしまふ。声を上げたのはエルリアではなく、相手の方だった。見ると一人の少女が尻餅をついている。年の頃ではまだ14歳くらいのもので、シンプルなワンピースを着ている。

「ご、ごめんなさい。大丈夫？」

慌てて少女に手を貸して起こし、散らばった荷物を集めて渡す。

「こっちこそごめんなさい。前見てなくて……」

ふるふると震えながら少女が答える。

「怪我はないかな？ 痛い所とかない？」

少女の肩を触ろうと手を伸ばすと、少女が小さな悲鳴を上げてうずくまってしまう。

「……え？」

別に叩こうとしたわけでもないし、ゆっくりと手を伸ばしたつもりだったのだが。

「お、お願いします……ぶたないで……」

あらぬ誤解を受けそうな状況になってきたので、少し強引に少女を立てさせて市から外れた小路に入る。

「ご、ごめんなさいごめんなさい、お願いだからぶたないで……」

恐怖に慄く少女を良く見ると、ワンピースの肩口の辺りに痣のようなものが見える。嫌な予感が走る。

「えっと、落ち着いて。私は貴女に危害は絶対加えないから。ね？」
一際ゆっくりと、おびえる少女に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「少し、触っても大丈夫？ 絶対叩いたりしないから」

こくん、と少女がうなずくのを確認してからゆっくりと手を伸ばして少女のワンピースの肩口をずらす。

「っ……」

痣がはつきりと浮き上がっている。それも、転んでできるような場所ではない。さらに見てみると、スカートに覆われた両脚にも痣は無数にあり、中には煙草を押し付けられた痕のようなものである。

「酷い……」

児童虐待であろうか。この街には多数の人がひしめきあっている。当然のごとく、人が集まるところには歓楽街が形成され、中には違法に年端もいかない少女を提供する店もあると聞くが。

「お名前は？」

憤る心中とは裏腹に声音は勤めて優しく。

「リディア……」

「リディアちゃんね？ これ、どうしたのか聞いても大丈夫？」

落ち着きはじめて少女にそっと尋ねると、少女はびくっと身体を震わせてから、大きな瞳に涙を浮かべた。

「私、まだお客さんを取れないから雑用しているんですけど、ドジだからいつも失敗ばかりで……失敗する度に罰を」

「わかったわ。もう言わなくても大丈夫」

そっとリディアを抱きしめる。

「教会に行きましょう？ あそこなら貴女を保護してくれるわ」

その提案にリディアは小さな頭をふるふると横に振る。「どうして？」と尋ねると、少女はなおも震えながら、自分が逃げると故郷の両親が受け取った金銭が無効になってしまい、両親が傷つけられてしまうということだった。

「人身売買、か」

ぽつり、と呟いた途端に薄ら寒い感情が身体を駆け抜ける。噂では人身売買という違法な行為が裏世界で行われているのも知ってい

た。他にも麻薬や禁忌とされている魔法で人間の意志を消してしま
って人形のように操る人間が居るということも知っていたが、実際
に目の当たりにするとそのショックはとてつもなく大きい。

「早く戻らないと私……」

言われて我に返ったエルリアはどうすることもできずに少女を解
放するしかなかった。『血風の魔女』と呼ばれ、この街でも指折り
の強さを誇るエルリアなのに、だ。

「ね、ねえリディア。貴女の住んでるところだけ教えてもらっても
良いかしら？」

問われるままにリディアが伝えた住所は歓楽街の奥地、違法性の
高い店が連なる場所だった。

「お姉ちゃんも酷い事するのが好きなの？」

「そんなわけない！」

思わず強く言ってしまう、リディアがびくつと身を竦める。

「あ、ご、ごめんなさい」

慌てて謝ってリディアを慰める。

「ね、リディア」

「は、はい……」

「……なんでもない。ごめんね、時間取らせちゃって。気をつけて
帰ってね」

「はい……」

ぺこり、と頭を下げてから少女は小走りで路地を抜けていく。

「……」

やるせない焦燥感だけがエルリアの裡を焦がしていた。

そんな気持ちを抱えたまま教会に到着し、教皇の部屋に直接向か
う。数回ノックすると、リボックが出迎えてくれた。

「教皇陛下はミサが終了次第こちらに戻られます。到着した学者の
みなさんは現在ギルドに行っておりまして、少しお待ちいただけ
ますでしょうか？」

案内されたソファに座ってうなずいて返す。リボックが紅茶を淹れてくれたが、手をつける気すら起こらない。

「何か、ありましたか？」

エルリアの正面に座ったリボックが優しく口を開いた。エルリアはしばらく考えたあとに、先程起こったリディアとの話をしてみる。「……それは、エルリア様がお怒りになるのは当然かと思われます」
「でも、何も出来ないんですね。彼女は売られてこの街に来ていて、働くしか彼女の家族が生きていく術がないんですから」

その答えにリボックが盛大な溜息を吐く。

「それはエルリア様の思い違いではないでしょうか？」

「どういことですか？」

「そもその契約が違法なのです。教会の教義に反するどころか、人身売買を合法としている国家はありませんよ」

「あ……」

言われてみればそうだ。契約が第一というのは、誰にでも当てはまる事だから失念していた。そもそも違法な契約ならば……

「その契約は効力を発揮しません」

「でも、それだとリディアの家族に渡ったお金は？」

「残念ながら、それも無効ですね。とはいえ、既に金銭の授受があったのですから、返済義務が生じます」

「だったらどうしようもないじゃないですか！」

ばん、と机を叩いた時に扉が開いた。

「何事かの？」

きょんとした顔の教皇が立っていた。その後ろにはシャーリイも驚いた表情で立っている。

「お姉さま、一体何があったんですの？」

「陛下、シャーリイ……」

「ふむ、難しい問題じゃな」

エルリアの話を聞いた教皇が困った顔をして顎を撫でる。

「神の教えに反する行為です！ 今すぐ排除すべきです！」

案の定シャーリイが激怒しているが、教皇の反応の方が気になった。

「しかしの、仮にそのリディアとやらを助けたとしよう。では、他の者はどうするんじゃ？」

「全部叩き潰せば良いのです！ そのような穢らわしい場所などあってはなりません！」

「ちよつとシャーリイ、落ち着いて……確かに、陛下のおっしゃる通りですけど、あまりにも可愛そうではないかと思うんですけど」

「じゃからといって、その娘のみを助けるのは容易いがの。一人を助ければ二人目も助けねばいかん。教会とて無制限に収容できるわけでもないし、各国家もこの問題については頭を悩ませておる」

リボックの淹れた紅茶を飲み、キセルを吹かしてから教皇も苦い顔を浮かべる。

各々が頭を悩ませている間に学者達が戻ってきたので、教皇の提案によってとりあえずは頭を切り替える事となる。

エルリアは心の大半をリディアを始めとする人身売買の被害者に向けながら学者達の質問攻めに答えていった。

気づけば夜中になっており、ようやく開放されたエルリアはシャーリイに見送られて教会を辞した。

「うーん……」

疲れもあるが、やはりリディアの事が気に掛かってしまう。痛々しい傷といい、あの怯えた表情といい……考え事をしながら歩いていると、近くの路地から悲鳴が聞こえた。

何事かと覗いてみると、一人の少女が数人の男に囲まれている。

「リディアっ！」

襲われている少女がリディアだと知ったエルリアは瞬時に肉体を強化、文字通り弾丸のようなスピードで接近。改めて確認すると、男達は総勢で四人。全員が下卑た目をしている。リディアは怯えきった表情で男達を見上げており、衣服は既に衣服としての体を為し

ていない。

「お前達っ!!」

一瞬で一人目に肉薄。そのままの速度で男の背中にとび蹴りを放ち、その反動を利用して真横に居る男に回し蹴りを見舞う。

「何だ貴様っ!」

「うるさいっ!」

立て続けに三人目の鳩尾に拳を叩き込み、最後の一人の目の前で停止する。

「ば、化物……」

「それで結構よ。『血風の魔女』って化物だからね」

「!？」

その二つ名の効果は絶大で、男はあっさりと腰を抜かしてしまう。「リディア、大丈夫？」

男に背を向けてリディアを見る。ワンピースは引き裂かれてしまっており、真っ白な肌と痛々しい痣が目に入ってくる。着ていたジャケットを脱いで少女の肩に掛ける。

「あ……あ……」

涙を流しながらリディアがエルリアの腰にしがみつく。優しくその頭を撫でて「もう大丈夫だよ」と声を掛ける。

「ふざけんなああああっ!!」

背後からナイフを抜いた男が襲い掛かってきた。それを素手で受け止める。幾重にも施されている防御魔法のお陰でエルリアの肉体には傷一つつかない。ナイフを掴んだままエルリアは男を睨みつける。男の目が恐怖でひきつる。

「お、俺達はそいつを『買った』んだぞ! 文句言われる筋合いはないだろ!？」

唾を飛ばしながら吐くその言葉にリディアがびくつと震えて一層強くエルリアの腰にしがみつく。ナイフが握りつぶされる音がして男が吹き飛ばされる。

「いくらで買ったのか、教えてもらえるかしら」

言葉遣いそのものは丁寧ではあるものの、圧倒的な威圧感に溢れている。男がその恐怖に震えながら金額を言うと、エルリアはその数倍にもなるのかという金額のマネー・カードを男に投げ渡し、「消えなさい」とだけ呟いてリディアを連れて立ち去った。

「リディア、大丈夫？　もう心配いらないよ？」

自宅にリディアを招きいれ、未だに離れようとしないう少女の頭を優しく撫でる。

「ごめんなさいごめんなさい……」

なんとかソファに座らせるが、リディアは泣き止もうとしない。エルリアは溜息を一つ吐いてからキッチンでミルクを温めてからブランデーを数滴垂らしてリディアの前に出す。

「落ちてくから飲むといいよ」

しばらく泣きじゃくっていたリディアだったが、おずおずとマグカップを両手で持ってミルクを飲み始めた。

「ご飯は食べてるの？」

ふるふる、と首を横に振るリディア。さっき見た感じでも栄養が足りていないのがよくわかる身体つきだった。

「ちょっと、待っててね」

ウイंकひとつしてからキッチンに戻って手早くできるパスタを作り始める。冷蔵庫からベーコンとピーマン、ニンジンを出して手早く刻んで火を通し、茹で上がったパスタを投入して塩・胡椒で味付けをする。

「簡単すぎるけど、どうぞ」

小さな皿に盛り付けてミルクを飲み干したりリディアの前にオレングジュースと一緒に出す。

「い……いいん、ですか？」

「もちろん。貴女の為に作ったんだから、食べてくれると嬉しいな。あ、ピーマンとか嫌いだった？」

ふるふると首を横に振ってフォークを右手に持ち、「いただきます」と小さな声で言って食べ始める。

「おいしいです」

にこりと笑顔を浮かべるリディア。

「よかった……」

やっとリディアの笑顔を見る事ができたのだ。心が安らぐような暖かい笑顔だった。

食事が終わったあと、リディアを風呂に入れようとしたのだが、傷が痛むらしく平謝りでエルリアに謝罪してきた。

「そっか……沁みるのね。ねえ、リディア。もし良かったら貴女の傷、診せてもらえる？」

何も答えずにリディアがエルリアに掛けられたジャケットを脱ぎ、破れたワンピースも脱いで下着姿になる。

「っ……」

太ももや腹、腕などに痣が広がり、背中には複数の煙草を押し付けたような痕が残っていた。

「酷い……」

思わず声が出てしまった。その声に反応するようにリディアがすすり泣く。

「ご、ごめんリディア！」

慌てて謝罪するが、リディアは首を横に振って逆にエルリアに何度も謝り始める。「醜い身体でごめんなさい」と。しゃがんだエルリアが優しく少女を抱きしめる。傷に触れないように、細心の注意を払いながら。

「決めた」

その言葉にリディアがエルリアを見上げる。その瞳には強い光が宿っている。

「私が君を買うわ」

その言葉にリディアがびくつと震える。

「あ、違う違う。そういう意味じゃなくて……えーっと、どう言えばいいのかな……」

「助けて、くれるの？」

「それ！ 私がリディア自身を買い上げるわ。ご両親への仕送りも私がしてあげる」

信じられないような目でエルリアを見上げるリディア。

「で、でも……私なんて何もできないし」

「そんなのはいいの。私が貴女を欲しいんだから。それとも、私と一緒に居るのは嫌？ 正直に言ってくれていいよ」

リディアが勢い良く首を横に振る。

「じゃあ、決まり」

ぽん、と手を打ってからリディアの頭を撫でる。少女は嬉しそうに目を細めてそれを受けた。

「ま、ず、は。傷を治しましょうか」

「は、はい……」

見るからに緊張に身体を強張らせるリディア。エルリアは慌てて痛い事はしないという事を必死で説明する。

「お願いだから怯えないで。変な事するわけじゃないから。すぐに治るから一緒にお風呂に入りましょう」

「でも、煙草の火傷もありますからそんなにすぐには……」

「大丈夫。私にかかれば一瞬よ」

笑顔を浮かべてリディアをベッドに横たえさせる。少女は何が始まるのか不安を隠しきれずにいるようだったがエルリアの説得が功を奏したのか、素直に華奢すぎる身体をベッドに横たえた。

「恥ずかしいと思うけど、ジャケットを服、脱がせちゃうね」

そっと、壊れ物を扱うようにリディアに触れ、ゆっくりと、危害を加えない事を何度も言い聞かせながら既に衣服としての機能を果たしていないワンピースの残骸とジャケットを脱がせる。

改めて確認するが、少女の身体には夥しい数の青痣、切り傷に擦り傷、火傷の痕などがあった。それに、明らかに栄養が足りていないという事がよくわかる身体つきでもあった。少女に気取られないように唇を強く噛む。何の罪もない少女にここまでの仕打ちができる人間とは一体どのような者なのか、と。

「じゃあ、始めるわね。身体の力を抜いて……そう。痛い事は何もしないからね？」

魔力を体内で練り上げる。目の前に居る少女を治したい、その一念で。

室内に『歌』が響く。リディアは魔法をほとんど見た事がない上に、このような詠唱方法はエルリアのオリジナルに近いので、そのかわいい目を丸くしている。

「少しだけ身体が熱くなるけど、すぐに治まるからね」

ウインク一つしてから、魔力を開放。リディアの身体に治癒の魔法を施す。循環を上昇させ、人間の持つ治癒力を加速させる。同時に外部からも傷を塞ぎ、痣や火傷痕すらも消していく。

「あ……」

暖かい光に包まれたリディアは見る見るうちに治っていく身体を見る。殴られた痕も、煙草を押し付けられた痕も、綺麗に消えていく。

「ん……？」

光が強くなり、リディアの全身を包む。少女はその中でリラックスした表情を浮かべていた。

「治癒呪なのに、蘇生呪並の効果が出ての……？」

エルリアが使った魔法は治癒呪という初歩的な回復系の呪文だったのだが、目の前に広がっている光景は明らかに上位呪文である蘇生呪相当の治癒力である。

「間違えた、なんで事はないわよね」

結果的には少女の身体を完全に回復させる事には成功しているのだが、エルリアの考えでは治癒呪で細かな傷を塞いだあと蘇生呪を使って火傷の痕を治すつもりだったのだ。そのほうがリディアにかかる負担も少ないと考えての事だったのだが。

「リディア、大丈夫？」

光が収まり、少女に問いかけると、少女は少し疲れた表情を浮かべたが、自分の身体を改めて見、驚いたような表情を浮かべた。

「傷跡が……」

「少し予定が狂っちゃったけど、痛いところはない？」

大判のタオルケットをリディアに掛けてから尋ねる。少女は「大丈夫です」と変わらず小さい声で答えてから、ベッドの上で頭を何度も下げた。

「うーん、その謝り癖直さなきゃかな？」

「ふえ？」

「ま、いっか。お風呂に入りましょ。暖かいお風呂に入って、ベッドで寝なさい。もう何の心配もないわ」

差し伸べられた手は小さくて、柔らかそうで、到底頼れそうなものではなかった。エルリアはリディアよりは年上だが、見るからに少女というカテゴリー内の年齢だったし……

でも、少女は信じた。名のある冒険家だというのも後で知った事なのだが、リディアは何も知らないままでもエルリアを信じた。それだけの事をエルリアは事も無げに行っていたのであった。

―― 深夜 歓楽街奥地 風俗店 ――

「どういう事でしょうか？」

来訪した客は突然「リディアを買い上げたい」と告げたのだ。しかも年端もいかないような少女が。

「お客様、店をお間違いでは……？」

「オーナーさんと会わせて下さい。『血風の魔女』が来た、と伝えてくれれば良いです」

「血っ！？ お、お待ちください！」

血相を変えてばたばたと背後の部屋に走りこむ青年の後姿を見送ってから周囲を見る。お世辞にも綺麗とは言えない店内。エルリアが居るのはエントランスを兼ねたホールのような場所だが、設置されたソファには数人の男が自分を舐めるように見ており、ホールに

面した部屋からは娼婦であろう女性が騒ぎの音を聞きつけて顔を出している。女達の年齢は様々で、リディアと変わらないような年齢の少女もいれば、もっと年上であろう女性も居る。不安気な表情をする者、煙草を咥えたまま高みの見物を決め込んでいる者。彼女達の一部がリディアにあの仕打ちをしていたのかと思うと自制心を総動員しなければこのまま暴れそうになってしまう。

「ねえちゃん、新人か？ 俺が買ってやろうか？」

酔っ払った男がエルリアに近寄るが、何も答えずに無視。男はしばらく酒臭い息をエルリアに吐きかけていたが、文句を残して去って行く。

「こ、こちらへどうぞ」

やっと戻ってきた店員がエルリアを一室に案内する。通された部屋は豪華な内装が施され、重厚な檜で出来た机に若い男が文字通り腰を掛けていた。

「これはこれは、『血風の魔女』を当店にお招きできるとは思ってもみませんでした」

にこにこと、優男独特の笑顔を貼り付けて大仰な手振りでエルリアを迎え入れる。

「私は当店のオーナー、フィラスと申します」

「リディアを買います。いくら払えば良いですか？」

一刻も早く店を出たかった。甘ったるい香の匂いが鼻につく。リディアを置いて来て良かったと改めて思う。

少女は今頃エルリアの部屋で安らかな寝息を立てているはずだ。

「あれは私どもの商品でございます。一晚二晩でしたら構いせんが、お値段の方は……」

「彼女の両親にいくら払ったのか、と聞いています」

ぴしゃり、と話をはぐらかそうとするフィラスの言葉を遮る。

「本当に買えると思ってるのか？ 小娘」

突然声音が変わった。ドスの利いた、低い声がフィラスの口から出てくる。テーブルの引出を後ろ手で開いて一枚の書類をエルリア

に突きつける。それは人身売買の契約書だった。普通の人間なら半年は暮らせそうな額がそこには書かれていた。

「あいつを買った金と、あいつがこれから稼げそうな金額を足した額だったら売ってやるよ。つっても、あいつに渡る金はこの百分の一程度だな。いくら『血風の魔女』でもそう簡単に稼げる額じゃないだろ」

男が提示した額は確かに巨額だった。リディアの親に支払われた額の数倍以上の金額を提示してきたのだ。

「……貴女のような人を人間の屑って言うんですよ？」

「何とでもおっしゃってください。金が全てですよ。それとも、貴女が働いて金を稼いでくれるんですか？」

一転して厭らしい笑みを浮かべるフィラスを睨みつけながら、アイテムストックジェムを2つ出して納められていた宝石類を取り出す。ギルドの鑑定書も一緒だ。

「これで十分ですね」

半ば投げつけるように宝石を渡す。その大きさ、輝き、どれを取っても一級品の宝石だ。

「……まさか、こんなに簡単に」

「舐めないで下さい。貴方みたいな屑が想像もできないような過酷な戦いをしています。女の子を商売の道具にして稼ぐお金なんて……あまつさえ、年端もいかない女の子にあんな酷い仕打ちをするなんてっ」

怒りのあまり言葉が出ない。フィラスは最初こそ驚きの表情を浮かべたが、今では宝石の価値に唇の端がニヤついている。エルリアは溜まらずに更に口を開こうとしたが、

「渡す必要はありませんわよ、お姉さま」

突然の声に遮られて振り向くと、そこには軽戦闘用装備の胸当てを装備し、小型の盾を背に負ってエルリアがプレゼントした1対の剣を腰の鞘に挿したシャーリィが立っていた。

「教会騎士団ですわ。この店が違法な営業をしていると聞いて、レ

ムルアイランド統治連合国家から正式に調査依頼がありました」

同じくして館の各所から悲鳴や怒号が響く。

「フィラスIIガーリッジ、貴方とこの娼館を少女売春、人身売買、暴行の容疑で捕縛、調査いたします！ 抵抗したら躊躇なく斬りますので、お覚悟くださいな」

凜と響く声で男を圧倒する。統治連合の判が押された書状を突きつけられ、フィラスは口を開こうとしたが、声にならなかった。

「お姉さまもお爺さまも甘いですわ。教会や国家が引き取る必要はないのですわよ」

「え？」

「仕事を与えれば良いのです。住み込みで働けるところなんてこの街にはごまんとありますわ。むしろ人手が足りないくらいなのですからね」

・ 早朝 エルリア自宅の玄関 ・

そつと扉を開けて中に入る。娼館を出たエルリアはシャーリイに「無茶をなさらないでください！」と散々お説教を受けてから開放された。

娼館で無理矢理働かされていた少女達は一旦教会で保護した後、正規労働先を斡旋するらしい。給料も娼館で払われていたような小銭ではなく、ちゃんと決まった額が支給されるはずだった。その金から仕送りをするなり、別途借金のある者は返済をすれば良かったし、教会が身元引き受けを表明したので安心はできるはずだった。

とはいえ、たった一つの違法な娼館が消えただけで、まだまだ多くの違法な娼館はあるし、人身売買の被害者は多い。だが、希望の光は見えていた。教会が主導して人身売買の撤廃と、少女売春の一斉排除の方針を打ち立てたのだ。

教皇はそれに先立って貧困家庭への支援策も打ち出したそうだ。

人身売買の温床となる、貧困家庭を減らす事から解決していこうという事らしい。

道は険しいが、決して光がないわけではなかった。

「エルリア……さま？」

ベッドルームからリディアが起きてくる。熟睡していたのだろう、眠そうに目をこすっていた。リディアの体格に合うパジャマがなかったので、エルリアの長袖のTシャツを着ている。

「起こしちゃってごめんね」

優しく少女の頭を撫で、少女の視線に合わせるようにしゃがむ。漆黒の髪の毛はエルリアが念入りに手入れをしてあげた効果がもう出てきているのか、柔らかく、瑞々しさが戻っていた。

「もう心配なくていいからね。もう自由だよ」

その言葉だけで通じたのか、リディアは目を丸くして驚いた後、心から嬉しそうにエルリアに抱きついた。

「ありがとうございます、ありがとうございますっ！」

―― 昼過ぎ エルリアの自宅 ――

「エルリア様、起きてください。ご飯が冷めちゃいますよ」

「あと……10時間」

「そんなに寝たら夜眠れなくなっちゃいますっ！」

リディアの困った声に目が覚める。目を開くと、エルリアの長袖Tシャツを着たままのリディアがエルリアを覗き込んでいた。

「ってリディア、何してるの？」

「朝ごはんと兼用になっちゃいますけど、お昼ご飯を作っていました」

「なんで？」

至極真つ当な疑問が浮かぶ。この少女に食事の準備を頼んだ覚えはなかった。

「私はエルリア様の所有物なんですから、この程度の事なんでもないです」

「所有物って……」

「だって、エルリア様が私を買い上げて下さったんですよね？ だから私はエルリア様の所有物です」

かなり間違えている気がしてきた。結局フィラスには金銭を渡ししていない。その前にシャーリィを筆頭とする教会騎士団に彼が捕縛されてしまったのだからだ。

「えっと、それは昨晚も説明したけど……」

「いいんです。エルリア様が支払おうとしてくださいただけでも十分なんです。このご恩は一生を賭けてお支払しますっ！」

意外と頑固のようだ。

リディアに押されるようにして顔を洗い、リビングに置いてあるダイニングテーブルに座る。すぐにリディアがキッチンから焼きた

てのマフィンとスクランブルエッグ、ボイルしたソーセージが載った皿とミルクの注がれたカップを持ってきた。

「あれ？ リディアの分は？」

テーブルに置かれたのはエルリアの分だけだ。リディアの分がない。

「私は……いいです」

うつむいたリディアがぼつりと答える。娼館でも満足に食事は出されていなかったらしいし、雑用のリディアには尚更と言えよう。その癖が残っているのか、少女はエルリアの分だけを用意して自分の食事は用意していなかった。

「……リディア、何度も言うけど、私は君を奴隷として買ったつもりはないわ。ご飯を食べるな、なんて酷い事言うわけないでしょ」

「でも……」

なおも洩るリディアに業を煮やしたエルリアは勢いよく立ち上がり、

「あー、もう。リディアっ！」

「は、はいっ！」

「そこに座る！」

「はいっ」

泡を食った少女がエルリアの横の椅子に座ったのを確認してから、自分が座る椅子を少女に寄せ、皿も移動させる。

「一緒に食べよ」

「は、はいっ！」

―― エルリアの自宅 ――

「うあ……」

「エルリア様、大丈夫ですか？ お薬お持ちしました」

ベッドでうなり続けるエルリアの視界にリディアの下半身が映る。

薬と水を持ったりリディアは心配そうに主人を覗き込んでから移動してベッド脇の小机にお盆を置いた。

「飲めますか？」

「だ、大丈夫……」

うつ伏せのままお盆から錠剤を二錠拾い上げ、口の中に放り込んでからコップを手にとって満たされている水を二口に分けて飲み干す。

「死ぬ……」

「えっと、こういう時はどうすれば……」

おろおろと右往左往するリディアに家事を頼んで再び布団にくるまる。下腹部がしくしくと痛み続け、起き上がる事すらままならない。魔法で痛みを取り除くにしても、集中ができずに魔法を使う事すらままならないのだ。

言うまでもなく、女性特有の症状である、月経痛に悩まされていたのである。

「少し前まではこんなとは無関係だったのになあ」

女性の身体になってから一番辛かったのがこれだった。初めて月経になった時は完全にパニックになって教会付属の病院に駆け込んでしまった程だ。思い出すだけで恥ずかしさで悶絶したくなる。

「ごめんね、リディア。今日は貴女の服とか日用品を買いに行く予定だったのに」

「そんな、お気になさらないでください。私の物なんて何でも良いんです」

「そんな事はないでしょ。女の子なんだから綺麗な服だって着たいだろうし、髪の毛だってちゃんとしないとね」

リディアがエルリアの家に来てから三日が経過していたが、まだリディアの周辺は完全には落ち着いていなかった。

エルリアが身元引受人となって彼女を保護したのだが、教会側の手続きが予想以上に手間取ってしまったのだ。公平を期す教会としては、一度リディアを教会側で引き取る事を提案していたのだが、

リディアが頑としてエルリアの下から離れようとしなかった。

結局は教皇が手打ちをする形でリディアについては直接エルリアが保護者になる事となったが、裏ではしっかりと有事の際の協力を取り付けられてしまっていた。

今日も本来ならば教会本部から来ている学者達に『迷宮』に関しての調査協力をしなければいけないのだが……

「エルリア様、お客様です」

呼び鈴に応じたりリディアがシャーリイを連れて寝室に戻ってきた。

「お姉さま、大丈夫ですか!？」

寝込むエルリアを見た途端、シャーリイがベッドに駆け寄り、触診という名分で触りまくる。

「シャーリイ様、エルリア様が困っておいでですので……」

やんわりとりディアが口を挟むと、シャーリイはリディアを見据えて、

「はつきりさせておきますが、貴女はお姉さまの恋人ではないんですわよ。私がお姉さまのこいび」

「それは違うから」

やっと効いてきた薬のお陰で喋れるようになったエルリアがきっぱりと否定しておく。

「お姉さまあ、そんな連れない事おっしゃらないでください」

「それはいいとして、今日はどうしたの? 『迷宮』の調査の件だったら朝にリディアが教会に出向いて今日は無理って伝えたと思うけど」

「ええ、確かに連絡は受けましたわ。だからこそ、私が来たのですわよ」

「とうとう?」

「お姉さまの身の回りのお世話をしに来たのですわ!」

「ごめん、全く知らない」

現にリディアが居てくれるお陰で何も困っている事はなかった。むしろシャーリイがここに参戦すると過剰すぎる介護がついてしま

うだろう。

エルリアの即答に不満そうな表情を浮かべるシャーリイだが、気を取り直して、

「教皇陛下からの言伝です。「体調が悪い時はゆつくりと休むと良い。ただ、学者達の都合もあるので、可能なら明後日からまた協力を頼みたい。神のご加護と共にあらんことを」との事ですわ。あと、こっちが教会からのお見舞いの品です」

果物が載った籠をリディアに手渡す。受け取った少女はぺこりと頭を下げてからぱたとキッチンに籠を持っていった。早速果物を剥くつもりなのだろう。

「良く動きますわね」

リディアを見送ったシャーリイが少し表情を和らげる。

「うん、元々家事は得意だったみたい。料理も掃除も洗濯も見事にこなしてくれるよ」

「フィラスから話を聞きましたが、ミスが多い役立たずって評価していましたわ。でも、そうでもないみたいですわね」

「娼館でかなりいじめられていた、というかストレス発散の捌け口にされてたみたいだからね。萎縮しちゃってたんだと思う」

「私としては、少し業腹ですけどね」

そう言っって椅子に腰をかけるシャーリイの頭を優しく撫でる。

「シャーリイにはいつもお世話になってます。迷惑ばかりかけてごめんね？」

一瞬でシャーリイの顔が真っ赤になって「そ、そんなことっ!」と裏返った声であたふたし始める。

「果物が剥けまし……何かあったんですか？」

「な、なんでもないですわ! 今日のところはこれで失礼いたします。お姉さま、ご自愛下さいね」

「あ、お茶も持って来たんですけど……」

「お気持ちだけ頂いておきますわ。教会でしなければいけないこともありますし」

そう言い残して玄関に向かうシャーリイをリディアが見送りの為に果物と紅茶の入ったカップをテーブルに置いて追いかける。

「あ、そうですね。貴女に言っておきたい事がありましたの」

「何で、しょうか？」

少しだけ怯え顔のリディアにシャーリイは真面目な表情を浮かべて少女の肩に優しく手を置き、

「貴女は間違いなく自由になったのですわよ。もうフィラスやあの館での出来事に捕らわれる事はありませんわ。お姉さまに誠心誠意尽くしなさいな」

「は、はいっ！」

「良いお返事ですわね。じゃあ、これは私から貴女への個人的なプレゼントですわ」

アイテムストックジェムから大振りの紙箱を取り出してリディアに手渡す。

「で、でも……」

「そうですね、自由になった記念という事で。遠慮なさらずに良いですわよ」

愛嬌たっぷりのウィンクを残してシャーリイは帰っていった。見送るリディアはその姿が見えなくなるまで何度も頭を下げていた。

「エルリア様、シャーリイ様からプレゼントを頂きましたっ！」

ぱたぱたとベッドルームに駆け込んでくる。その手にはシャーリイから受け取った紙箱が大事そうに抱えられている。

「よかったね。何をもらったの？」

リディアが置いていったお盆からリングを摘みながら尋ねてみると、リディアは嬉しそうに箱に掛けられていたリボンを外し、蓋を開けた。

「お洋服です！　すごくかわいい！」

そこには手の込んだレースの刺繍で飾られた純白のワンピースが綺麗に納められていた。

「着てごらん」

「はいっ！」

リボンを箱に仕舞って服ごと抱きかかえて脱衣所に向かう。エルリアが紅茶を半分程飲んだ頃に着替えた姿で戻ってきたが、何故か寢室の入り口から入って来ない。

「どうしたの？」

「あの、笑わないでいただけますか？」

恥ずかしそうに顔だけを出すリディア。

「別にわらないよ？」

その答えを確認してからリディアがおずおずと部屋に入ってくる。

「……」

絶句してしまった。

「あの、やっぱり、変ですよ？ 私みたいなのがこんな綺麗なお洋服だなんて……着替えてきますっ！」

「ちよっと待った！」

「ふえっ？」

手招きをしてリディアを呼び寄せる。少女はかなり恥ずかしそうにもじもじとしながらベッド脇にやってきた。

少し時間を掛けてじつくりと眺める。途中で何度もうなずきながら。

「あ、あの、エルリア様……？」

「うん、うん。かわいいよ。すごく似合ってる。ごめんね、あまりにも似合ってて言葉が出なかったの」

「え、えっと……」

先程のシャーリィに匹敵するかのような勢いで頬を紅潮させたりディアが小さな声で「ありがとうございます、ございます」と俯いたままで答えた。

「また今度シャーリィにちゃんとお礼を言おうね」

「はいっ！」

「それでは、六十層に到達した辺りから『迷宮』内の雰囲気に変化した、と？」

四名の学者を目の前にしたエルリアが大きくうなずく。

「構造材と言うのでしうか、それまでは一層からずっと岩肌がむき出しのような作りでしたけど、60層からは明らかに整えられたような雰囲気になっていました」

「岩肌がむき出しなのではなく、表面処理がされていたということですか？」

興味深そうに眼鏡を押し上げながら一人の学者が身を乗り出す。その問いにうなずいて返す。

「ふむ……やはり下層に行けば行く程整えられているのでしうか」「いや、早合点する訳にはいきません。一部のフロアだけがそうなっているだけかもしれませんし」

「それはそうと、遭遇する怪物に変化は？ 50層くらいから魔物や魔族が多く出現しはじめるそうですが、やはり増加していますか？」

矢継ぎ早に投げかけられる質問に記憶を掘り起こしながら返答していく。

「そう、ですね。言われてみると魔物や魔族の出現率が上がっていたかもしれませんが。私が到達した64層はほとんどが中級魔族でした。中には上級魔族の姿もありました」

「ふむふむ……となると、下層は予想通り『魔界』と繋がっている可能性がありますね」

「『魔界』って何でしょうか？」

逆にエルリアが質問すると、学者の一人が不確定な空論という前提をつけながらも説明してくれた。

『魔界』というのは、人間が住む世界の対極に位置する世界で、その住人の全ては魔族で構成されており、魔族の秩序によって統治

されている世界ではないか、と言われているそうだった。

「じゃあ、『迷宮』は人間界とその世界を繋げるものだと？」

「あくまで仮定ですが、そう考えると辻褃が合うのですよ。突然出現した事といい、中から魔族や魔物、怪物どもが沸いてくる事といい。それに、この地というのが因縁めいているのですよ」

「因縁……？」

「はい。レムルアイランド王家に伝わる古文書に記されていた事ですが、この地は太古の昔に『魔王』と呼ばれる魔物を統べる者が封印された地でもあるそうです」

かなり理解不能な話になりはじめてきた。どこかの絵物語にありそうなシチュエーションだ。

「絵本を馬鹿にしてはいけませんよ。あれらの物語の中には実際に起こった事象を低年齢向けにしている物も多いんです」

昼休みや小休止を挟みながら夕方にまで議論と質問が交わされた。

「お姉さま、お疲れ様です」

ヘトヘトになって会議室を出ると、シャーリイが待ち構えていた。手には水の入ったグラスを持っており、エルリアに差し出す。

「ありがとうございます」

一口飲むと、檸檬の香りとはのかな酸味が口の中に広がる。疲れしている身体に心地よい。

「まだ体調が戻っておられないのに、学者達はお姉さまに無理ばかり」

唇を尖らせるシャーリイを宥めながら建物を出ると、ちょうどミサが終わった教皇と出会った。

「お疲れ様でしたの。是非同席したかったのじゃが、なかなか暇が取れない身でな」

「教皇陛下こそお疲れ様です。いつもお忙しそうにしておられますけど、お身体は大丈夫ですか？」

エルリアが問い返すと、教皇は「ふおふおふお」と笑ってから、「伊達に鍛えておらんよ」と快活に答えて自室に戻っていった。そ

れを一礼しながら見送ってから改めて家路につく。

「あ、そうだシャーリィ」

「何ですか、お姉さま」

「リディアに洋服ありがとう。すっごく喜んでたよ。上等なお洋服だからお出かけの時に着て行くってさ」

「そんなに高い物ではありませんのに……でも、喜んでいただけて私も嬉しいですわ」

門扉で別れを告げて歩いて自宅の方向に歩き始めると、少し離れた処にリディアが立っていて、エルリアの姿を認めると、嬉しそうな笑顔を浮かべて駆け寄ってきた。服は今しがたシャーリィとの話題に上っていたプレゼントされたワンピースだ。

「お帰りなさい、エルリア様」

「どうしたの？」

「お身体が心配でしたから、ご迷惑かと思ったのですが、お迎えに……」

少女の優しさが身に染みる。「ありがとう」と答えて優しく頭を撫でてやると、嬉しそうに目を細めるリディア。

「あ、そうだ。ついでだからシャーリィにその姿見せてあげようよ。喜んでたって言ったら嬉しそうにしてたよ」

「はい。お礼も言いたいのでお願いしても良いですか？」

急いで教会に取って返して宿舎に戻りかけていたシャーリィを呼び戻す。

「あら、リディアさん。どうなさったんですか？」

「あ、あのっ、素敵なお洋服をありがとうございました！」

ぺこり、と大きく頭を下げるリディアにシャーリィは少し照れたような表情を浮かべて、

「気になさなくて結構ですわよ。そうですわ、私のお下がりでもよろしければ何着か差し上げる事もできますけど、どうなさいます？」

「えっ……と」

困ったようにエルリアを見上げ、「好意は受けておくと良いと思うよ」という助言に「ご迷惑をお掛けしてごめんなさい、お願いします」と小声で呟いた。

「卑屈にならなくて良いですわよ」

シャーリィに案内されて教会宿舎に入る。リディアは珍しそうにキヨロキヨロとしたり、すれ違う修道女に頭を下げたりしていた。

エルリアにとっては見慣れたシャーリィの部屋に入り、リディアに座るように言いながら自らもソファに腰をかける。

「少し待っててくださいね。クローゼットの奥に仕舞いこんでますの」

シャーリィが寝室に引っ込んだのと同じタイミングで部屋の扉がノックされた。

「代わりにお願ひできますか？」

その声にリディアが「はい」と立ち上がって扉を開いた。

「おや、どちらさまかの？」

教皇が立っていた。

「教皇陛下」

エルリアが立ち上がると、リディアが驚いたように教皇をもう一度見てから、大慌てで深く頭を下げる。

「あら、お爺様。どうなさったのですか？」

「来客中だったかの。いや、用事という程の事ではないんじやが、夕食を一緒にどうかと思ってな。良いタイミングじゃからお二人さんもいかがかな？」

「ありがとうございます。紹介が遅れました」

エルリアがまだ頭を下げたままのリディアの横に移動して少女に頭を上げるように優しく言ってから、

「リディアです。先日はお世話になって本当にありがとうございますでした」

「あ、あ、ありがとうございますっ！」

「ふおっふおっふお。そうか、お主がリディアか。辛い思いをした

な、もう大丈夫じゃからな。お主に神のご加護を」

ゆつくりと手をかざすと、リディアの身体が淡い光に包まれる。

「？」

「祝福の光だよ」

「私なんかに……何だか申し訳ないです」

「こりゃ。私「なんかに」とは聞き捨てならんぞ。お主の命はお主にしか宿っておらんじゃ。それは神が与えたもうた偉大なる奇跡なのじゃぞ。人間に貴賤などない。お主は胸を張って生きれば良いのじゃ」

「ご、ごめんなさい」

思わぬお説教に再び頭を下げるリディア。

「それにしても、可愛い服じゃな」

一転して優しくなったその言葉にリディアは嬉しそうにシャーリイからの贈り物だと伝えると、教皇も目を細めて、

「シャーリイはいつも「妹が欲しい」と言っておったからの。ちょうど良い娘じゃないか？　のう、シャーリイや」

「お爺様っ！　余計な事はおっしゃらなくて良いですわよ！」

やっと戻ってきたシャーリイが手に持った数着の衣服を少し乱暴にリディアに押し付ける。

「お礼の言葉はもうお腹一杯ですから要りませんわよ。捨てるのも勿体無いだけですから」

その言葉を言った本人以外に笑いが起こる。あからさまに照れ隠しとしか思えない。リディアも笑顔を浮かべながら「ありがとうございます」とやはり礼を言ってお受け取る。

「そうじゃ。そんなにおめかしをしておるのなら外で食べるのも一興じゃな。エルリアさん、どこか良い店はご存知ないですか」

「うーん、そうですね……教皇陛下がご一緒だとすると、あまり庶民的過ぎるのも良くないと思いますし」

エルリアが紹介したのは個室も完備している、小洒落たレストランだった。

「週末なんかは予約が必要ですけど、今日はそんなに混んでいない
はずですから大丈夫だと思います」

「では、決まりじゃな。シャーリィは着替えるか？」

「いえ、このままで大丈夫ですわ」

「うむ、では行こうかの」

宿舎の入り口で待機していたリボックに外出すると告げると、警
護の者を、という話になったが、シャーリィとエルリアの二人が付
いてるのを見て「宜しくお願いいたします」と最終的にはリボック
が折れた。

「さて、エルリア殿」

首尾よく個室が空いていたので店主に頼んで使わせてもらうこと
になり、席に着いたところで教皇が言い方を改めた。くだけた話で
はなく、真剣な話だという事が察せられ、居住まいを正す。

「お主が触ったであろう本の正体の一部が掴めたぞ」

「本当ですか!？」

「うむ、とはいえ、極僅かな情報でしかないがな、聞くなかな？」

キセルに火を点して紫煙を吐いてからエルリアを見据える。緊張
の面持ちでうなずいて返すと、

「お主が触れた本は正に『禁書』に値する物じゃ。人の皮膚で装丁
された物でそこにはあらゆる怨嗟が封じられているという話じゃ」

確かに、本を開いたエルリアの脳裏を打ったのは膨大な人々の怨
嗟の声だった。そして、あの本の手触りは未だに忘れない。冷たい、
死人を触ったような手触りだった。

「とはいえ、その具体的な中身や効果などは未だにわからぬ。元々
は東方の国の錬金術師によって作られたとも、あらゆる悪を聖職者
が封じ込めたものとも言われておるようじゃが、真相まではわから
ん」

「そうですか……」

元の姿に戻る希望だったが、あえなくその光が潰えてしまう。肩

を落とすエルリアをリディアとシャーリイが心配そうに見守る。

「じゃが、対の本がある事だけがわかった」

「対の、本ですか？」

「どこにあるのかすらわからんし、もしかしたら存在すらしてない可能性もあるがの。この辺りはまだ教会本部で調査中じゃ。判明次第教えるでしょう」

「ありがとうございます。お手を煩わせてしまって申し訳ありません」

「いやいや、お主には何かを世話になっておるしな。さて、堅苦しい話は後回しにして、飯にしようかの」

ちょうど良いタイミングで前菜が運ばれてきたので一同は空腹を満たす事に専念しはじめた。

「リディア、食べれる？」

「は、はい。ごめんなさい、私、テーブルマナーとか全然わからなくて……」

「構わん構わん。無礼講というやつじゃよ。そうじゃ、明後日教会でテーブルマナーの講座があったじゃろ。シャーリイ、すまんが」

「わかりましたわ、お爺様。リディアさんを講座に招待するように手配しておきます」

「え？ え？」

「受けておくと良いよ。覚えておいて損はないからね。講座の料金は私が払っておくから、ね？」

エルリアにも言われてリディアはこくん、とうなずいて教会所属の二人に「宜しく願います」と頭を下げた。

料理は続き、デザートと食後の紅茶がテーブルに載ったところで店主が挨拶にやってきたので、教皇が代表して食事の礼と祝福を与えたところで店主が感極まって泣いてしまうというハプニングもあった。

「陛下、さっき食事前に堅苦しい話は後で、とおっしゃってましたけど」

デザートシャーベットを口に運びながらエルリアが尋ねると、紅茶を飲んでいた教皇は一つうなずいてから姿勢を正す。釣られて残る三人も先程と同じく姿勢を正した。

「『聖杯』を奪還してきてもらって間がないのは承知の上じゃ。依頼を一つ受けてもらいたい」

リディアが机の下でエルリアの手をきゅっと握る。『迷宮』に入って戻ってこなかった人間の話はごまんとあるし、むしろそっちの話の方が肥大化して生還する者のほうが少なく誇張されていると聞いたことがあった。

「大丈夫だよ」

小声でリディアを落ち着かせてから教皇と視線を合わせる。

「うむ、先だつての『聖杯』よりは楽じゃと思うのだが、これは教会所属の学者達からの依頼ということになる」

昼間に面会したいかにも研究者、といういでたちの男達を思い出す。彼らは『迷宮』の謎を解き明かす為に研究を続けていると言っていた。

「もしかして、『魔界』に行け、というお話でしょうか？」

「いやいや、そんな無茶は頼まぬよ。それにその話はまだ空論でしかないからの。今回頼みたいのは、六十層の地質調査みたいな物じゃ」

「地質調査？」

「彼の地でいくつかの土壌サンプルを取って来てもらいたいんじゃない。それを調べれば六十層のデータが取れるというのじゃ」

「はあ……」

理解しかねる話だったのだが、目的そのものはシンプルそのものだ。六十層まで潜って、何箇所かで土や砂、壁材を削りだして持って帰れば良いということらしい。

「でしたら、私もご一緒に」

「いや、採取程度だったら一人で行ったほうが早いと思う」

「でも、お姉さま一人を危険な目に遭わせるわけには……」

「大丈夫。可能な限り戦闘は避けるつもりだし、採取さえしちやえばエレベーターと転移魔法で一氣に戻って来るから2，3日で帰って来れると思うしね」

前回は『聖杯』の探索ということで戦闘が不可避だったという事もあってシャーリィやセシルに同行を頼んだが、今回のそれは一人で行った方がさっさと片付きそうだった。結界を張れば大抵の怪物や魔族の目は誤魔化せるし、よしんば見つかったとしても一人ならば逃走も容易だ。戦闘になったとしてもそう簡単に負ける気はない。

「リディア、留守番は頼んだよ？」

「はい。毎日お掃除とお洗濯をして、お食事の用意もしてお待ちしておきますね」

「ん、良い子だね」

―― エルリアの自宅 ――

柔らかく差し込む朝日に目を覚まし、時計を見ると午前6時半だった。ベッドの中で「うーん」と伸びをしてから暖かな布団から抜け出す。

少しだけ肌寒いのが、窓を開けるついでにベランダに出て外の空気を胸いっぱい吸い込む。朝特有の静かで、穏やかで、清らかな空気が風に乗って部屋にも舞い込んでくる。

空を見上げると雲1つない青空と暖かな日差しの太陽がレムルアイランドの街に朝を告げていた。

パジャマを脱いでクローゼットからシャリーイに貰った真っ白なブラウスと淡いピンクのチェックスカートを取り出して着替える。ブラウスには花の香りがついていて、シャリーイが言うには保管するときににおい入りの石鹸と一緒に入れておいたからだそうだ。

洗面所で顔を洗ってすっきりとしてからリビングを横断してエルリアの寝室へ。3日前からその部屋の主であり、リディアの主でもある少女は『迷宮』に赴いているのだが、いつ戻るかわからないので毎朝「もしかしたら夜中の間に戻ってるかも」と仄かな期待を抱きつつドアをノックする。

普段なら寝惚けた口調の返事があるのだが、何の返事もない。まだ帰宅していないのだ。

肩を落としながら扉を開き、窓を開いて空気の入替え。少し離れた処から朝市の呼び込みの声が風に乘って聞こえてくる。

「お天気良いし、お布団干しちゃおうかな」

シーツを剥いで布団をベランダの手すりに掛けて布団挟みで固定。枕も干してから剥いだシーツを洗い場に。続いて自分の寝室でも同じように布団を干してから掃除道具を取り出して部屋全体をさっと

履き上げる。

次に洗濯物を片付けようと思ったが、腹の虫が鳴き始めたので朝食に。

「エルリア様、まだ戻って来ないのかな……」

2、3日程度で戻ると言っていたが、今日で3日目。あの場所が非常に危険な所だということも、エルリアが赴いている場所が未踏破層であり、一步間違えれば命に関わる場所だという事を思い出して震える。

かまどに火種を入れて火が熾るのを待ちながら、シャーリィから聞いた『血風の魔女』の圧倒的な魔力と力の話を思い出して心を落ち着かせる。

『妖精騎士』のシャーリィは時間こそは決まっていなかったが、暇を見つけては毎日リディアを尋ねて来てくれていた。エルリアが『迷宮』に潜った初日などはセシルまで呼んで来て3人で楽しい話やエルリアの活躍譚などを聞いたものだった。それもこれも、リディアが寂しがらないように、不安にならないように、と気遣ってくれているのだ。

保冷庫から卵とベーコン、ソーセージを取り出して熾った火で熱せられたフランクパンにそれらの食材を入れて火加減を調節しながらじつくりと火を通す。同時にパンも火にかけてこんがり焼き上げる。

手早く朝食を済ませてから洗濯をして、シーツを物干しに掛けてから休む事なく買い物に。部屋の鍵をしっかりと掛けてからリズムよく階段を下りていく。

街をこんなに気持ちよく歩ける日が来るなんて少し前の自分では想像もつかなかった。貧しい家の長女として生まれたリディアは朝から晩まで働く両親の代わりに家事全般をこなし、弟や妹達の面倒も見なければいけなかった。13歳の誕生日に親から生活の為に自分が売られるというのを聞いて笑顔で「がんばる」と答えたものの、心の中ではひたすら泣き続けた。レムルアイランドに連れてこられ、

場末の娼館という劣悪な環境の中でまだ『商品』にならないから、と雑務全般と『商品』の女達のストレスの捌け口として使われて来た。殴られ、蹴られ、罵声を浴びせられ、時には火の点いた煙草を押し付けられた。

死にたいと思った事は何度もあったが、故郷で彼女の稼ぎを待っている弟や妹の事を思つて萎える氣力を奮い立たせてきた。

そんな地獄の中、手を差し伸べてくれたエルリアにはいくら感謝してもしきれない。故郷の家族にもエルリアは手厚い仕送りを約束してくれていたし、教会が打ち出した貧困層への支援政策は発表と同時に各国が協力の意向を表明していた。

色々と考えながら朝市に到着する。野菜や果物、肉類、乾物など色々な店が立ち並び、威勢の良い声を上げている。中には朝食を提供する露店も出ており、買い物客達で賑わっている。

「すみません、そのトマトをお願いします。あと、玉葱と……」

いくつかの店を回ってエルリアの為に食材を買い集める。エルリアはかなり良く食べるので買い込む量も必然的に多くなる。リディアが引き取られるまではほとんど外食で賄っていたそうだ。

紙袋いっぱい野菜や肉類を詰め込んだリディアが自宅に帰ると、扉の前に人が立っていた。

「あ、シャーリイさん」

「何ですの、その大荷物は」

ひよい、とシャーリイがリディアの荷物を受け持つて中身を確認。

「お姉さまの食材ですね。そろそろお戻りになる頃ですわね」

「はいっ。いつ戻って来られてもすぐにお食事が用意できるようにしておこうと思って」

鍵を取り出して扉を開け、シャーリイを招き入れる。ここ数日でシャーリイともすっかり打ち解けた。

札を言いつつ買い物袋を受け取って台所に行き、湯を沸かしながら生ものを保冷庫に入れ、野菜等も別の場所に収納していく。

「お昼はもうお食べになりましたか？」

紅茶を淹れてダイニングテーブルに座るシャーリーの前に置く。

「いえ、まだですわ。その誘いに来たのですけど」

でしたら、トリディアは自分が作る旨を伝え、シャーリーも快諾する。

出かける際に閉じた窓を再び開け放ち、心地よい外の空気を取り入れつつ買ってきた鶏胸肉とトマト、ピーマン、マッシュルーム、たまねぎ、大蒜などを取り出し、調理を開始する。

鶏肉に塩、胡椒を振ってから一口大に切り、野菜類も手際よく切っていく。壁に掛けていた鍋に水を入れ、フライパンも火に掛けてオリーブオイルと大蒜を熱して香りを出し、鶏肉を投入。水が沸いた頃にへたを除いたトマトをお湯の中に入れてゆつくりと30秒数えてから取り出し、水にさらして皮を剥く。

「ん……オリーブと大蒜の香りが良いですわね。鶏肉のトマト煮込みですか？」

「はい。エルリア様の大好物なんです。なので、少しでも上達したくて」

鶏肉をひっくり返しながら答えると、シャーリーもティーカップを置いて台所にやってきた。

「あら、白ワインは用意なさらないんですか？ 仕上げに使うと香りが良くなりますわよ」

「あつ、忘れてました……ワイン庫にあるので取ってきますから少しの間だけお願いしても良いですか？」

「もちろんですわ。そろそろ玉葱を加えても良さそうですわね」

リディアから木べらを受け取ってまな板に用意されている玉葱のみじん切りを入れてさらに熱を加える。その間にリディアはぱたぱたと小走りに部屋の隅にある小さなワイン庫に入って料理用の白ワインを出してきて再びシャーリーと交代。続いてセロリやニンジンも入れて炒めたあと、白ワインを入れてアルコールを飛ばしてから塩胡椒で調味した後、湯剥きしたトマトを荒く潰してからそのジュースも一緒にトマトを入れ、月桂樹の葉も入れて弱めた火で煮込む。

「手早いすわね。元々お料理は上手だったんですの？」

「はい。弟や妹が居ましたし、両親はずっと働いてましたから家事は私の担当だったんです」

「ご兄弟がいらっしゃるんですね。こんな事を言うのは不躰かもしれないけど、故郷に帰りたいとは思わなかったんですの？」

二人で調理道具の片付けをしながらシャーリイが尋ねると、リディアは迷いのない瞳でシャーリイを見つめ返し、

「私が戻っても両親が困るだけですし、エルリア様が仕送りをしてくださってますから」

主人を信頼しきった笑顔を浮かべる。

「これは……ちよっとズルいですわね」

「はい？」

「なんでもないですわ。でも、一度顔を見せに行くのも親孝行ですわよ」

「わかりました」

「良いお返事です」

二人でくすっと笑った頃に煮込みも終わり、大皿に盛ってから取り皿を二つと、パンを出してテーブルに並べる。

「それでは、いただきます」

「いただきます」

フォークをひとつとした時に扉がノックされる。エルリアが戻ってきたのであればノックなどせずに鍵を開けて入ってくるので、来客という事だ。

「私が出ますわ」

「いえ、シャーリイ様はお客様ですから」

腰を浮かそうとするシャーリイを押しとどめてリディアが扉越しに「どちら様でしょうか」と尋ねる。木の扉を超えて少しくぐもった男性の声が聞こえてきた。

『こちらはエルリア・レイモンドさんのお宅でしょうか？』

「はい。えっと、どちら様でしょうか？」

シャーリイがそつとりディアの背後に回り、少女の肩に手を置く。見知らぬ者の来訪である。用事に越した事はないし、エルリアにもそう言われている。

『エルリアの故郷から来ました。』彼』の友人のガイアⅡロックハートといひます。ここに居ると聞いてやってきました』

「え……？」 『彼』 っ て……」

一瞬混乱する。エルリアからは大雑把にはあるが、彼女が元々男性であったことや、呪いで女性になってしまっている事を思い出す。

「申し訳ありませんが、エルリア様は今ご不在ですわ」

シャーリイが代わって返事をする。左手はリディアの小さな肩に手を置いて少女を安心させようと務める。

『別の女の子の声！？ あの野郎一体どんな生活送ってやがる！』

扉越しに怒声が聞こえる。「あまり品の良い方ではなさそうですわね」と小声でリディアに声を掛ける。

「ごめんなさい。エルリア様がお戻りになるまでは誰も部屋の中に入れないように言いつけられていますので……」

再びリディアが口を開くと、男はしばらく黙った後、

『わかりました。それではこの手紙をエルリアが戻ったら渡して下さい。俺は3番地の宿にしばらく泊まりますから、そう伝えてもらえますか？』

扉の下の際間から一通の封筒が滑り込んで来て、男の気配が去っていく。

「お姉さまの故郷のお友達、ですか……」

「やっぱりお迎えしたほうが良かったでしょうか？」

おろおろとするリディアに封筒を拾い上げたシャーリイは差出人を確認してからリディアに手渡す。

「お姉さまがご不在なんですからお迎えしてもどうしようもありませんわ。それにしても、お姉さまの名は辺境まで響いてるんでしょうか……？」

それから2日が経過したが、エルリアが戻ってくる事はなかった。心配になったリディアは教会を訪ねてシャーリィに面会を求める。程なくして修道女にシャーリィの自室に案内された。

「エルリア様に何かあったんでしょうか……？」

我慢していた涙が瞳から零れ落ちる。シャーリィがハンカチでリディアの涙を拭きながら少女を慰める。

「きっと採取に手間取っておられるんだと思いますわ」

それにしても、時間がかりすぎている。とは口に出して言わない。言えない。

エルリアの実力ならば出発前に言っていたように3日もあれば戻ってくる筈だった。魔物や魔族と遭遇したとしても、彼女一人であれば撃退できるであろうし、帰途にしても40層まで戻ればあとは転移魔法を数回繰り返し返せば一気に地上まで移動する事も可能だと聞かされている。

何か不慮のトラブルがあったのかという疑念が心を過ぎる。

「エルリア様のお友達の方も毎日いらっしゃいます。エルリア様は無事なんでしょうか？」

「大丈夫ですわよ。お姉さまに万が一の事なんて……」

何が起るかわからない『迷宮』内において絶対という言葉は使えない。いかにエルリアが人間離れした身体能力や魔力を持っていたとしても、だ。

シャーリィとしては今すぐにエルリア搜索の為に『迷宮』に入りたいところではあるが、60層などという場所に単身乗り込むのは命を無駄にする事だとわかっている。仮にセシルや他の名だたる冒険者達に声を掛けたところで簡単に到達できるようなフロアではない。

「……信じて待ちましょう。大丈夫ですわ。お姉さまならきっと帰ってきます」

その言葉にリディアはこくん、とうなずく。

「私、『迷宮』の入り口に行ってエルリア様をお待ちしようと思います」

「危険ですわ。常駐の兵は居ますけど、いつ魔物が這い出てくるかわかりませんし、正直なところ、冒険者の中にも品の悪い者はいますわよ」

「でも、心配で家でお待ちするのが辛くて……」

「そのお気持ちはわかりますけど」

リディアを宥めるべく、言葉を重ねようとした時、『迷宮』の方
向から3本の信号弾が上がった。魔物が『迷宮』から出てきたのだ。
「こんな時にっ！ リディアさん、ここに居なさい。私は撃退に向
かいますわ！」

すぐに着ていた普段着を脱いで鎧下を着てからアイテムストック
ジェムからエルリアにもらった白銀の鎧を取り出し、着用する。

「いいですわね、絶対にここを動いてはいけませんよっ！」

こくこくとうなずくりディアを置いて身体強化の魔法を起動して
疾風のような速度で走り去る。残されたリディアはまだ尾が残る信
号弾の軌跡を見つめながら未だ帰らない主人の無事を祈る。

「エルリア様……」

――『迷宮』入り口近くの前線基地――

「状況を教えてくださいますか？」

前線基地の敷地内に常設されているテントでシャーリイが情報を
求めると、教会騎士団の兵が答える。各国の騎士団から精鋭が派遣
されているが、教会からも騎士団兵が派遣されている。

「出現している魔物は少数です。既に半数近くを撃退しております
が、低級魔族に苦戦しているようです。前線指揮官が魔物の攻撃を
受けて戦線離脱。シャーリイ様は指揮をお願いします。」

「了解しましたわ。怪我人と死者の搬送は忘れないようにお願いし

ますわね」

「『妖精騎士』が出陣したぞ！」

「押し返せ！」

白銀の鎧と盾で身を固めたシャーリイの姿を見て最前線の兵士達が俄かに活気付く。怪我人は多いようだが、死者は今のところそれほど多くは出ていないようだった。

ロングソードを抜いて祝福の魔法を掛けてから新たに出現した低級魔族に斬りかかり、その勢いのまま数体の魔族と魔物を倒し、一旦後退する。

「さっさと片付けますわよ！ 魚鱗陣形で突っ込みます！ 先頭は私が執ります。教会騎士団は先鋒を。各国のみなさんと冒険者のみなさんははその後をお願いします！」

訓練を欠かさない兵士達が一瞬で陣形を組み立て、その後釜に召集された冒険者達が立ち、勢いよく魔物と魔族めがけて突進する。

先頭を疾るシャーリイの背後から魔法兵の魔法と弓兵の弓が飛び、一足先に魔物の群れに襲い掛かる。

「神の加護と共にっ！」

一気に魔物の群れに切り込み、手当たり次第に斬りつける。当然ながら敵の攻撃はシャーリイに集中するが、

「聖光壁っ！」

魔法の盾と左手に持つ盾でそれらを防ぎ、攻撃を重ねる。周囲の騎士団や冒険者達もそれぞれ魔物を倒し、時には傷ついて戦線を離脱していく。

背後からは引き続き魔法の支援が行われ、聖職者達も傷を負った者を癒す。

「中級魔族ですっ！」

巨大な火の玉が打ち込まれ、10人近くが一瞬にして炭にされる。見ると一際巨大な魔族が出現していた。

「アークデーモンに、グレーターデーモンですわね……」

アークデーモンは対処可能ではあるのだが、グレーターデーモンは

間違はなく強敵である。魔法障壁があまりにも強力であり、魔法を付与した攻撃や魔法による攻撃すらも無効化してしまうという厄介な性質を持っていた。エルリア程の強力な術者であればなんとかするのだろうか……

「居ない方の事を言ってもしょうがないですわね」

とはいえ、退く事は許されない。シャーリィは決意を秘めて剣を鞘から抜き、神聖魔法を唱えて剣に込める魔力を高める。剣に嵌め込まれている魔石がその魔法を吸収し、魔族への一撃の威力を高める。

「神聖騎士団は楔陣形にてアークデーモンとグレートデーモンを！ 他の魔物は任せますっ！」

命令を発して15人の教会騎士団員を率いて魔族めがけて地を蹴って宙を飛ぶ。

「おおおおおっ！」

雄叫びと共に剣を振り下ろすが、魔族の魔法障壁に阻まれて決定打にならない。剣を退くと同時に呪文詠唱。

「白銀の矢……3連！！」

聖なる祈りを込めた魔法の矢が立て続けにアークデーモンに命中。打ち消しきれない矢がアークデーモンの魔法障壁を打ち破る。

「今ですわ！」

疲労が浮かび始めた身体に鞭打って再び斬りつける。魔法障壁を打ち破った効果もあり、魔族の片腕を切り落とす。続いて騎士団兵の攻撃が重なり、一体の魔族を打ち破るが、着地したシャーリィをグレートデーモンの豪腕が襲い掛かる。

「くっ……」

盾と聖光壁を二重にして辛うじて吹き飛ばされるのを抑えるが、耐え切れずに後ずさる。次の瞬間、魔族の放った多量の氷の矢が襲い掛かってきた。

騎士団兵5人が一瞬にして蹴散らされる。シャーリィも傷を負うが、まだ動ける。状況を確認すると、魔物や下級魔族の数は確実に減っており、退路の確保もできている。

「アルナス国軍と交代で先ほどの場所まで一旦退却！ 動ける者のみで陣を構成しなおして再び攻撃！」

自らも怪我人を背負って退路を駆ける。代わって先ほどまでシャーリイ達が戦っていた場所に紺を基調とした鎧を着た一団が入り込み、魔族と対峙する。

「お願いしますわね」

聖職者に怪我人を預け、残った騎士団員で陣を再構成。10人足らずになったので一塊になって再び突入の手はずを整えてから水を飲む。と、視線の先に一人の少女を捕らえた。死傷者を搬送する後衛の隅にリディアが居たのだ。

「何をしていますのですかっ！」

叫びかけた瞬間、背後の『迷宮』入り口から悲鳴が響く。振り向くと多数の火の玉がアークデーモンから放たれていた。

「っ！」

急いで聖光壁を展開。仲間の騎士団兵もそれに倣い、周囲の兵や冒険者達も各々の方法で身を守ろうとするが、威力が強く数名が爆風に吹き飛ばされる。そしてその火の玉の一つは後衛にまで到達し

……

「リディアさんっ！」

「リディアっ！！」

その声と同時に後衛陣を丸ごと包むような魔法障壁が張り巡らされ、火の玉を絡め取って丸ごと無効化してしまう。

「『血風の魔女』だっ！」

兵士の声に振り向くと、『迷宮』の入り口に聳え立つグレーターデーモンの背後にエルリアの姿があった。手にショートソードを持ち、眼前のアークデーモンを見据えている。

「お姉さまっ！」

眼前に現れた少女めがけてアークデーモンがその太い腕を唸らせ襲いかかる。

「聖光壁っ！」

かざした左手一本のみでその攻撃を難なく防ぐ。防御力に秀でたシャーリイでも無理な芸当だった。続けざまにさつきシャーリイが受けた攻撃と同じように氷の矢がエルリア一人めがけて大量に降り注ぐが、それすらもエルリアは己を包む魔法障壁とドレスの効果によって無効化してしまう。

「教会騎士団はエルリア様の援護を！ 他みなさんは魔族と魔物の掃討をお願いします！」

言い残して真っ先にアークデーモン目掛けて疾る。盾を捨て、ロングソードを両手に持って聖なる言葉を以って剣に神聖魔法を施し、アークデーモンの背後から斬り付ける。

「お姉さまっ！」

「シャーリイ、片付けるよ！」

ショートソードを片手に持ったままエルリアの魔力が爆発的に膨れ上がる。ドレスを飾る魔石がその裡に秘めた魔力を持ち主であるエルリアに集中させる。

「こっちですわ！」

牽制の数撃を放ちながら敵の注意をひきつける。周囲では教会騎士団や他国の兵士達がエルリアに集中しようとする魔物を食い止めていた。

「戦乙女の一人『盾を壊す者』ランドグリーズよ、その力もて。眼前に立ち塞がる邪なる者の盾を……打ち砕けっ！！」

結唱と同時にエルリアが翳した剣先から金色に輝く矢が衝撃と共に放たれ、グレーターデーモンの胸部に突き刺さる。パキン、という音と共に魔族を覆っていた魔法障壁が砕け散った。

「神聖なる我が父よ、その力を我が剣に！ 私達に仇なす穢れき者に神罰を！」

魔族目掛けてシャーリイが駆けながら上位付与呪文を詠唱。ロングソードが一層の輝きを増す。

「剣よ、その力を現せ！」

同時にエルリアも跳躍して手に持った剣に魔力を注ぎ、ショート

ソードの刀身が光の剣と化す。

「ああああああっ！」

重なった雄叫びと共に剣を振り下ろす。

斬

という音と共に二人が着地。その背後でグレートデーモンの身体が十字に切り裂かれ、塵となっていく。

リーダー格であろう魔族2体が消滅したことにより、魔物の群れは勢いを失くし、兵士達によって次々と駆逐される。

残党の掃討を任せてシャーリィが座り込んでしまったエルリアの下に駆け寄る。顔色が悪い。魔力と体力の消耗が激しいのだ。『迷宮』内で転移呪文を何度も繰り返して地表に戻った事で大量の魔力が消費された上に魔族との戦闘で魔力も体力も消費してしまったのだらう。

「大丈夫ですよ！？」

エルリアに肩を貸して立ち上がらせる。大きな傷は見られないので怪我をしているというわけではないようだった。そのまま基地まで運び、聖職者を含む医療班のテントまで連れて行く。

「エルリア様っ！」

基地の敷地内に入った時、リディアが二人を出迎えた。

「リディア……なんでこんな処に」

「お姉さまが心配で居ても立ってもいられなかったみたいですわ。危険だから教会に居なさいって言いましたのに」

「ごめんなさい……」

謝るリディアの顔は蒼白だった。無理もない。目の前で大規模な戦闘が行われ、怪我人や死者を目の当たりにしたのだ。そんな経験のない少女には刺激が強すぎる。

「怪我はない？」

自力で歩けるまでに回復したエルリアが少女の頭に手を置く。

「あ、はい。エルリア様は……？」

あらゆる魔法によって常人の数倍の治癒能力と疲労回復力を誇る

エルリアは既にある程度回復し、顔色も幾分良くなっていた。

「私は大丈夫。迎えに来てくれてありがとう。シャーリイもお疲れ様でした」

「い、いえ。私は任務ですから。それに、お礼を言わなければいけないのは私たちですわ。お姉さまのお陰でグレートデーモンの魔法から後衛のみなさんを守る事ができましたし、あの障壁を破ってしまうなんて、さすがはお姉さまです！」

いつもの調子で抱きつきたいところではあるが、鎧を着ているので自重する。と、エルリアがリディアから手を離してシャーリイの頭に手を置き、そのままくしゃくしゃと撫でる。

「抱きつくのはナシね？ 鎧が痛いから」

「そんなに不躰じゃないですわっ！」

―― エルリアの自宅 ――

「あーっ！ 疲れたっ！」

処理が残っていたシャーリイと別れてエルリアとリディアが自宅に着いた頃にはすっかり夜になってしまっていた。

「お食事の用意しましょうか？ それともお休みになりますか？」

冷たい果実ジュースを出しながら尋ねると、食事とお風呂のリクエストが飛んできたので急いで風呂を沸かしてから料理に取り掛かる。

「いっただっきまーす！」

風呂上りで長い金色の髪の毛をタオルで巻いたままのエルリアが嬉しそうにダイニングテーブルに着く。

「鶏肉のトマト煮込みかあ、食べたかったんだよね」

嬉しそうに口に運んで「美味しい！」と褒めてくれるのをむず痒い嬉しさを感じながら微笑み返す。練習の成果があったのが嬉しい。リディアも自分の分を皿に盛ってエルリアの正面に座ってフオーク

を動かすが、すぐに「お代わり!」という声が飛んでくる。

すごい勢いでエルリアは準備していた3人前とパン半斤を平らげてしまい、「お腹一杯」と満足そうに食後の紅茶を飲んでいた。

「あ、そうだ。エルリア様。ご不在の間にお客様が見えてました」

「お客様? 名前は聞いている?」

「はい。少し待っててくださいね」

玄関脇の棚から来客者の名前を記したメモと預けられた手紙を持ってきて、手紙をエルリアに渡しながら来客者の名前を告げる。

「ガイアが来たの? なんでこんな所に……」

手紙を開封して中身を読む。徐々にその表情に真剣味が帯びる。

リディアはその間に紅茶を淹れなおし、再び席に着く。久しぶりにエルリアが居るのがすごく嬉しかった。何より無事に帰ってきたのが本当に嬉しい。自然と口元がほころんでしまう。

「ふむ」

真剣な眼差しで手紙を見ながら手を口元に当てて何事かを考えていたエルリアだが、リディアの抑えきれない笑顔に気づいて表情を和らげる。

「心配かけちゃってごめんね」

「い、いえっ。私こそ戦場に行っちゃってすみませんでした」

「危ないからもう行っちゃダメだよ? 明日シャーリィにも謝りに行こうね」

「はい」

トントン、と扉がノックされる。

「ガイアかな」

エルリアが扉を開くと、そこには20歳手前くらいのがっしりとした身体つきの青年が立っていた。

「こんばんは、ガイア」

「こんばんは……ってなんで俺の名を?」

きょとんとする青年。前回訪問した時に応対した声や最初に訪問した時に応対した二人の女性の声とは違う声に戸惑う。それよりも、

今まで固く閉ざされていた扉が開いた事に驚く。

「久しぶりだね。元気だった？」

「え？ 俺、貴女とお会いしたことありましたっけ？」

当然のことながらエルリアが女性になった事をリディアはガイアにはまだ言っていない。

「あの、エルリアは戻ってますか？」

目の前に立つ可憐としか表現できない女性とその背に隠れるようにするさらに小さな少女の二人に戸惑いながらガイアが尋ねる。

「私が、エルリアⅡレイモンドですよ」

「……へ？」

目が点になる瞬間をリディアは生まれて初めて見た。

「えっとだな、もう一度確認するぞ？」

「もちろん。何度でも確認してくれていいよ？」

リディアが大慌てで食器を片付けたダイニングテーブルにエルリアとガイアが正面を向いて座っている。それぞれの目の前にはリディアが淹れた紅茶が香りと湯気を立ち上らせていた。

「君の名前はエルリアⅡレイモンドで、出身はナレの村」

「うん。田舎の村で大麦や小麦の畑が広がってて村の中央の広場で毎年収穫祭があったよね。3年前の収穫祭の時、ガイアがマールにダンスを申し込んでOKをもらったって有頂天になって「夢じゃないだろうな!？」って叫びながら川に飛び込んで……」

「わ、わかった！ 確かに君は間違いなくエルリアだ。それ以上言わなくていい」

夜風がそよそよと部屋に流れ込み、夜の喧騒が遠くに響いている。

「んで、なんで女の格好してるんだ？ 女装癖にでも目覚めたのか？」

「それだったらどれだけ良いか……女装癖だったら声までかわらないだろ？」

「そーいやそーうだな」

「はあ、イチから事情を説明するよ。リディア、悪いけど……」

「はい。客室にベッドの用意をしておきますね」

エルリアの注文を先回りしてリディアがパタパタと使っていない客室に駆けて行った。それを半ば呆然と見送るガイアがギギギギと首をエルリアに向けて、

「あの子は？」

「うーん……事情は複雑だけど、私が保護してる女の子、かな？」

「よくわからん……と、とりあえず先に村の状況を先に伝えとくか。小母さんからの手紙は受け取ってくれたか？　そうか。じゃあ……」

頭を抱えたガーランドが気を取り直して目の前にあった紅茶を一
口飲み、口を開く。

エルリア達の故郷の村でガーランドは流しの宣教師からエルリアの名を聞き、行方不明だった少年の消息を掴んだ村人達は驚きと安堵で包まれた。

2年前のあの日、エルリアは突如姿を消した。しかもエルリアの実家の庭にあった離れ丸ごとだ。

それに気づいたのはエルリアの母で、離れにある1週間前に亡くなった祖父の倉庫兼書庫を整理するエルリアに買い物を頼んで出かけたが、帰ってみると書庫があったはずの場所には何もなく、エルリアの姿も消えていた。

何らかの事故で建物が崩落してしまったのならその音を村人の誰かが聞いている筈だったし、瓦礫が残るはずなのだが、そんな物すら残さずに丸でそこには何も建っていなかったかのように倉庫が消えていたそうだ。

村を挙げて搜索が行われ、近隣の山や川もしらみつぶしに搜索されたが、エルリアの姿はなく、1年が経過した。

その間もエルリアの両親は隣町や属する国の首都にまで出向いてエルリアの姿を探したが、行方は杳として知れず、エルリアの母は心労から臥せってしまっていた。

「母さんはまだ臥せってるの？」

「いや、お前の話を聞いたとたんに飛び起きてたよ。最初は自分が行くって言ってただけど、距離が距離だからさ。年齢的にも体力的にも俺が行く事になったんだ。何よりもお前とは親友だからな」

その返事にほっと胸を撫で下ろす。エルリアとしても両親の事は気がかりになっていた。手紙を書く事も考えたのだが、国家間の戦争は終わったとはいえ、小競り合いは未だに続いているし、魔物によって引き裂かれた街道や情勢が不安定なこともあって、遥か離れた国のさらに辺境にある村に届く可能性は低いのだ。

「俺が来てよかったよ。小母さんが来てたら卒倒してたぞ。確実に」

「あはは……じゃあ、次は私だね。信じられないと思うけど……」

その前に、とエルリアは席を立ててワイン庫から出てきたロゼワインのコルクを開けてガイアの前に置いたグラスに注ぐ。それを見たリディアが保冷庫からチーズやサラミなどを出して皿に盛り付け、供する。

「リディアも座って。まだちゃんと話してなかったでしょ？」

「は、はい」

リディアがエルリアの隣に座るのを確認してから話を始める。祖父の書庫で見つけた禁書の話、それに触れた瞬間に起こった不思議な出来事、そして気づいたら『迷宮』に居てシャーリイ達と出会った事、それから1年間の間に起こった様々な出来事をかいつまんで話して聞かせる。

「確かに、信じられる内容じゃないけどな」

たっぷり1時間後、エルリアの話が終わってガイアが最初に口に出した言葉だった。

「でも、目の前にお前っていう証明が居るからには信じるしかないさそうだな」

空になったグラスをテーブルに置きながらうなづく。そこにリディアがワインを注ぎ、自分は水を飲む。

「びっくりした？ 私、本当は男の子なんだ。騙すつもりもなかったんだけど……ごめんね」

リディアが『買われて』娼館に勤めさせられていた事を考えて出た言葉だったが、リディアはふるふると首を横に振ってから笑顔を浮かべて、

「エルリア様はエルリア様です。私を助けて下さったんですから、私にとって恩人で、尊敬する人以外の何者でもありません」

「ありがとうございます、リディア」

黒髪をくしゃくしゃと撫でる。リディアは嬉しそうにそれを受け入れていた。

「さ、て、と。目の前でイチャイチャされるのもムカつくから寝ちまうかな」

冷やかにリディアが頬を紅く染めるが、エルリアはニヤニヤとガイアを見て、

「へえー、2年前の種まきの時にイビーと二人で抜け出したの知ってるんだけどな？」

「ばっ！　なんでそれを！？　絶対に誰も見てなかったはずだぞ！」
「甘い甘い。伊達に親友してないよ。今夜はお互いに飲み明かすしかないと思うけど？」

嬉しそうに目を細め、立ち上がったガイアを挑発的に見上げる。

言われたガイアはどっかりと椅子に腰を下ろしてワインの瓶を掴み、エルリアのグラスに中身を注ぎながら、

「忘れるまで吞ませるから覚悟しやがれ」

リディアは酒を飲まされるまでもなく眠くなって先にベッドに入ったが、深夜まで二人の飲み会は続いていたようだった。

「じゃあ、俺は帰るな」

「うん。気をつけて」

「お気をつけて下さい」

翌日の昼過ぎ、エルリアの安否を確認したガイアは村に戻ると告げた。

「あ、これを母さんをお願いしていい？」

「ん、確かに。それにしてもお前が名だたる冒険者か。昔のお前は考えもつかないよな」

「あはは。それは確かに、ね。でも元の身体に戻るまでがんばるしかないよ。ここなら情報も集まるし」

ガイアは手紙を受け取りながらうなずく。馬車が出る時間が近づいていた。

「これ、お弁当です。馬車で食べてください」

リディアが包みを手渡す。受け取ったガイアは礼を言いながらリディアの頭を軽く撫でる。

「また来るよ。お前も元の身体に戻ったらすぐに帰って来いよ」

「うん。みんなによろしく」

握手を交わしてガイアは馬車に乗り込む。間もなく鐘が鳴り響き、馬車が出発した。エルリアとリディアが手を振ると、ガイアも車内から手を振って別れを告げた。

「あら、お姉さま。どうなさったんですか？」

ガイアを見送った二人はその足で教会に向かった。受けた依頼の報告と、リディアの謝罪の為である。

「ほら、リディア」

促されてリディアが頭を下げてシャーリイに謝る。謝られたシャーリイは何で頭を下げられているのかわからない顔をしていたが、昨日の一件だと理解してそっとリディアを起こしてから、

「無事だったから良かったものの、もし貴女に何かあったらお姉さまが悲しみますわ。ですから、絶対に危険な所に行かないでくださいね？」

「はい。すみませんでした」

「神も貴女を許してくださいますわ。何といってもお姉さまの身を案じての行動ですからね」

魅力的なウイंकを返してから二人を教皇の執務室となっている迎賓室に案内する。

「おお、無事に戻ったか」

事務仕事をしていたのであろう教皇は席を立て二人にソファを勧め、シャーリィにお茶の準備を頼む。

「して、どうじゃった？」

「はい。時間がかかってしまったのは前回行った時より敵のランクが上がっていた為でした。中級魔族を中心に魔物も今まで遭遇した事もないような強敵だらけで、それを突破するのに時間がかかってしまいました。すみません」

「いや、お主が謝る事ではない。我らが無理を言ってしまったのが原因でお主を危険な目に遭わせてしまった。本当に申し訳ない」

エルリアがアイテムストックジェムからいくつかの小瓶を取り出して注文された物をテーブルに並べる。

「おっしゃられた通りにいくつかの場所のサンプルを採取してきました。お役に立つと良いのですけど」

「うむ、ご苦勞であった。この礼は後日シャーリィに届けさせる」
紅茶をそれぞれの前に並べた教皇の孫娘はエルリアが持ち帰った小瓶を眺めながら、

「見る限りですと、特に何の変哲もなさそうですね」

と素直な感想を述べる。ぱっと見た目、唯の砂にしか見えない。

「その辺を調べるのは学者達じゃからな。何か見つけてくれるじゃろうて」

しばらく60層周辺の話聞いていた教皇だったが、ミサの時間が近づいてきたらしく、残念そうに話を切り上げた。

「わしは明後日ここを発つ。そろそろ本国に戻らんと煩いのでな」

「残念です。また機会があったらお話を聞かせてください」

「うむ。お主がかかわった本の件は引き続き調べさせる事を約束しよう。何かわかればすぐに知らせるでな」

「ありがとうございます」

別れの挨拶をしてエルリア達は教会を辞する。夕暮れの道をゆっくり歩くエルリアの数歩先をリディアが跳ねるように歩いている。

「エルリア様、やっぱりご実家に帰りたいですか？」

振り向いて尋ねるリディアにエルリアは少し考えてから首を横に振る。

「今はそこまで考えてないかな。何といってもこの姿じゃ、ね」

「もし」

リディアが立ち止まって言葉を続ける。

「もし、元のお姿に戻ったらエルリア様はこの街を離れてしまうんですよね？」

悲しそうな表情が浮かぶ。リディアは既に帰るべき場所はない。

遠く離れた故郷はあるが、彼女が帰ったところで生活が苦しくなるだけだった。

「多分、私はこの街に残ると思うよ。気に入ってるし、年齢から考えても独り立ちしなきゃいけない。それに、リディアやシャーリイ、セシルさん達も居るしね」

ぱあっとリディアの表情が晴れる。萎れかけていた花が水を吸って元気を取り戻したようにエルリアの腕にまわりついて、嬉しそうな嬌声を上げる。

「さあ、帰ろう。昨日ゆっくり寝ようと思ったけど、ガイアに邪魔されちゃったからね。今日こそはゆっくり寝よう」

「はいっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1640q/>

迷宮物語

2011年4月1日21時10分発行